

竜  
王  
畑  
遺  
跡

大分県立芸術文化短期大学施設整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

# 竜 王 畑 遺 跡

—大分県立芸術文化短期大学施設整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2015

大分県教育庁埋蔵文化財センター

2015

大分県教育庁埋蔵文化財センター



北西上空から見た竜王畑遺跡



# 序 文

本書は、大分県教育委員会が県土木建築部施設整備課の依頼を受け実施した平成9年度及び平成26年度の大分県立芸術文化短期大学施設整備工事に伴う竜王畑遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する大分市は古代から現在に至るまで豊後国及び大分県の政治、経済、文化の中心地としての役割を果たしてきました。竜王畑遺跡が所在する上野台地の南側低地部には古国府の地名や印鑑社いんにゆくしゃがあることから、かつての豊後国府の所在が想定されていきました。しかし、近年の調査によってむしろ上野台地に国府の所在した可能性が論じられるようになってきました。このような状況にあつて竜王畑遺跡の発掘調査成果を刊行することは、豊後国府に関する重要な資料として大きな意義があるものと考えられます。

本書が学術研究の資料として広く活用されるとともに、竜王畑遺跡の将来的な保存・活用の資料となることを願っています。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり多大な御支援・御協力をいただきました関係各位に対して心から感謝申し上げます。

平成27年3月27日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所長 松 村 洋 一



# 例 言

- 1 本報告書は、大分県教育委員会が平成9年度及び平成26年度に実施した県立芸術文化短期大学施設整備工事に伴う竜王畑遺跡発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、大分県土木建築部施設整備課の依頼を受けて大分県教育委員会が実施した。
- 3 遺物の整理作業、実測・トレース・写真撮影は、大分県教育庁埋蔵文化財センター（以下、センターという。）で実施した。
- 4 出土遺物及び関係資料は、センターで保管している。
- 5 本書で使用した地形図（1/25,000）は国土地理院作成のものを利用した。
- 6 本書の執筆・編集は、センター県事業班 原田昭一・小林昭彦、資料管理班 高橋信武、遺構図の整理は友廣美和が担当した。
- 7 本書の作成にあたり、大分市教育委員会 池邊千太郎・五十川雄也の両氏には関係資料の提供や多くの御教示をいただいた。記して感謝したい。

# 目 次

序 文	
例 言	
第1章 調査の経過と概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の概要	1
第3節 調査組織の構成	2
第2章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的・歴史的環境	2
第3章 調査の成果	5
第1節 竜王畑遺跡の調査（平成9年度）	5
(1)遺構の概要	5
(2)古墳時代の遺構・遺物	5
(3)古代の遺構・遺物	9
(4)中世の遺構・遺物	31
(5)平成9年度の試掘調査	48
(6)小結	50
第2節 平成26年度の調査	50
(1)調査の概要	50
(2)出土遺物	54
第4章 遺構と遺物の検討	57
第1節 遺構	57
(1)建物の変遷	57
(2)掘立柱建物の検討	59
第2節 遺物	64
第5章 総括	68

# 図 版 目 次

第1図	竜王畑遺跡位置図（国土地理院1/25,000「大分」）	3
第2図	竜王畑遺跡周辺1/5,000地図	4
第3図	古墳時代の竪穴建物平面図・出土遺物	6
第4図	SD3出土遺物実測図	8
第5図	竜王畑遺跡古代等遺構図	9
第6図	SB1実測図	10
第7図	SB2・SB4実測図	12
第8図	SB3実測図	13
第9図	SB5～7・SB23平面図	14
第10図	SB6-P1・SB8・SB25・SB27実測図	15
第11図	SB9・SB9-P16実測図	16
第12図	SB10・SB11、SB11-P1平面図	17
第13図	SB12・SB13・SB20実測図	18
第14図	SB14・SB15実測図	19
第15図	SB16～19実測図	20
第16図	SB24実測図	21
第17図	SB21・SB22・SB26実測図	22
第18図	SD1平面図・層序図（B6区・C7区）	23
第19図	SD1・SD2平面図・層序図	23
第20図	SD1出土遺物実測図2	24
第21図	SD1出土遺物実測図	25
第22図	SD1出土遺物実測図	26
第23図	SD1出土遺物実測図	27
第24図	SD1・SD2平面図・層序図	28
第25図	SD2出土遺物実測図	29
第26図	SD1・SD2出土遺物実測図	30
第27図	SD5と出土遺物実測図	31
第28図	SD6・SD7と遺物出土状態実測図	32
第29図	B2～B5区・SD6とSD7の中間出土瓦実測図	33
第30図	SD6・SD7平面図・層序図	34
第31図	B2～B5区・SD6とSD7付近の出土遺物実測図	35
第32図	SD13平面図・断面図	36
第33図	SD13出土遺物実測図	37
第34図	SK1平面図・断面図	37
第35図	SK1出土遺物実測図	38
第36図	包含層等出土遺物実測図	39
第37図	I区包含層出土遺物実測図	40
第38図	包含層等出土遺物実測図	41
第39図	包含層等出土遺物実測図	43
第40図	包含層等出土遺物実測図	44



第41図	包含層・表面採集等遺物実測図	45
第42図	攪乱層出土遺物実測図	47
第43図	芸術文化短期大学南部試掘調査の位置と試掘溝の層序	49
第44図	芸術文化短期大学試掘6トレンチ出土遺物実測図	50
第45図	上野遺跡群調査区配置図(1/1,000)	51
第46図	上野遺跡群2・3区平面・断面図(1/100)	51
第47図	上野遺跡群4・6・7・10区平面・断面図(1/100)	52
第48図	上野遺跡群9・11・13・14区平面・断面図(1/100)	53
第49図	出土遺物実測図(1)	55
第50図	出土遺物実測図(2)	56
第51図	建物変遷図	58
第52図	桁行長と平面積の相関関係図	60
第53図	出土遺物(土器・陶磁器類)編年図	67
第54図	竜王畑遺跡周辺の字名	69
付図	竜王畑遺跡遺構配置図	

## 表目次

上野遺跡群発掘調査結果一覧	53
竜王畑遺跡及び周辺官衙関係遺跡の掘立柱建物一覧	61
竜王畑遺跡遺物観察表	70

## 写真図版目次

写真図版一	上 真上からの全景	下 SB13・SB14・SB15周辺	
写真図版二	上 SH1・SB1周辺	下 E9区から見た西部地区	
写真図版三	上 H10区から見たSH2周辺	下 東部の遺構検出作業風景	
写真図版四	上 F9区から見た北側調査区	中 築地出土の須恵器坏蓋	下 SD1出土の鬼瓦ほか
写真図版五	上 C9区から見た東側調査区	下 C9区から見た北東側調査区(手前はSD1・SD2)	
写真図版六	上 C9区から見た中部	下 G12区から見た北東側調査区	
写真図版七	I9区SD1の遺物出土状態(西から)	I9区SD1の遺物出土状態(東から)	SD1の遺物出土状態
写真図版八	上 D7区SD2の掘下げ(第24図)	中 I9区SD2(西から)	下 D7区SD1の掘下げ(第24図)
写真図版九	SD6・SD7・調査区北西隅・SD7の遺物出土状態	SB1-P1・D7区SD1の掘下げ	SB6-P1・SB1-P13
写真図版十	上 G9区から見た南東部調査区	下 SB9周辺の遺構	
写真図版十一	上 B7区付近から見た南東部	下 築地遺構(SD1・SD2)東端部の調査風景	
写真図版十二	上 F10区から見たSB13・SB14・SB15・SH12	中 H8区周辺のSD1・SD2・SD3	下 左の隣接写真
写真図版十三	上 H11区から見た北西側調査区(手前はSB14)	下 E12区から見た北東側調査区	
写真図版十四	上 築地遺構(SD1・SD2)の東端部	下 SB9・SB10周辺遺構	
写真図版十五	上 SB1(南から)	中 SD13の調査風景	下 発掘風景
写真図版十六	上 I9区東端のSD12(東から)	下 SK5の掘下げ	
写真図版十七	上 SD6・SB4の検出状態	下 SD13近景	
写真図版十八	上 短期大学構内の試掘風景	下 一般見学者のための現地説明会	
写真図版十九～二十九	遺物写真		
写真図版三十	平成26年度の試掘状況		

# 第1章 調査の経過と概要

## 第1節 調査に至る経緯

平成8年4月、大分県立芸術文化短期大学の整備に関して隣接する大分市上野丘所在の大分大学所有地内にあるあけぼの学園跡地も加えて行なう事業が予定された。予定地は周知遺跡内であるため、大分大学と協議を行い、同年5月24日から30日に短期大学構内で、7月22日から30日まであけぼの学園跡地で試掘調査を実施した。

その結果、あけぼの学園跡地全体に縄文時代から戦国時代の遺構・遺物が検出された。特に奈良時代後半から平安時代前半の掘立柱建物は1mを超える方形平面の柱穴をもち溝遺構とともに整然とした方位を示し、国衙及びその関連施設であった可能性が指摘された。戦国時代は16世紀後半ごろの溝遺構があり、北西側に所在する大友氏の館跡である上原館に係る遺構と考えられた。以上の試掘調査を受け、次年度に本調査を行うこととなった。なお、平成26年8月4日～21日に実施した発掘調査の成果は第3章第2節にまとめた。

## 第2節 発掘調査の概要

平成9年（1997）7月3日から調査地に残る産業廃棄物撤去の立会をし、4日から重機での表土剥ぎを東北部から開始し29日に終了した。排土は調査区外東北隅に仮置き集積した。14日から作業員による遺構検出作業を始める。28日段階で調査区の約3/4にあたる東部を検出し終わる。弥生時代の方形堅穴建物・溝状遺構、8世紀から9世紀の大型掘立柱建物跡・溝状遺構・方形を含む大型の柱穴群を検出した。30日、文化財保護委員の賀川光夫・小田富士雄氏の指導をいただき、山中敏史氏に次回指導を受けることが決まる。

8月28日から芸術文化短期大学構内中心部の人力による試掘開始（試掘日：8月28日・29日、9月1日・2日）。試掘溝の位置は管理棟の南側に2、図書室の東側に1、芸術棟の東側に1、ダイヤモンド広場の中央に1、学生会館と特殊教育棟との間に2、体育館の南東側に1の8箇所である。調査の結果、以前の施設建設時に旧地形の南部を削り、その土砂を北側にかぶせていることが判明した。造成工事の影響を受け、遺構・遺物包含層が全く残っていないのは管理棟南側・図書館東側の二箇所と芸術棟東側試掘溝の南半分である。その他の部分では古代・中世の遺物包含層が遺存するので、その下位には遺構が残っているとみられる。

10月27日。文化課・短大事務局・施設整備課・財政課との会議があり、あけぼの学園跡地において建物を建てる所以外は緑地帯・駐車場として使う方針が決まる。11月13日、文化庁岡村道雄主任文化財調査官の指導を受け、以下の意見をいただいた。

1. 重要な官衙遺跡と認められ、全面保存が望ましい。
2. 遺跡の性格についての評価は、現調査区だけの判断でなく、周辺の調査を踏まえてなされるべきである。
3. 保存策として、盛土し硬化面（アスファルト等）で覆うことが望ましい。これは暫定的保存措置として有効である。
4. 保存は事業地内保存をし、その際、地表面表示が前提となる。

12月7日、遺跡説明会を現地で開催し、約200人が参加した。遺跡の取扱いについては、文化庁の指導を受け、当初予定されていた調査対象地の開発は遺構面を破壊しない程度に止めることとなり、確認した遺構は現地に残されることになったが、時期ごとの年代把握のため遺構に対して小規模の発掘を行うに止め12月26日、調査を終了した。その後、1月7日から月末まで遺跡面に厚さ50cm程度の砂を敷き、旧表土を被せて遺跡をそのまま保存して現地を撤収した。

### 第3節 調査組織の構成

調査組織（職名は当時）

調査主体 大分県教育委員会

調査総括 文化課長 後藤 一郎

埋蔵文化財第二係主幹 清水 宗昭

調査担当 同 副主幹 高橋 信武

同 嘱託 吉野 公紀

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的・歴史的環境（第1図）

竜王畑遺跡は大分市上野丘字竜王畑および道東に所在し、上野遺跡群に含まれていた。

大分市街の南方に東西に延びた上野台地の東端にあり、北側には道路を挟んで6mほど低く大分県立芸術文化短期大学がある。東北側は斜面で約4m下に平坦地があり、民家・畑がある。東側は崖で、約14m下に北東から南西に細長い平坦地がある。

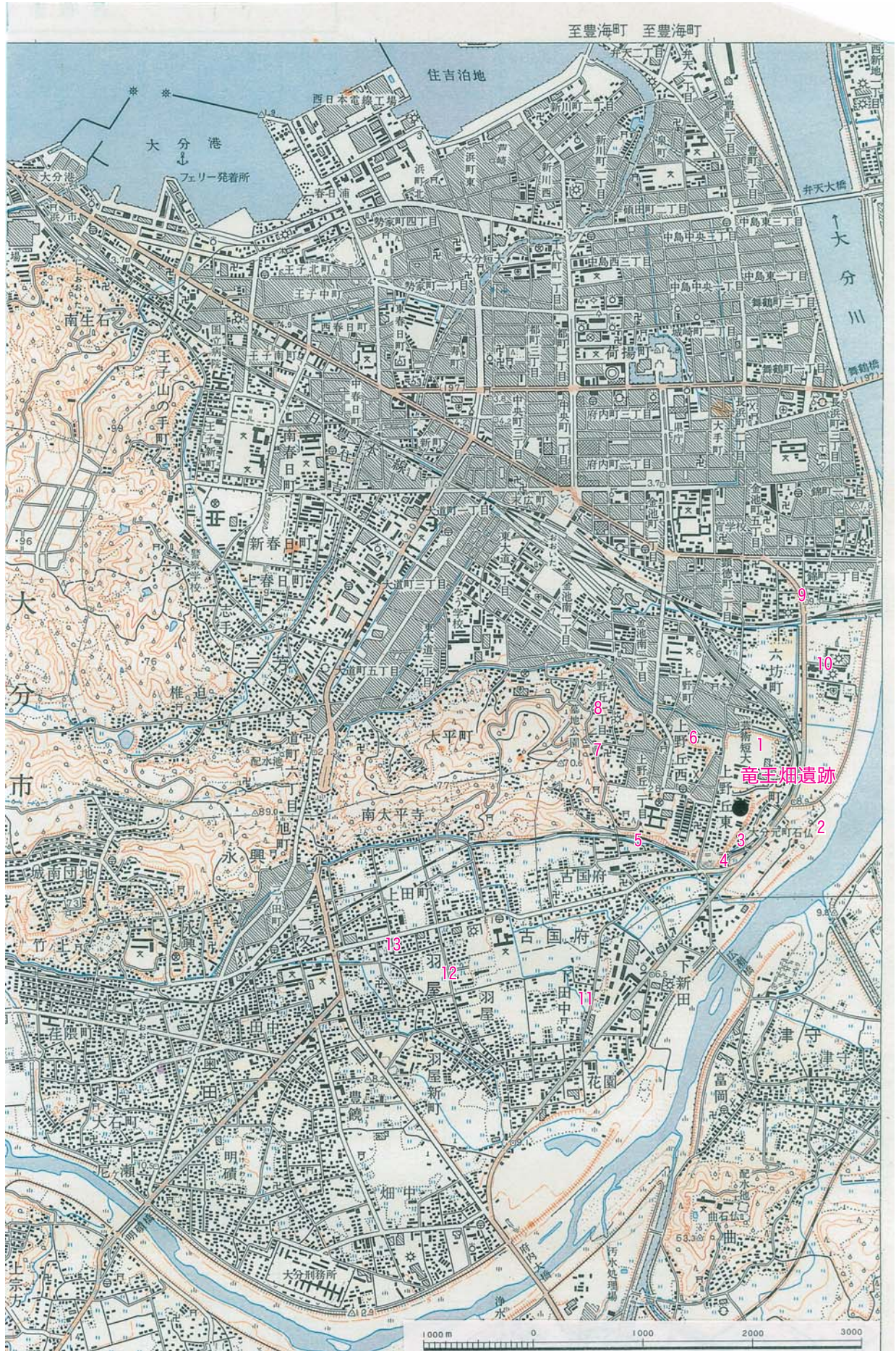
古墳時代の遺跡には丘陵の北東隅に前方後円墳である大臣塚古墳(1)が、台地の南崖面には岩屋寺横穴墓群(5)があり、居住遺跡としては上野大友館跡から竪穴住居跡が発見されている。

古代の遺跡も多い。18世紀末の「豊後国志」以来、豊後国の国府は古国府地区にあったと想定されていた。国印を保管する印鑰社(11)があることも根拠とされ、総社についても言及された。古国府では開発に伴う発掘調査がたびたび行われてきたが、古代の遺跡が発見されたことはなかった。近年、古国府の西側地域でやや古い時期の公的遺跡が発見された。羽屋井戸遺跡(13)、羽屋園遺跡(12)では、7世紀後半から8世紀初頭の倉庫・大型掘立柱建物などが発見され、これらはこの付近の条里遺構とは異なる方位を示す。国郡里制に先立つ評段階の施設であった可能性が指摘されている。目を台地上に転じると、西部の標高35m前後の場所にある上野廃寺跡(8)では、東西26m・南北15mの版築状基壇上に礎石建物跡が確認された。出土遺物には百済系単弁軒丸瓦・複弁七葉蓮華紋軒丸瓦・豊後国分寺創建時の扁行唐草紋軒平瓦があり、8世紀～9世紀代と考えられている。また、基壇の下層直下にも掘立柱建物があり、7世紀中頃以降の須恵器が伴出している（讃岐和夫1999）。大友館跡内では9世紀後半～10世紀代の溝が検出されている（讃岐和夫他2012）。

一方、古代官道に伴う駅家はこの付近に想定されている。「延喜式」に記載されている高坂駅に関連すると見られる地名が「宇佐大鏡」にある。勝津留島の四方の境として「東は限る市河 南は限る岩屋寺 西は限る高坂横道 北は限る市河」とあるのがそれで、高坂横道は上野台地を縦断する道に比定されている。岩屋寺石仏(4)の西側から始まり、円寿寺の東側を通り、上原館跡のやや東を通る直線道路である。駅家も付近に存在したと考えられているが、具体的な場所は未確認である。

調査区の南方向90mほどの距離の崖面に平安時代の石仏、元町石仏（2国指定史跡）がある。これは阿蘇溶結凝灰岩の崖面に薬師如来坐像を中心に、毘沙門天・不動明王・衿羯羅童子・制吒迦童子が刻まれたもので、薬師如来坐像は像高307cmで丸彫りに近い厚肉彫りであり、白杵石仏・菅生石仏その他県南部の石仏と類似した作風である。11世紀後半～12世紀後半の造立とされている。近年覆屋を設置する際の発掘調査では越州窯青磁や緑釉陶器を含む9世紀～11世紀の遺物が出土している（大分市教育委員会1996）。元町石仏の背後の丘陵上面の字名は惣社山である。また、高坂横道の西側にある円寿寺は惣社山円寿寺を号している。普通、総社は平安時代に国司が任国内の有力な神社を国府近傍に合祀した神社のことである。

このように上野台地一帯は国分寺創建期の瓦をもつ寺院があり、付近に駅家の存在が想定されること、総社に由来するとみられる惣社山の字地名があることなどに加え、今回の竜王畑遺跡の調査を契機に国府の所在地とし



第1図 竜王畑遺跡位置図 (国土地理院 1 / 25,000 「大分」)

て有力な地域と考えられるようになってきた（註7）。

元町石仏の西側、竜王畑遺跡の南西70mで民間開発に伴う発掘調査で須恵器円面硯が土坑から出土し（五十川雄也2013）、公的性格をもつ遺跡の広がりを示す(3)。



第2図 竜王畑遺跡周辺1/5,000地図

中世になると、竜王畑遺跡の西側約 250 m には大友氏の上原館跡(6)が築かれ、南側には土塁が残る。竜王畑遺跡と館跡との間には現状では埋め立てられて顕著ではないが、北方から浅い谷が入り込んでおり、それを館の東縁に利用している。西部の土塁は 15 世紀後半～16 世紀前半と、16 世紀後半に積まれている（河野四郎他 2001）。金剛宝戒寺(7)は 1307 年に西大寺興尊により中興されている。豊後国守護であった大友氏の館跡は北側の沖積地にもあり(9)、菩提寺であった万寿寺(10)や町家などが周辺に広がる中世大友城下町跡がある（9・10 周辺の低地部）。中世の豊後国の中心部は上野台地から平野部に降りたのである。1586 年、島津侵攻により城下町は焼亡し、その後、近世城下町が北西側の海岸部に造られた。近世府内城下町跡である。その範囲は明治時代の地図に市街地として表示された範囲に重なる。

#### (引用参考文献)

- 出田和久 1987 「豊後の国府」・「古代の駅制」『大分市史 上』大分市  
大分市教育委員会 1996 「国指定史跡大分本町石仏保存修理事業報告書」  
讃岐和夫 1999 「上野遺跡群（上野廃寺跡）」『大分市埋蔵文化財調査年報 vol. 10』  
讃岐和夫・後藤典幸 2012 「上野大友館（上原館）跡第 5 次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報 vol. 12』  
五十川雄也 2013 「上野遺跡群第 14 次調査」『大分市埋蔵文化財調査概要報告 2012』。  
河野四郎・小住武史・羽田野裕之 2001 「上野大友館（上原館）跡第 4 次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報』  
vol. 12』

## 第 3 章 調査の成果

### 第 1 節 竜王畑遺跡の調査（平成 9 年度）

#### (1)遺構の概要

竜王畑遺跡の調査範囲は南北に細長い丘陵のほぼ北端の全体に該当し、北側には道路を挟んで 6 m ほど下に県立芸術文化短期大学本体がある。東北側は斜面で、約 4 m 下に平坦地があり、崖際まで畑・民家がある。東側は崖で約 14 m 下に北東から南西に続く細長い平坦地がある。崖は南に続く。遺跡の南側は同じ程度の高さの面が約 350 m 続いて崖縁に至る。竜王畑遺跡には大分大学附属「あけぼの学園」の建物があったが、前年の試掘調査時点には撤去されており、本調査時点では更地になっていた。地面は平坦で、北側の短期大学敷地との間に人工的な段差があるが、本来は滑らかに連続していたとみられる。

調査は真北を軸にした東西 10 m、南北 8 m の方眼を全面に設定して行った。調査開始時点では記録保存を前提にしていたが、間もなく官街遺構である可能性が高まり、調査指導委員会・文化庁の意見により内容把握に方針転換した。共通の方位をもつ数期の遺構群が存在することが分かったため、掘下げは各期の時期を把握するだけにし、極力発掘部分を少なくした。従って、全ての遺構は完掘しておらず、部分的に試掘するに止めている。

検出した遺跡と遺物は、旧石器時代剥片・縄文時代晩期の土器・古墳時代前期の縦穴建物跡と溝状遺構・古代の掘立柱建物・築地遺構・ごみ穴等である。

なお、上野遺跡群に含まれていた竜王畑遺跡は平成 26 年 8 月 26 日付で周知の埋蔵文化財包蔵地として新規登録し、その範囲は旧あけぼの学園部分とした。

#### (2)古墳時代の遺構・遺物

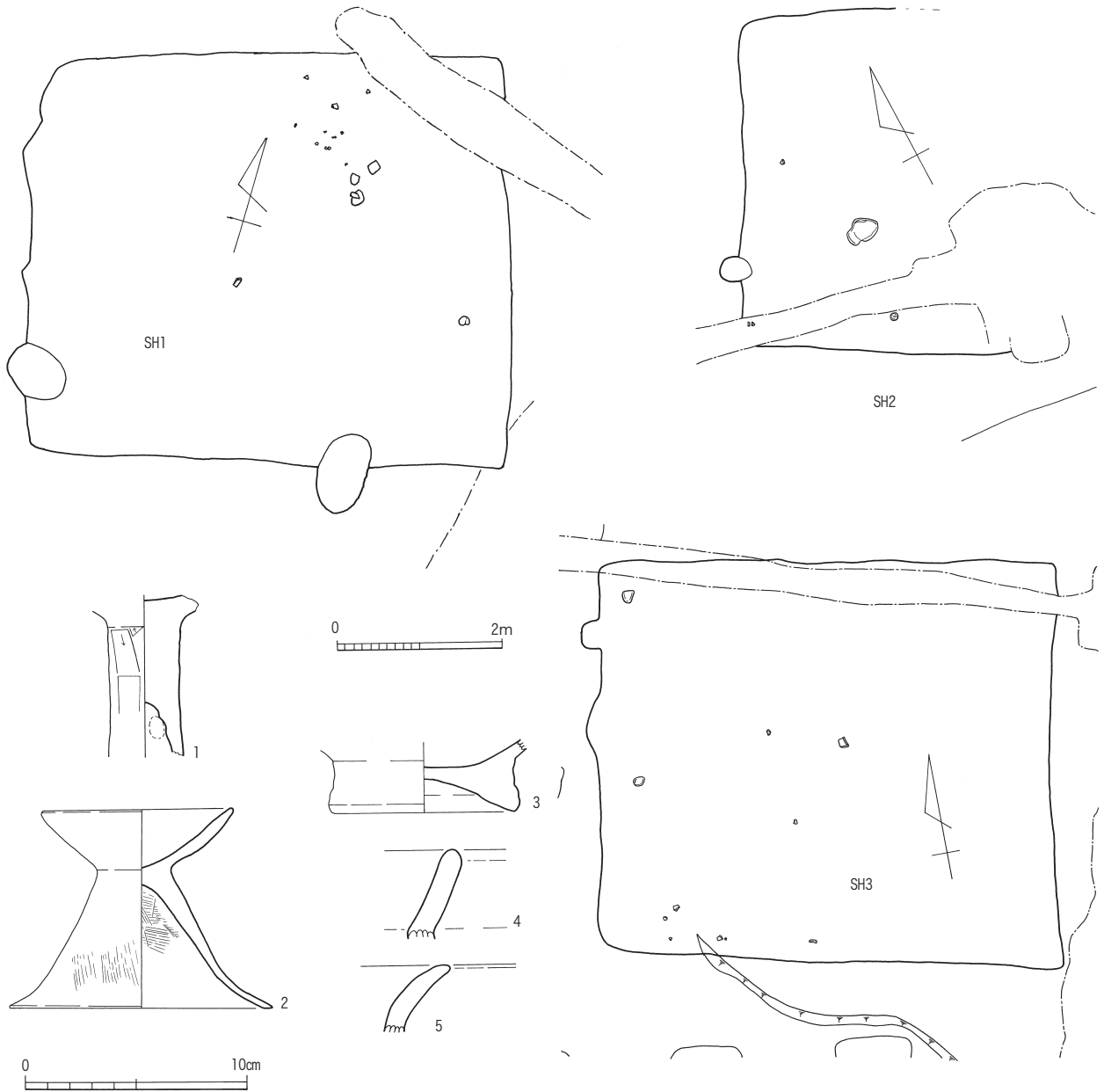
平面形が方形の遺構 3 基を検出したが、内部の掘り下げは行わなかった（SH1～3）。規模と形態から縦穴建物跡とみられる。出土遺物は検出面で出土した土器だけであるが、本遺跡の攪乱部分や SD3 出土遺物の存在から判断してもこれらは古墳時代初頭頃の遺構であると思われる。

### 竪穴建物跡（第3図）

SH1 調査区西部、B 8・C 8区に位置し、東西5.8m×南北4.9mの規模である。

### 出土遺物（第3図）

第3図1は土師器高坏で、脚部外面はへら削り整形されている。出土部分は円筒状だが脚部は急に広がるとみられる。



第3図 古墳時代の竪穴建物跡平面図・出土遺物

SH2 調査区南東部のF 10区南東部で検出した。規模は南北4.1m×東西3.2 + αmである。東部は輪郭を確認できなかった。2は図上復元した土師器高坏である。直径8.2cmの坏部に直径11.8cmの大き目の脚部がつく。器面の調整は坏部は横方向のナデが最終的に残り、脚部は刷毛目の後、上部はナデ消す。器高9.0cm。

SH3 G 12区を中心に検出し、東西5.8m×南北4.8mの規模である。3（G 12区2）は縄文時代晩期末頃の深鉢形土器の底部で、最大直径8.0cm。器面は粗いナデ調整されている。4（G 12区4）は土師器甕形土器の口縁部である。5（G 12区1）は土師器甕形土器の口縁部である。

以上、点数は少ないが竪穴建物跡の検出面では縄文時代晩期・古墳時代前期の遺物がみられる。縄文土器は混入とみられ、これらの遺構の所属時期は古墳時代と考えられる。

### 溝状遺構 (SD3)

調査区の南東部にL字形に折れ曲がった状態で検出した溝状遺構である。G13区からH8区まで、SB9とSB14の西部に重なり、直線的に約40m続き、F8区で東に直角に折れ、東南東方向に長さ約9m続いている。この遺構は平面形を確認しただけであり内部を掘り下げていないが、検出面にある弥生土器・古墳時代初頭の土器と古代の土器1点を発掘した。

### 出土遺物 (第4図1～26)

6～22は甕形土器である。6(H9区SD3)は胴部から口縁部が鋭く屈折した器形で、器面は刷毛目調整している。口径13.8cm。7は口縁部の1/6破片で内外面とも刷毛目調整している。8は内面は全て刷毛目調整し、外面はナデ調整。口径16.4cm。9(H9区SD3)は器面調整は刷毛目を多用し、口縁部外面から胴部内面をナデ消す。口径17.0cm。10(H9区SD3)は古墳時代の土師器甕形土器で、胴部内面はへらミガキを部分的におこない、外面は刷毛目、その他は横方向のナデ調整している。口径10.6cm。11(H9区SD3)は内面はへら削りの後にミガキを加え、口縁部は横方向のナデ、胴部外面は刷毛目の後に部分的にへらミガキを加えている。口径8.4cm。12は口縁部の1/6破片で胴部内面を横・斜め方向にへら削りし、その他を刷毛目調整している。13(H9区SD3)は内面を刷毛目調整し、その他を横方向にナデた古墳時代の甕形土器である。口径14.0cm。14は口縁部の1/5破片で両面とも刷毛目調整し、上端を横方向にナデている。15(H9区SD3)はやや外湾気味の口縁部で、器面は刷毛目調整だけがある。16(H9区SD3)は口縁部の中位が膨らむ。器面調整は刷毛目である。17(H9区SD3)は直線的な口縁部破片である。両面とも刷毛目調整のままになっている。19(H9区SD3)は内面はナデ、外面は刷毛目後に横方向にナデた口縁部である。20(H9区SD3)は両面とも刷毛目調整した口縁部で、やや外湾気味である。21(H9区SD3)は弥生土器甕形土器の胴部である。器面は刷毛目調整後にナデ消す部分もある。頸部近くに一条の突帯をめぐらせ、その下位は刷毛目を使い斜めに刻む。

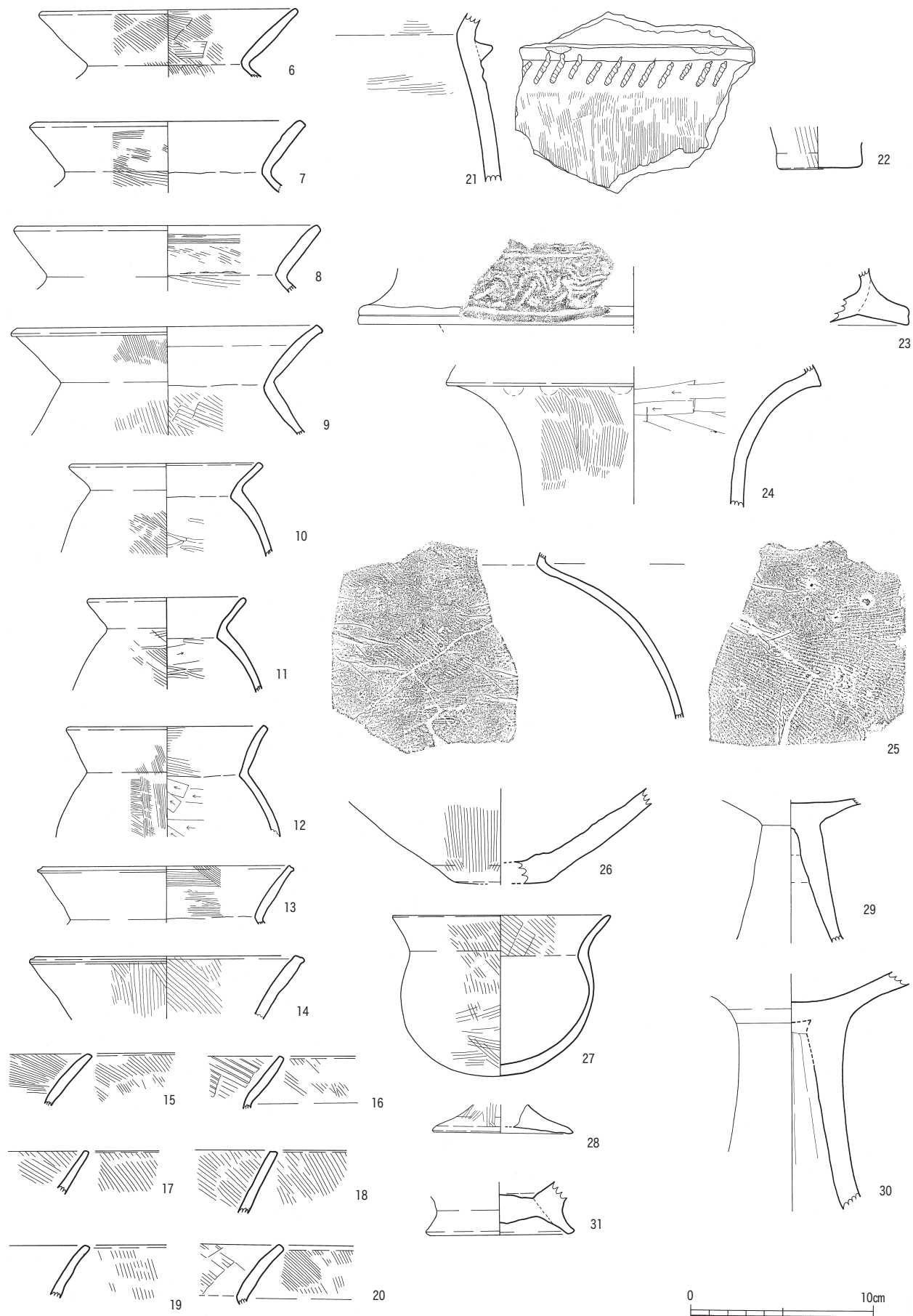
23・24は壺形土器である。23(H9区SD3)は櫛具を使って二重口縁部に波状文を描いている。直径29.6cm。24は二重口縁の下部。最大直径20.4cm。25(H9区SD3)は古墳時代の甕形土器で、内面はへら削り、外面は刷毛目調整である。器壁は0.4cm前後と薄い。26(H9区SD3)は弥生土器の壺である。

27は丸底鉢、胴部内面は丁寧なナデ調整で外面は刷毛目調整している。口径11.8cm・器高8.7cm。28は脚付き鉢で、刷毛目の後にナデ消している。底径7.7cm。29・30は高環形土器である。29(H9区SD3)は土師器高環で、脚部と環部下面は両面とも横方向のナデ、環部内面はナデ調整である。脚部の狭い部分で直径は3.2cm。30(H9区SD3)は土師器高環で、脚部内面はへらを横方向に動かすナデ、外面から環部下面は横方向のナデ、環部内面はナデ調整。脚部の狭い直径は6.4cm。

31は古代の土師器。底面と内面は指押さえし、その他は横方向のナデ仕上げ。底径8.0cm。

以上、SD3から出土した土器は1点だけ古代と見られるもの(31)がある他、明白に弥生土器とみられるものは少ない。大部分は弥生時代後期末から古墳時代初頭のものである。甕形土器は刷毛目を残すものが多く、へら削りは少ない。器形は口縁部が直線的に外反する例が多い。

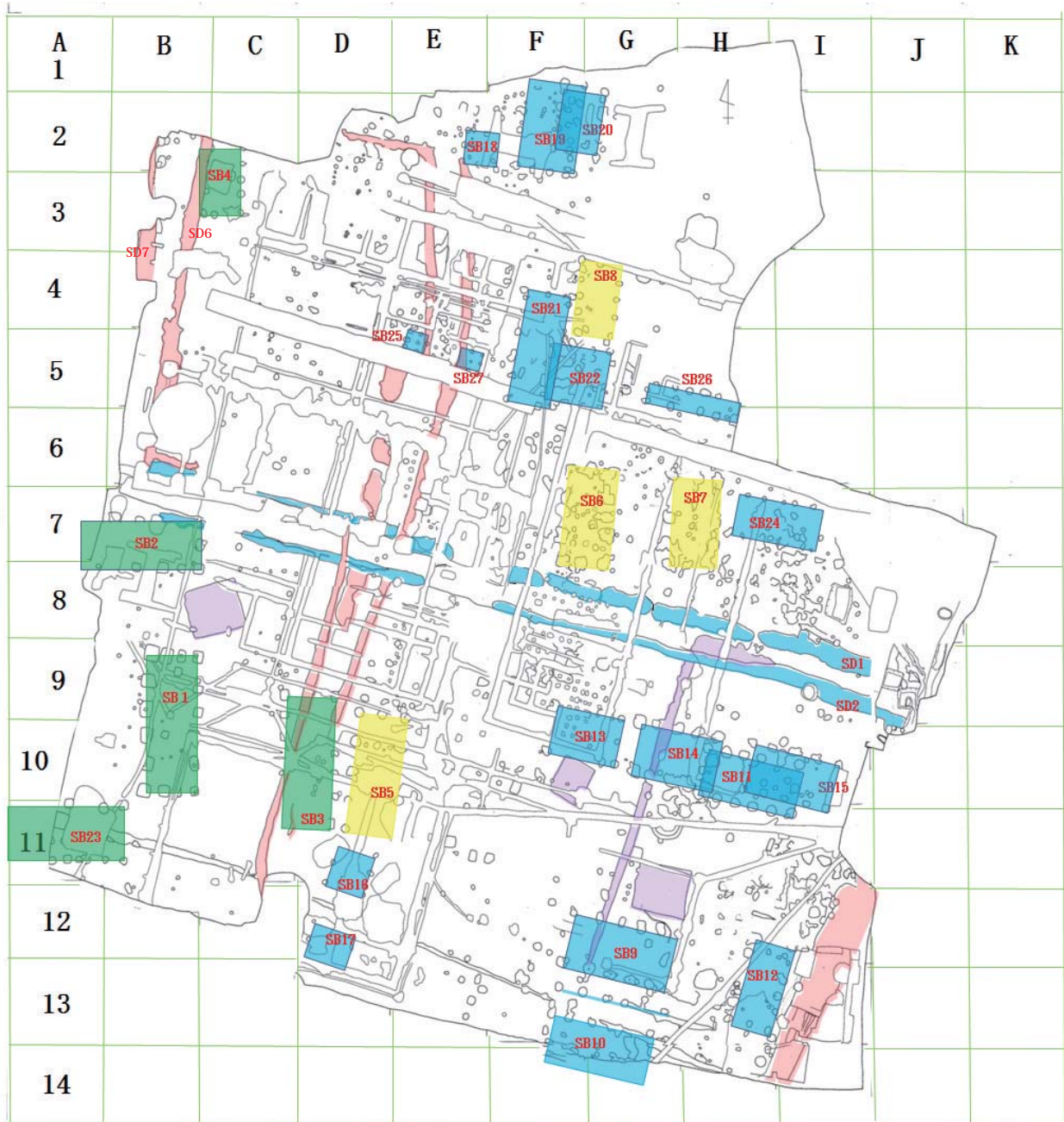




第4图 SD3 出土遺物実測図

### ③古代の遺構・遺物

竜王畑遺跡の中心となる時代は遺構の数からいえば古代である。検出した掘立柱建物は方位を共有する異なる年代の群に分けることが可能で、調査の結果Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期に区分できたのでその順に説明する。



Ⅰ期 (緑色)・Ⅱ期 (黄色)・Ⅲ期 (青色)・中世 (茶色)・古墳時代 (紫色)

第5図 竜王畑遺跡古代等遺構図

#### Ⅰ期

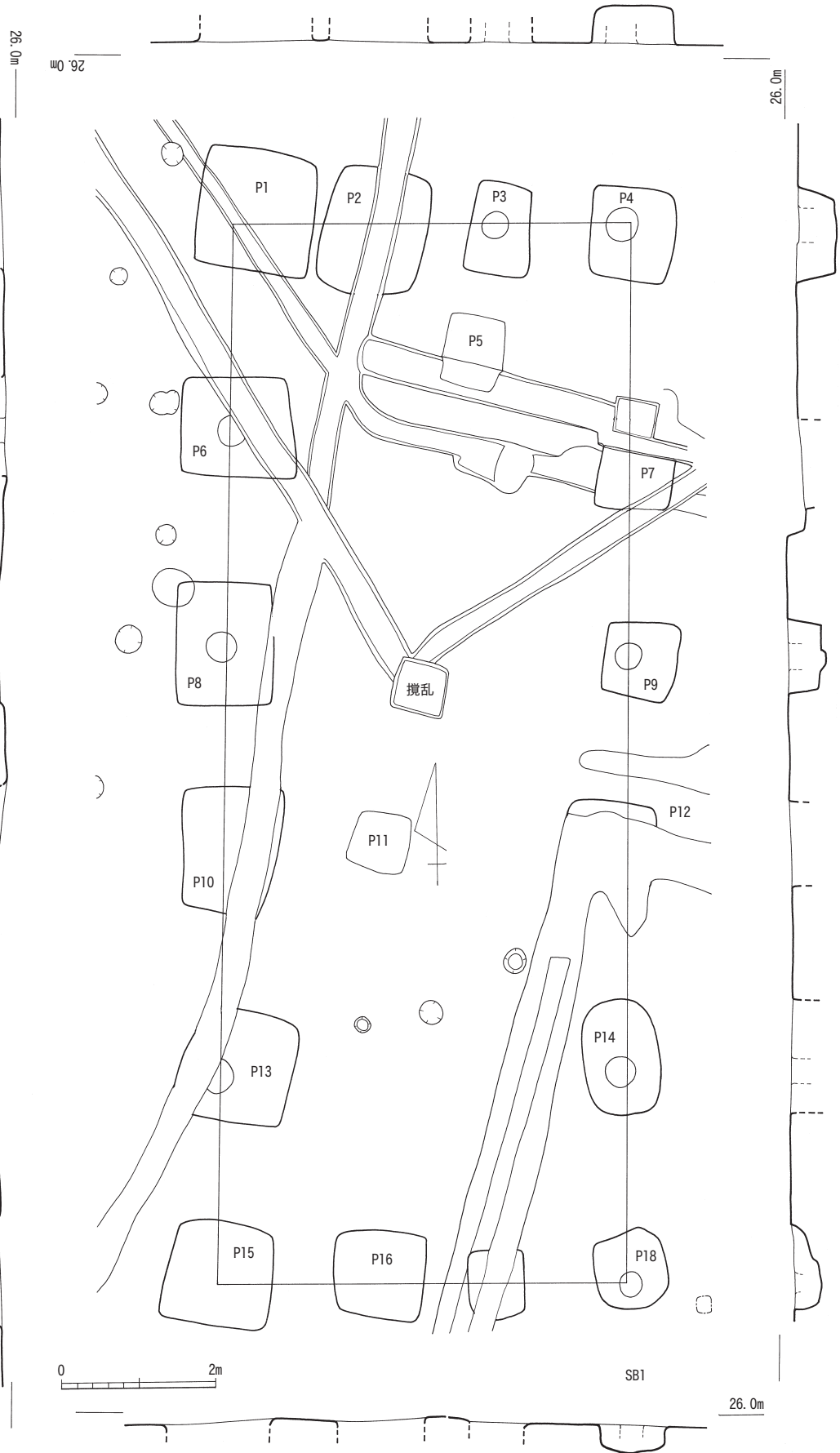
建物の軸が現在の方位で南北を指す一群である(第5図では緑色で示す)。調査区の西部に偏った分布を示し、南部と北部に分かれて存在する。南部地域には、主軸が南北を向くSB1・SB3と東西を向くSB2・SB23の4棟があり、これらはほぼ同じ規模をもつ。北部地域には南北を向くSB4があるが、これは調査区外に建物が広がる可能性があり、南部の一群と同様の規模をもつ可能性がある。

掘立柱建物

SB1 (第6図)

調査区南西部のB9区・B10区にあり、方位はほぼ南北方向(N-4-E)を向き、東西3間×南北5間の規模を有する。調査時に付した柱穴番号を踏襲し説明したい(第9図)。P1～4・6～10・12～18がこの掘立柱建物跡の柱穴である。柱穴を切る溝状のものとP11とP5及び中間の四角い穴P7に重なるものも攪乱である。攪乱が浅い場合は柱穴の輪郭が把握できた(P1・P6)が、深い場合は掘り下げていないので検出面で分かる範囲で輪郭を把握した。柱穴掘形の平面形は方形で、一辺の長さは1.0m～1.5m、柱痕跡の直径は0.3m～0.4mである。

柱穴の平面形は方形で、最大のP1は1.57m



第6図 SB1 実測図

× 1.05cm である。梁行 5.3 m、桁行 13.7 m で面積は 72.61 m<sup>2</sup> である。

#### 出土遺物

第 9 図 32 は SB1 の柱穴掘形 P9 から出土した須恵器坏蓋である。正確には柱痕の外側から出土した。つまみを欠く。外面上部はへら削り、口径 10.9cm、器高 2.6cm。

柱穴の検出面で柱のあった位置及び規模が把握できたものを柱痕として掲げれば、P3・P4・P6・P9・P13・P14・P18 がある。どれも平面は円形で、最短部で計った直径は 30cm～43cm である。柱痕中心同士の距離は 165cm (P3 - P4)、280cm (P6 - P8)、275cm (P14 - P18) で、短軸方向では 528cm (P8 - P9)、523cm (P13 - P14) である。

長軸方向の P4 と P18 の同様数値は 1,368cm である。

#### SB2 (第 7 図)

B 7 区・B 8 区に中心的に検出した東西方向 (N) に主軸をもつ掘立柱建物である。確認した柱穴は P1・P2・P3・P4・P5・P6・P7・P8・P9・P10・P12 で、P11 は攪乱部が覆っている。建物西部は調査区外にあり、現状では 2 間×(5+α) 間で、柱穴中心間の距離は短軸 4.6 m×長軸 9.0+α m である。各柱穴の規模は P1 が最大で 1.34 m×1.28 m、P7 が 1.09 m×1.06 m である。梁行 4.65 m、桁行 (10.6+α) m で、面積は 49.29 (+α) m<sup>2</sup> である。また、梁行平均 2.3 m、桁行平均 2.4 m である。柱穴掘形は方形で、一辺は 1.0 m～1.3 m、柱痕は不詳である。

#### SB3 (第 8 図)

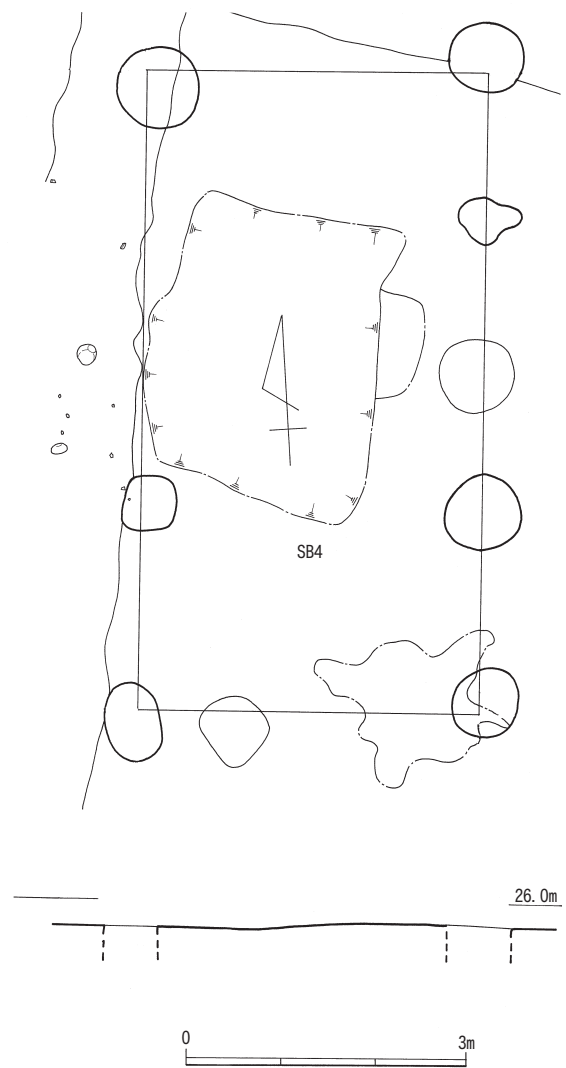
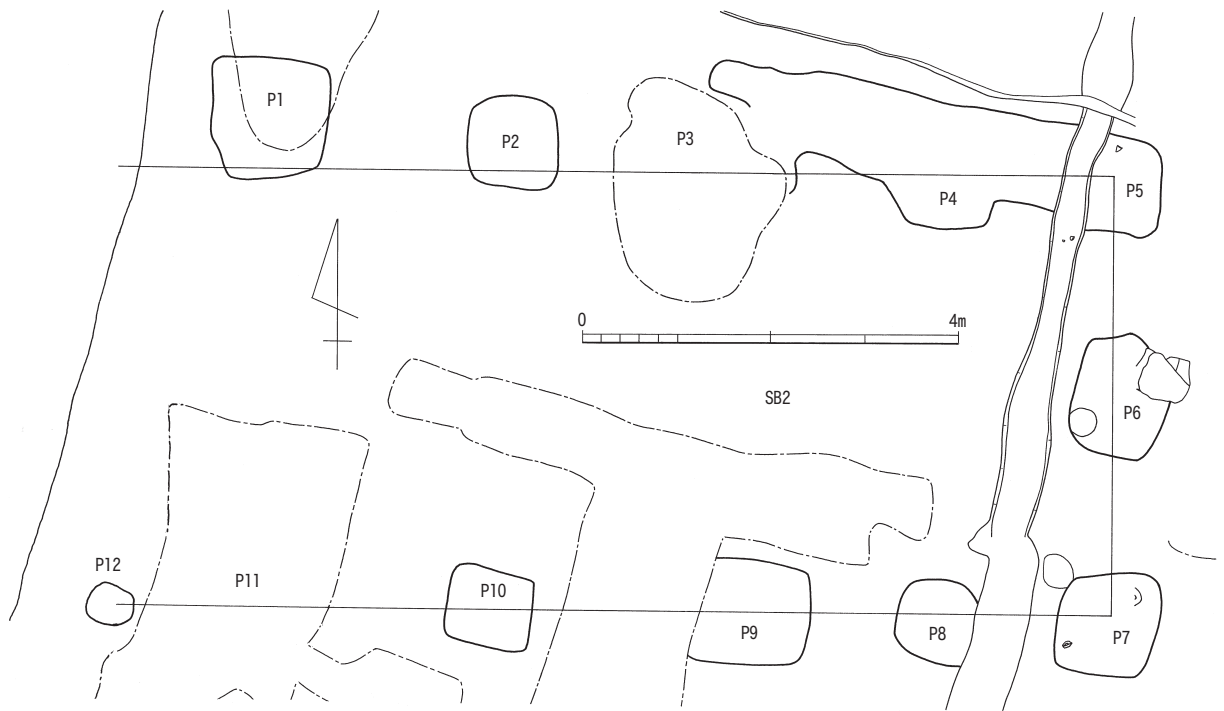
SB1 に並ぶように東側に SB3 がある。C 9 区から D 11 区にあり、方位は南北方向 (N) を向く東西 2 間×南北 6 間の規模を有する。梁行 5.2 m、桁行 13.1 m で面積 68.12 m<sup>2</sup> である。梁行平均は 2.7 m、桁行平均は 2.4 m である。柱穴掘形の平面形は方形から長方形で、掘形の一辺は 0.8 m～1.2 m である。SB3 に伴う出土遺物はない。

#### SB4 (第 7 図)

C 2 区から C 3 区にあり、方位は南北方向 (N-4-E) を向き、東西 (1+α) 間×南北 4 間の規模を有する。梁行 3.6 m、桁行 6.75 m で面積 24.30 m<sup>2</sup> で、梁行平均は 1.8 m、桁行平均は 1.7 m である。柱穴の平面形は円形で、掘形の直径は 0.6 m～0.8 m である。SB4 に伴う出土遺物はない。

#### SB23 (第 9 図)

A 11 区から B 11 区にあり、方位は東西方向 (N) を向き、南北 2 間×東西 (4+α) 間の規模を有する。柱穴掘形の平面形は円形で、直径は 0.9 m～1.0 m。梁行 5.6 m、桁行 (7.6+α) m で、面積は (42.56+α) m<sup>2</sup> で桁行平均は 1.9 m である。SB4 に伴う出土遺物はない。



第7図 SB2・SB4 実測図

II 期

建物の長軸が現在の方位で北から東に5度から7度振れる南北棟の一群4棟である（第5図では黄色で示す）。調査区の中央から東部に偏った分布を示し、近似した規模のSB6とSB7が接近した位置にあるが、他は方位を共

有するだけで、統一性はない。中央南部地域には、主軸がSB5、中央東部にはSB6とSB7があり、SB6から北に延長した位置にSB8がある。

#### SB5 (第9図)

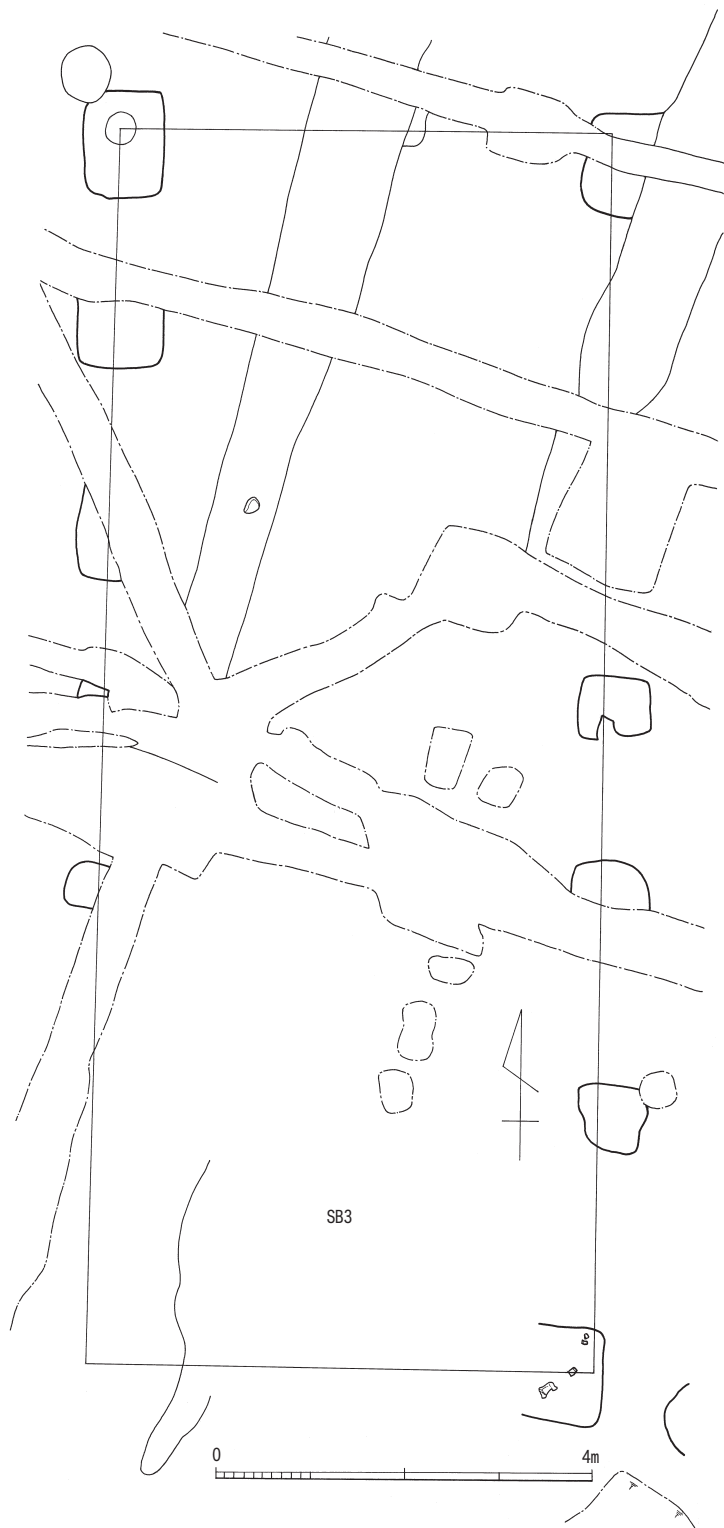
D9区からD11区にあり、長軸方位は南北方向から東に7度振れ(N-7-E)、南北4間×東西2間の規模を有する。南東部の柱列は検出できなかった。柱穴掘形の平面形は円形で、直径は0.9m～1.2m。梁行4.85m、桁行11.8mで、面積は57.23㎡である。梁行平均は2.4m、桁行平均は3mである。SB5に伴う出土遺物はない。

#### SB6 (第9図)

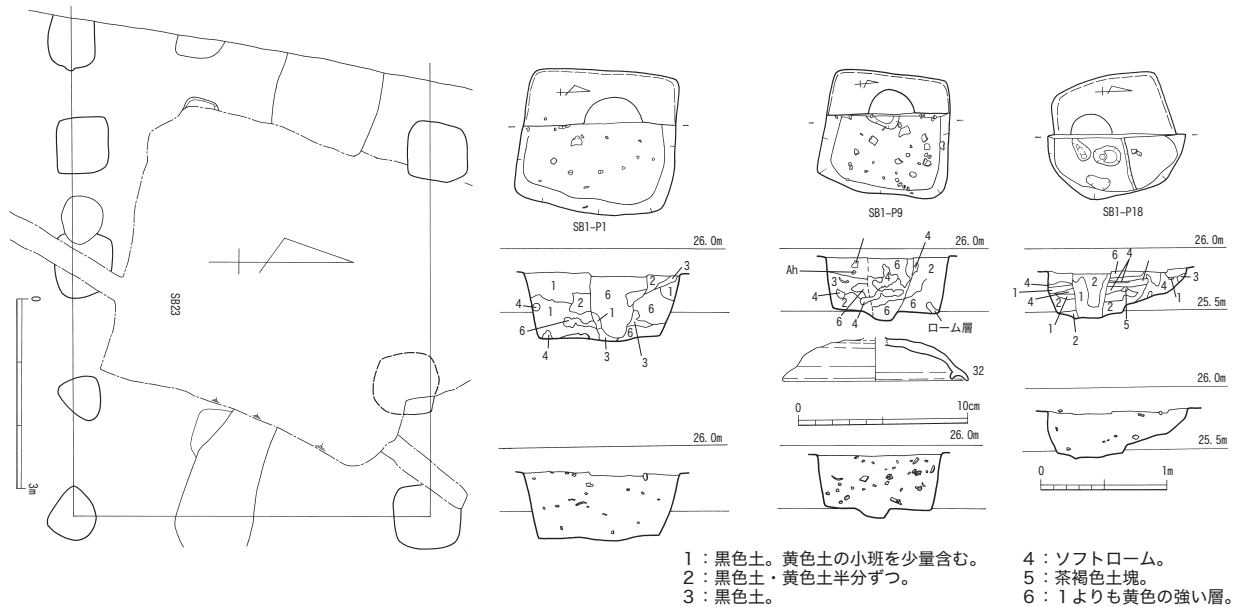
F6区からG8区にあり、長軸方位は南北方向から東に5度振れ(N-5-E)、南北4間×東西2間の規模を有する。柱穴掘形の平面形は方形で、一辺は1.1m～1.5m。梁行4.58m、桁行9.32mで、面積は42.69㎡である。梁行平均は2.3m、桁行平均は2.3mである。SB6に伴う出土遺物はない。

#### SB7 (第9図)

G6区からH8区にあり、長軸方位は南北方向から東に6度振れ(N-6-E)、南北4間×東西2間の規模を有する。柱穴掘形の平面形は方形で、一辺は0.9m～1.1m。梁行4.52m、桁行8.78mで、面積は39.69㎡である。梁行平均は2.3m、桁行平均は2.2mである。SB7に伴う出土遺物はない。

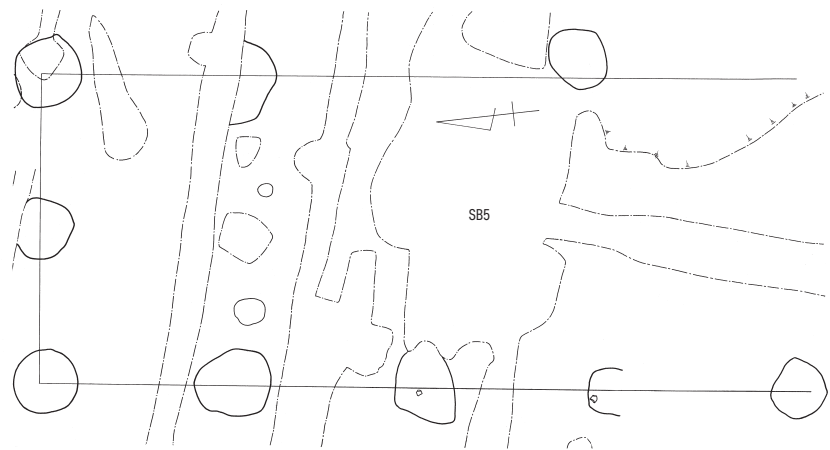


第8図 SB3実測図



SB8 (第10図)

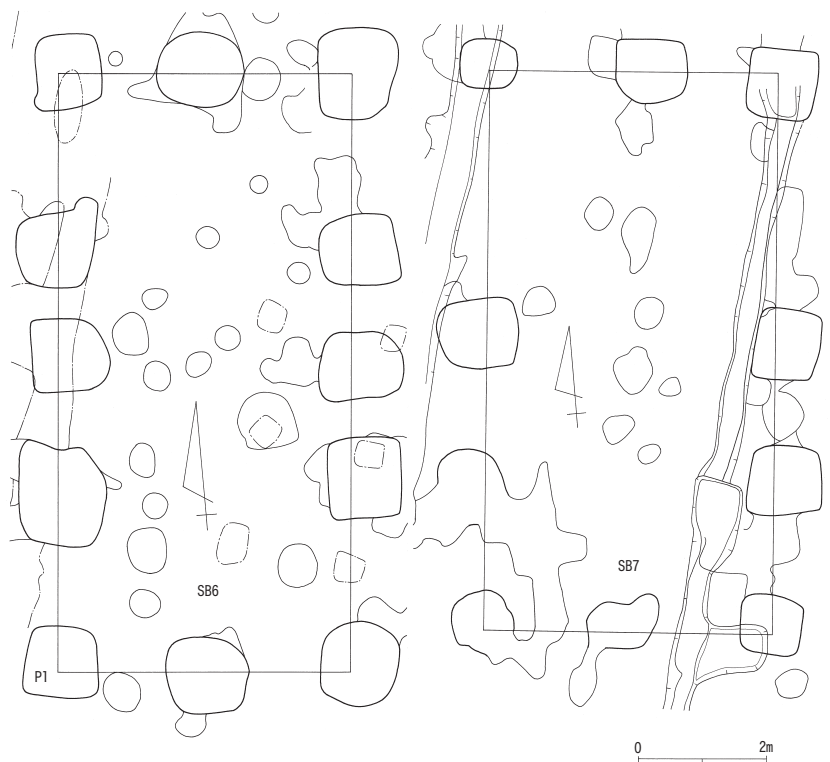
F4区からG5区にあり、長軸方位は南北方向から東に9度から振れ(N-5-E)、南端と北東部の柱穴は検出できなかった。南北4間×東西2間の規模を有する。柱穴掘形の平面形は円形で、直径は0.6m~0.8m。梁行3.74m、桁行7.3mで、面積は27.30㎡である。梁行平均は1.85m、桁行平均は1.8mである。SB8に伴う出土遺物はない。



III期

建物の軸が長軸の場合、現在の方角で北から東に8度から18度を指す一群である(第5図では水色で示す)。調査区の中央から東半分部に偏った分布を示し、この外、築地遺構が調査区中央を東西に走る。

築地跡の南東側に分布する掘立柱建物群は他に比べやや柱穴掘形が大きい。築地跡に平行するSB13・SB14・SB11・SB15とそれらよりも空間を挟んで南部地域には、主軸が南北を向くSB12があり、その西側に東西



第9図 SB5~7・SB23平面図

を向き平行する SB9・SB10 の 2 棟がある。  
この 2 棟の間には柱穴列が 1 列ある、ど  
ちらかの建物に伴う庇と考えられる。

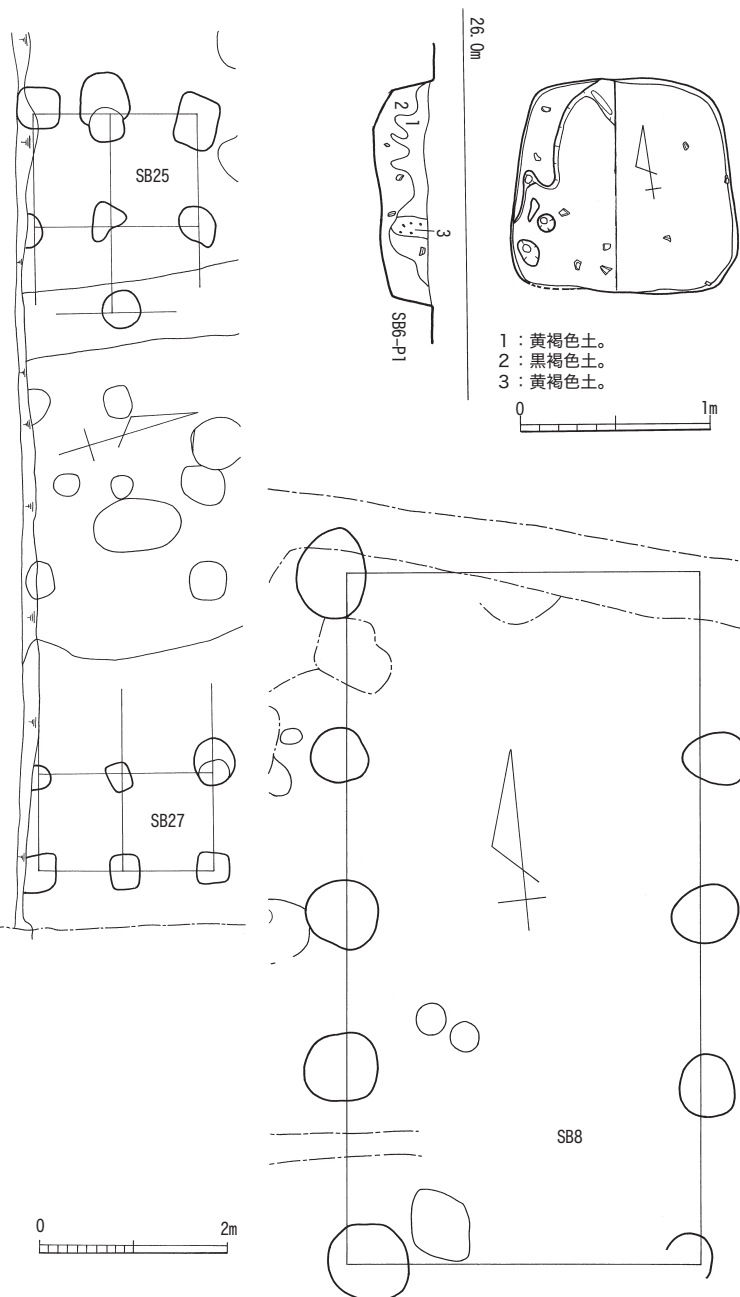
築地跡の北側地域には、南東部の掘立  
柱建物跡群よりも小型の掘立柱建物が調  
査区北部中央から中央東部にかけて分布  
する。北部中央には 3 棟の掘立柱建物が  
重複する場所があり、9 m ほど離れた南  
側には南北棟 2 棟と東西棟 2 棟が集中す  
る場所がある。

### SB9 (第 11 図)

F 12 区から G 13 区にあり、長軸方  
位は東方向から南に 13 度振れ (短軸 N  
- 13 - E)、南北 2 間×東西 5 間の規模  
を有する。柱穴掘形の平面形は不整形  
で、一辺は 0.6 m~1.3 m。梁行 5.22 m、  
桁行 11.84 m で、面積は 61.80 m<sup>2</sup> である。  
梁行平均は 2.6 m、桁行平均は 2.9 m で  
ある。

SB9 の南側、SB10 と中間の位置に 6 個  
の柱穴からなる列がある。これは南北ど  
ちらかの庇である可能性があるが、ここ  
で図示した。全体の長さは柱穴中心間  
で 11.84 m。各柱穴中心間の梁行平均は 2.6  
m、桁行平均は 2.9 m である。

SB9 に伴う遺物は土師器甕口縁部 1 点  
が P6 検出面から出土した。



第 10 図 SB6-P1・SB8・SB25・SB27 実測図

### SB10 (第 12 図)

F 13 区から G 14 区にある東西に長い  
掘立柱建物である。長軸方位は東方向か  
ら南に 12 度振れ (短軸 N - 12 - E)、  
南北 2 ? 間×東西 5 間の規模を有する。調査区  
の南側に建物跡の一部があるため、正確なことは分  
からない。柱穴掘形の平面形は不整形で、一  
辺は 0.7 m~1.0 m。梁行 3.00 m、桁行 10.45  
m で、面積は (31.35) m<sup>2</sup> である。梁行平均は  
2.9 m、桁行平均は 2.2 m である。SB7 に伴  
う出土遺物はない。

### SB11 (第 12 図)

H 10 区から I 11 区にある 2 間×5 間の掘  
立柱建物である。SB14・SB15 とほぼ同じ方  
向にあり、それらと重複しているが、前後関  
係は分からない。長軸方位は東方向から南  
に 10 度振れる (短軸 N - 10 - E)。

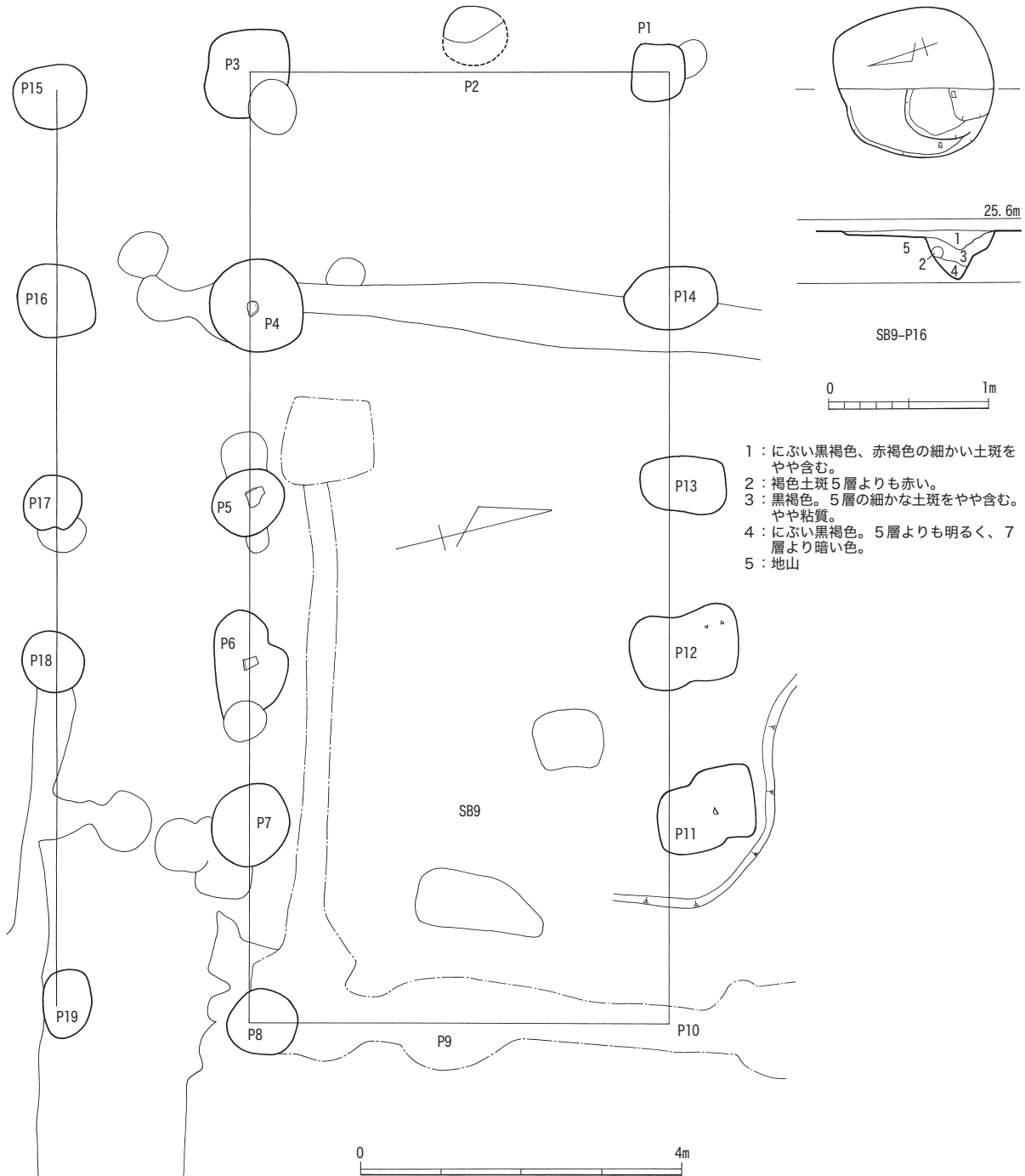
柱穴掘形の平面形は不整形から円形で、直  
径は 0.9 m~1.1 m。梁行 4.85 m、桁行 9.87  
m で、面積は 47.67 m<sup>2</sup> である。梁行平均は  
2.4 m、桁行平均は 2.0 m である。SB11 に  
伴う出土遺物はない。



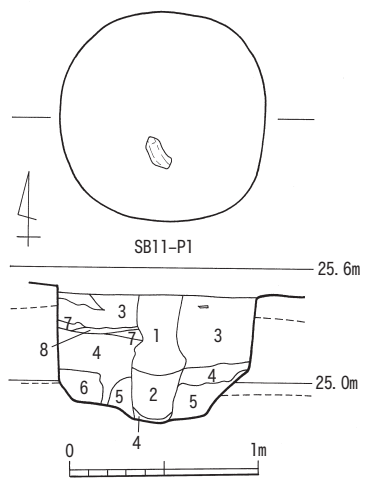
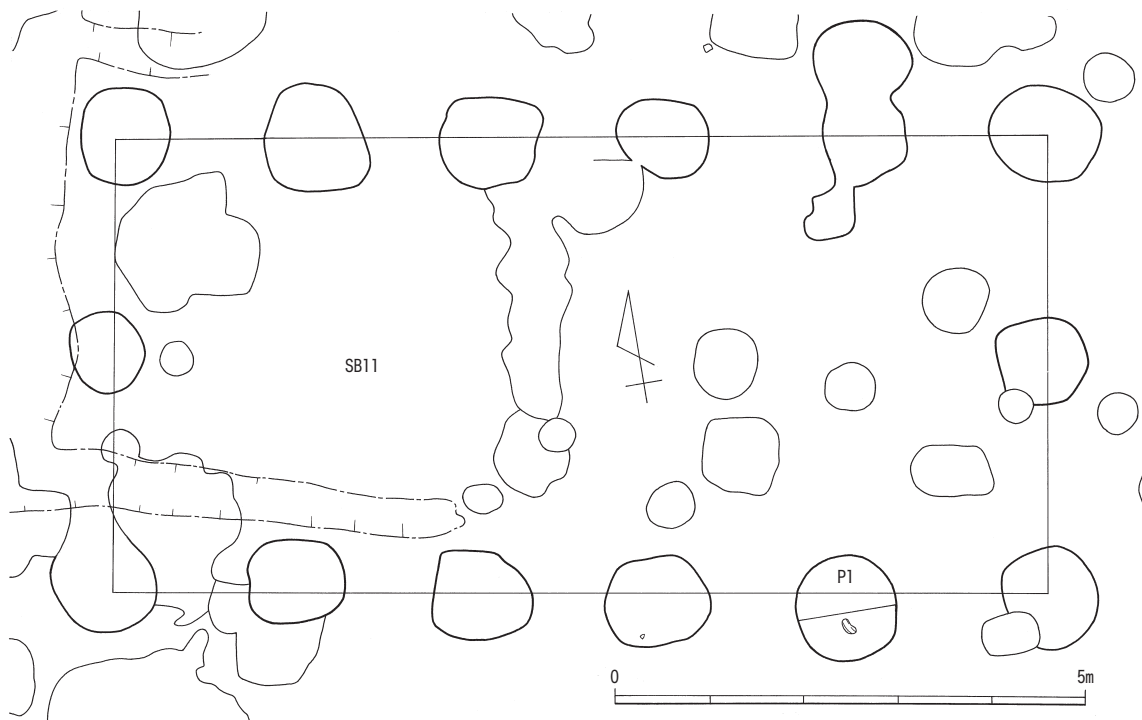
SB12 (第13図)

調査区南東隅のH 12・H 13・I 12・I 13区に位置する掘立柱建物である。南北に長く、2間×5間で、長軸方位は北方向から東に17度振れる (N-17-E)。

柱穴掘形の平面形は円形で、直径は0.7 m～1.0 m。梁行4.24 m、桁行8.6 mで、面積は36.46 m<sup>2</sup>である。梁行平均は2.1 m、桁行平均は1.7 mである。SB12に伴う出土遺物はない。



第11図 SB9・SB9-P16 実測図



- 1 : 暗褐色土
- 2 : // 7層の小斑を少量混入
- 3 : // やや褐色 (1・2層より)
- 4 : 暗褐色土に7層小片が若干 (20%) 混入
- 5 : 7層に黒色土が少し混入
- 6 : ハードローム
- 7 : ソフトローム塊
- 8 : 黒色土主体で少し褐色土が入る

第 12 図 SB10・SB11、SB11-P1 平面図

SB13 (第 13 図)

F 9・F 10・G 9・G 10 区にあり、SB14・SB15 と等間隔に並ぶように東西方向に長い 2 間×5 間の掘立柱建物である。長軸方位は東方向から南に 10 度振れる (短軸 N-10-E)。



第 13 図 SB12・SB13・SB20 実測図

SB17 (第 15 図)

D 12 区・D 13 区にあるが柱穴は 2 個だけを確認した。北側の SB16 の西柱列の延長上にあるように柱穴がある。方位は北から東へ 17 度傾く (N - 17 - E)。

柱穴掘形の平面形は円形で、直径は 0.3 m ~ 0.5 m である。梁行は 4.18 m。SB16 と並ぶようであり、同規模の倉庫であろう。SB17 に伴う出土遺物はない。

SB18 (第15図)

E 2・F 2・F 3区に位置する2間×2間の掘立柱建物である。中心部に攪乱があるため総柱の建物跡であるかは不明。長軸方位は東方向から南に15度振れる(短軸N-15-E)。

柱穴掘形の平面形は方形から長方形で、一辺は0.5 m。梁行3.19 m、桁行3.77 mで、面積は12.03 m<sup>2</sup>である。梁行平均は1.9 m、桁行平均は1.9 mである。SB18に伴う出土遺物はない。

SB19 (第15図)

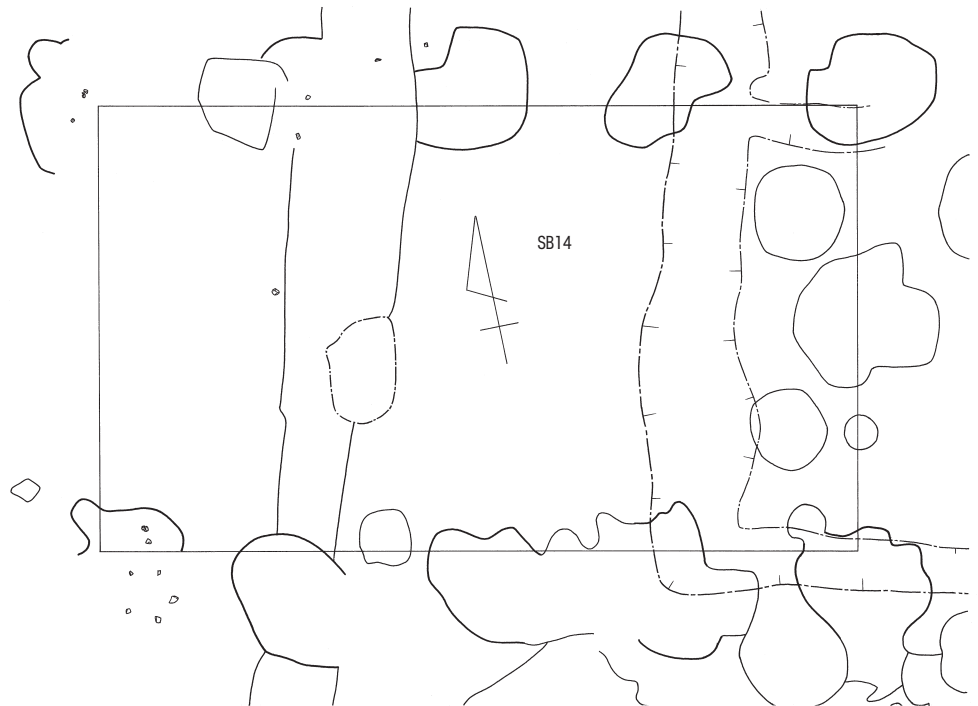
F 2・F 3区にあり、南北5間かそれ以上、東西3間と思われる。長軸方位は北方向から東に11度振れる(N-11-E)。

柱穴掘形の平面形は円形で、一辺は0.7 m。梁行5.42 m、桁行9.3 m+ $\alpha$ で、面積は50.41 m<sup>2</sup>である。梁行平均は1.7 m、桁行平均は1.8 mである。SB19に伴う出土遺物はない。

SB20 (第13図)

F 1からG 2区にあり、南北3間、東西2間と思われる。長軸方位は北方向から東に10度振れる(N-10-E)。

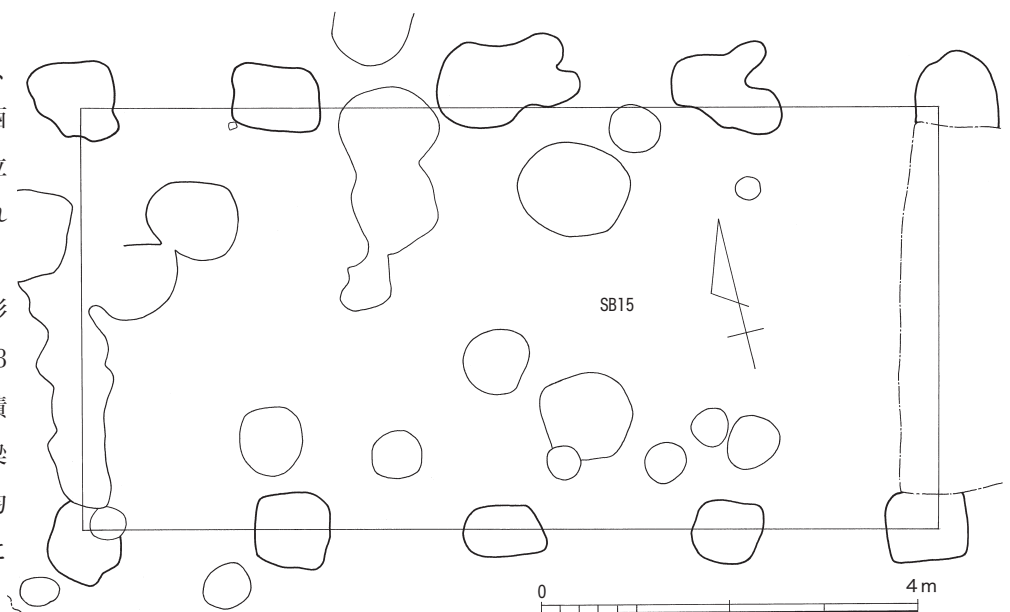
柱穴掘形の平面形は円形で、直径は0.8 m~0.9 mである。梁行4.48 m、桁行6.65 mで、面積は29.79 m<sup>2</sup>である。梁行平均は2.2 m、桁行平均は2.2 mである。SB20に伴う出土遺物はない。



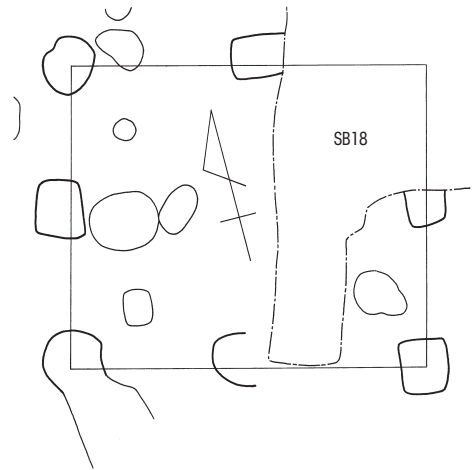
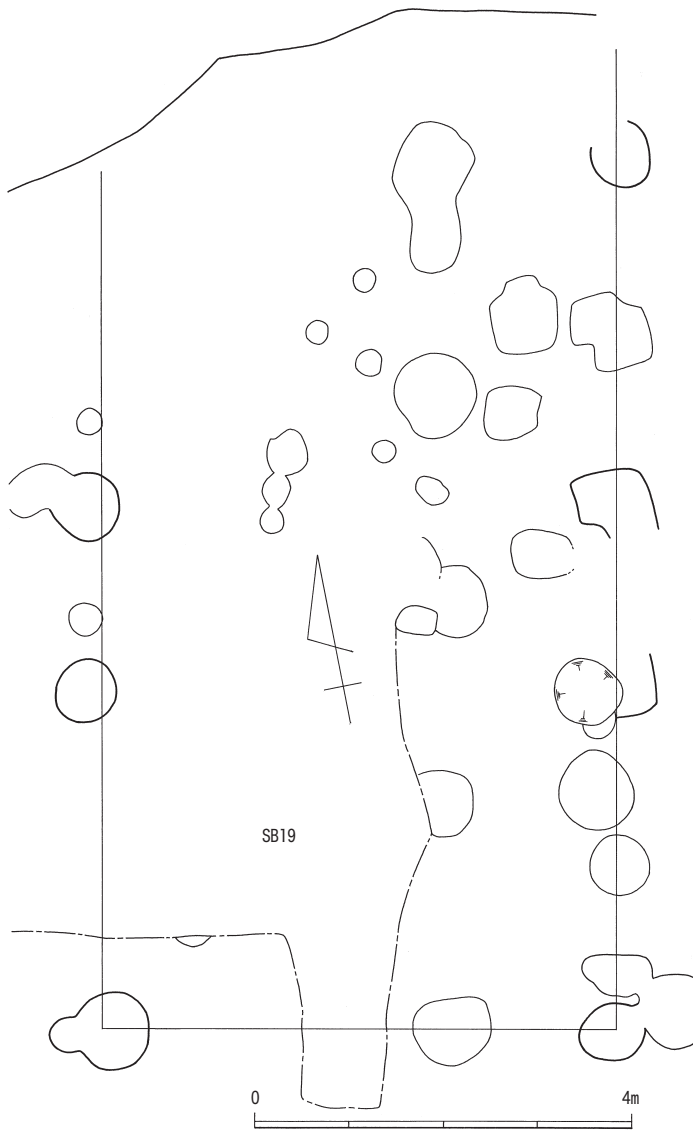
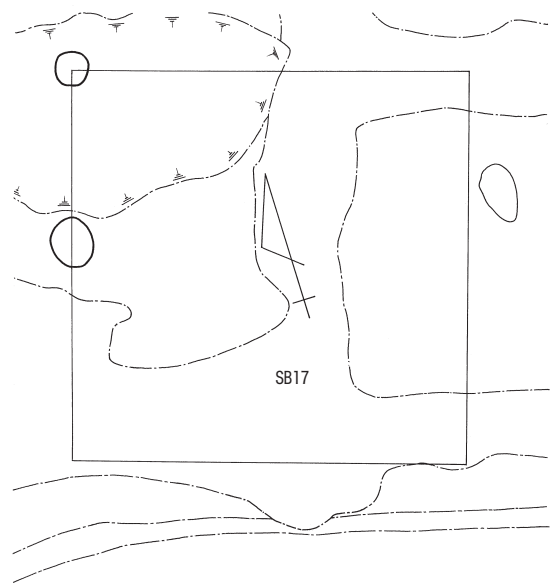
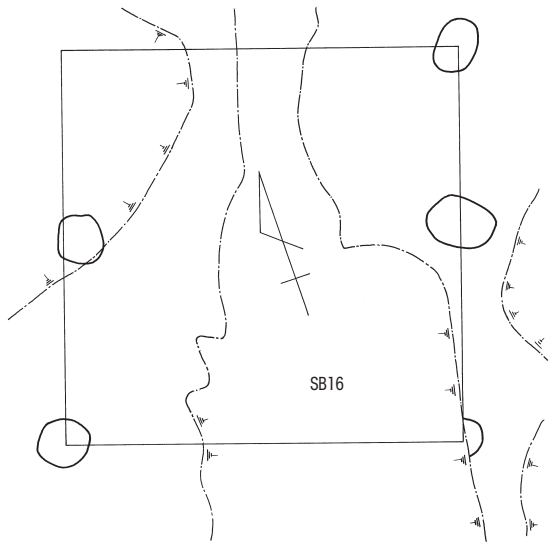
SB21 (第17図)

F 4からF 5区にあり、南北5間かそれ以上、東西3間と思われる。長軸方位は北方向から東に9度振れる(N-9-E)。

柱穴掘形の平面形は円形で、一辺は0.7 m。梁行4.93 m、桁行11.4 mで、面積は56.20 m<sup>2</sup>+ $\alpha$ である。梁行平均は2.4 m、桁行平均は2.4 mである。SB21に伴う出土遺物はない。



第14図 SB14・SB15 実測図



第 15 图 SB16 ~ 19 実測図

SB22 (第 17 図)

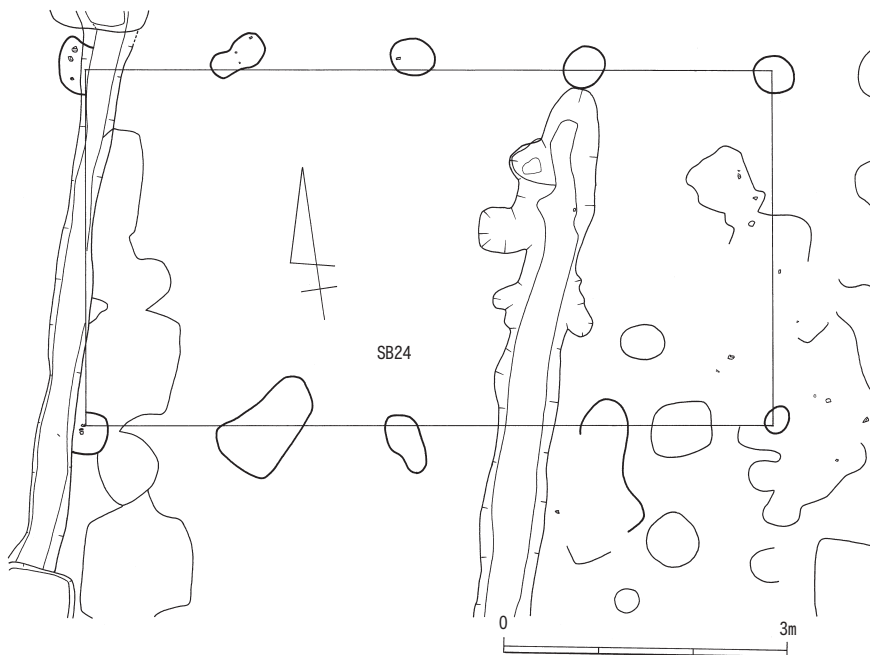
F 5・G 5 区にあり、南北 2 間、東西 3 間と思われる。長軸方位は東方向から南に 13 度振れる (短軸 N-13-E)。柱穴掘形の平面形は不整形で、一辺は 0.5 m~0.8 m である。梁行 4.66 m、桁行 6.57 m で、面積は 30.62 m<sup>2</sup> である。梁行平均は 2.3 m、桁行平均は 2.1 m である。SB22 に伴う出土遺物はない。

SB24 (第 16 図)

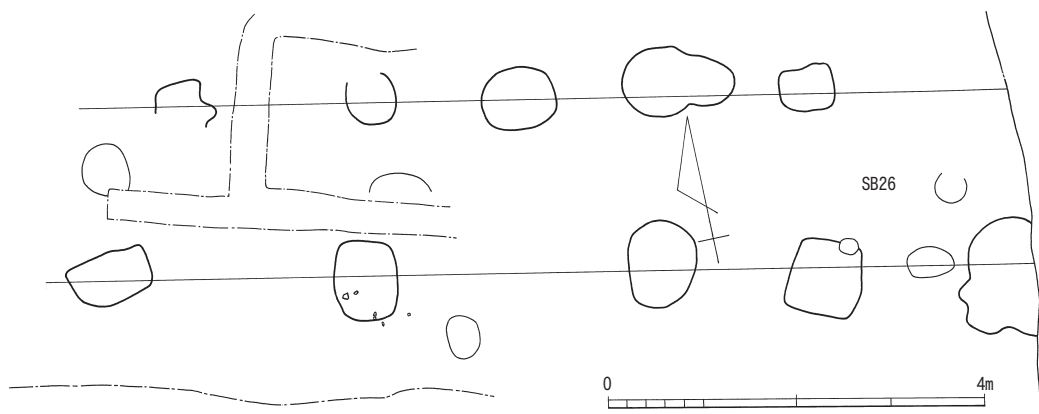
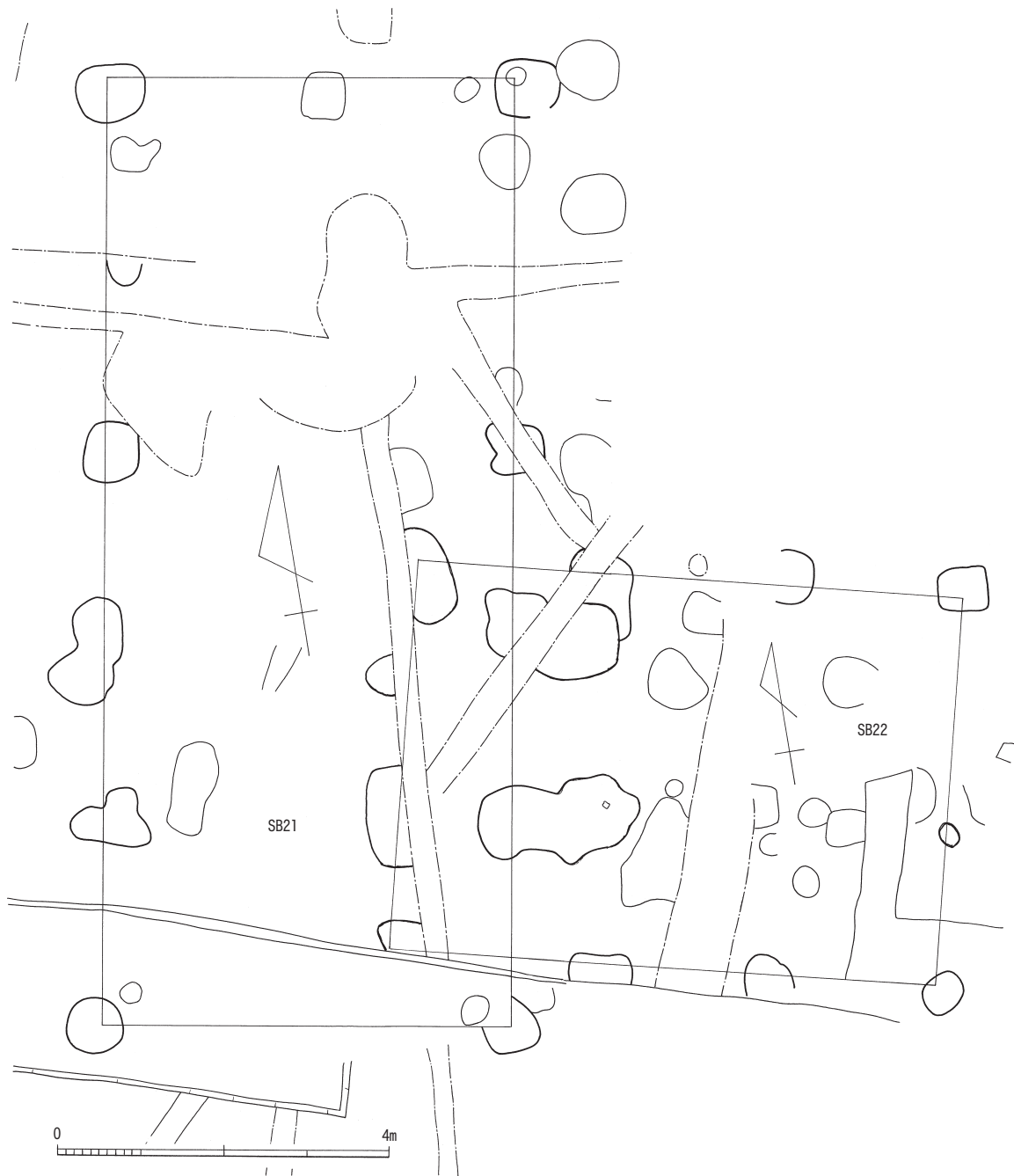
H 7・I 7 区にあり、南北 2 間、東西 4 間と思われる。長軸方位は東方向から南に 8 度振れる (短軸 N-8-E)。柱穴掘形の平面形は円形で、一辺は 0.4 m。梁行 3.73 m、桁行 7.28 m で、面積は 27.15 m<sup>2</sup> である。梁行平均は 1.9 m、桁行平均は 1.9 m である。SB24 に伴う出土遺物はない。

SB25 (第 10 図)

E 5 区にあり、南北 2 間、東西 2 間と思われる。長軸方位は北方向から東に 17 度振れる (N-17-E)。柱穴掘形の平面形は不整形で、一辺は 0.3 m~0.5 m である。梁行 1.73 m、桁行 2.09 m で、面積は 3.62 m<sup>2</sup> である。梁行平均は 0.85 m、桁行平均は 1.05 m である。SB25 に伴う出土遺物はない。



第 16 図 SB24 実測図

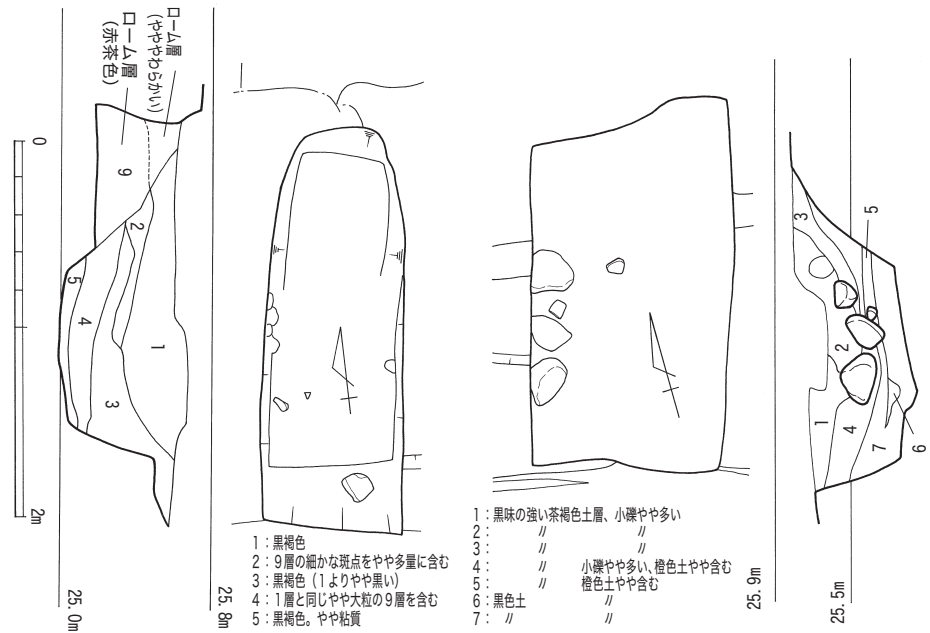


第 17 図 SB21・SB22・SB26 実測図

SB26 (第17図)

G 5からH 6区にあり、南北1間、東西6間かそれ以上と思われる。長軸方位は東方向から南に11度振れる(短軸N-11-E)。

柱穴掘形の平面形は不整形で、一辺は0.6 mから0.7 mである。梁行1.83 m、桁行9.6 mで、面積は17.57 m<sup>2</sup>である。梁行平均は1.8 m、桁行平均は1.8 mである。SB26に伴う出土遺物はない。



第18図 SD1平面図・層序図(B 6・C 7区)

SB27 (第10図)

SB25に並ぶように東に位置する。E 5区にあり、南北2間、東西2間と思われる。西部の柱列は確認できなかった。長軸方位は東方向から南に17度振れる(N-17-E)。

柱穴掘形の平面形は不整形で、一辺は0.3 m~0.4 m。梁行1.85 m、桁行1.02 m + αで、面積は1.89 m<sup>2</sup> + αである。梁行平均は0.9 m、桁行平均は1.0 mである。SB27に伴う出土遺物はない。



SD1 (第18・19図)

調査区中央を東西に走る溝状遺構であり、SD2と共に築地を構成する側溝である。

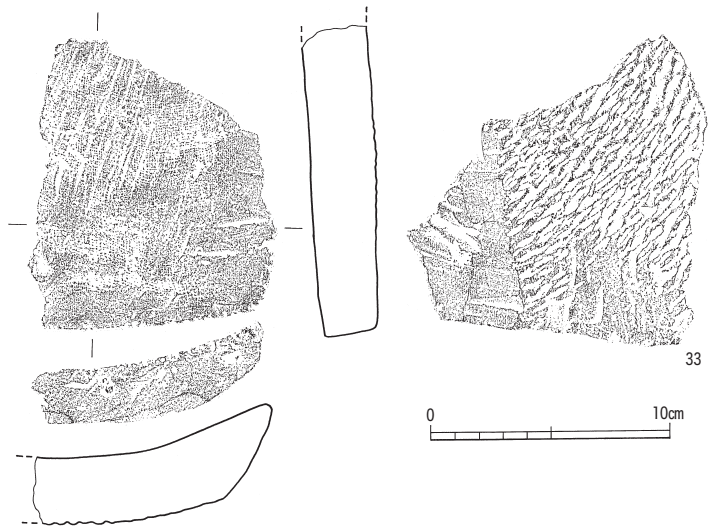
SD1 出土遺物

第20図33(SAI-4)は凸面に縄目たきをもち、凹面に布目痕をもつ平瓦である。横断面は舟の舳先のように三角形で、その側面はヘラ削りが全面に及んでいる。厚さ2.7cm。

第19図 SD1・SD2平面図・層序図



第21図34(SD1攪乱)は須恵器坏蓋である。35(I9区SD1-31)は須恵器坏蓋で、つまみは宝珠を呈し直径は2.4cm、高さは0.6cmである。36(SD1-202)は須恵器高台付坏の身で、外面は横ナデ、天井部高台は底部の端に付き、底径13.3cmである。38(SD1-127)は須恵器坏で、底部の端から4mmの位置に高台が付く。39(SD1-230)は土師器皿で、内面はヘラミガキをしている。口縁部は端を上折り曲げ気味。44(H8区SD1-1)は土師器坏で、器面はナデ調整、口径13.8cm、器高3.2cm、底径6.4cm。45(SD1-206)は土師器坏で、見込み部を指ナデ、その他は回転横ナデしている。口

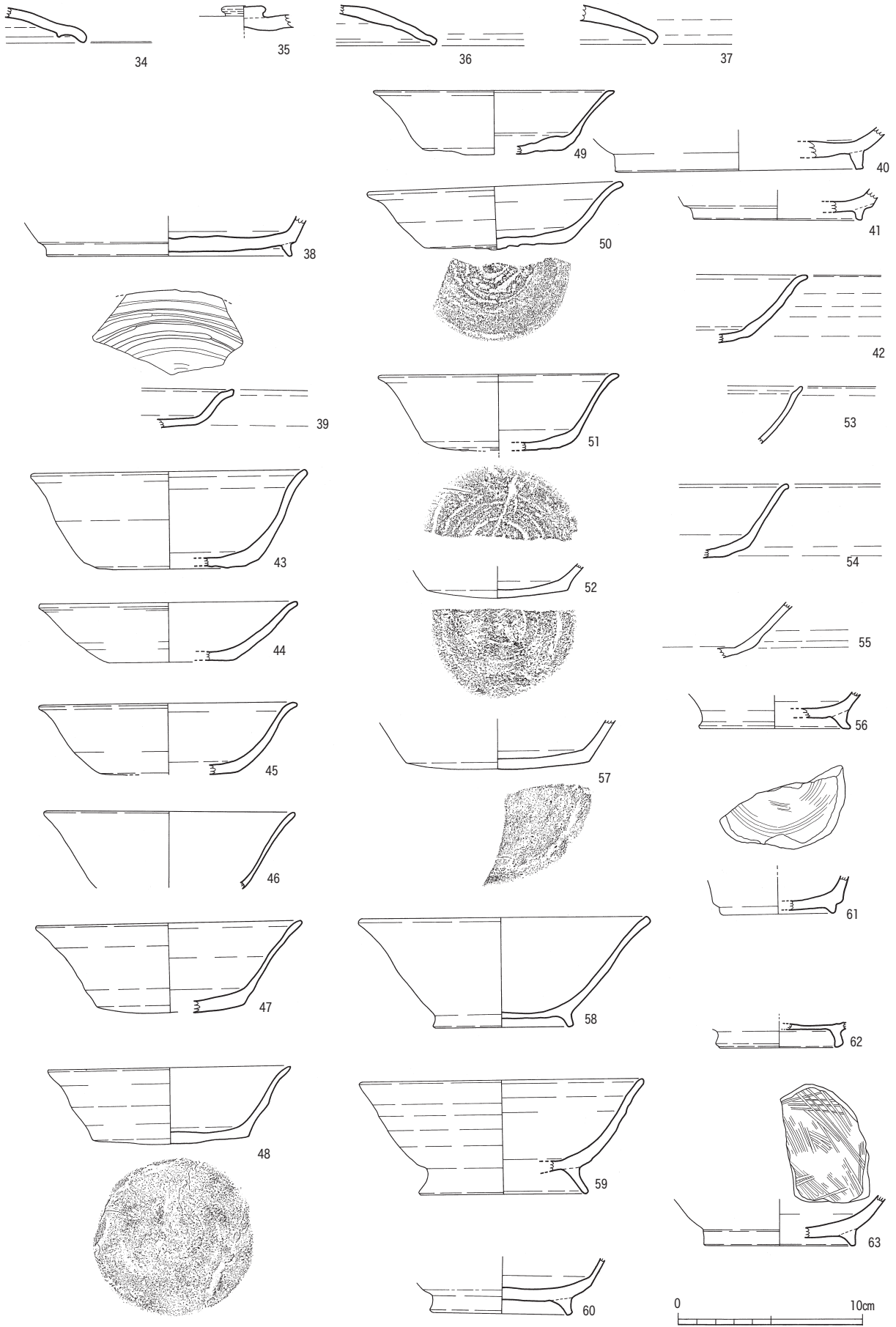


第20図 SD1出土遺物実測図2

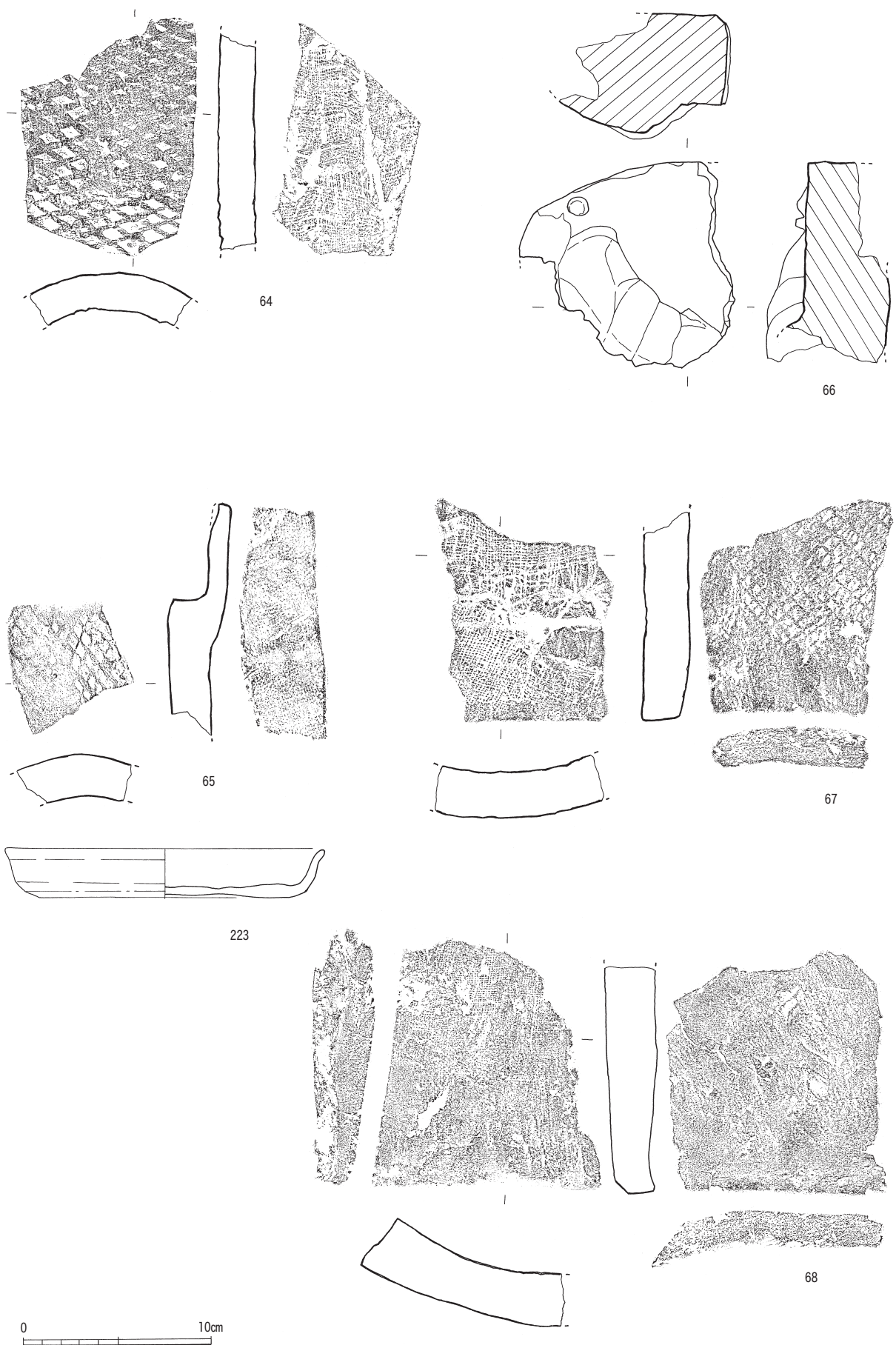
径14.0cm、器高3.8cm、底径7.4cm。46(SD1-207)は土師器碗で、器面は回転横ナデしている。口径13.6cm、現状の器高は4.1cmである。47(SD1-7)は土師器坏で、底面は回転ヘラ切り、見込みから体部下半分は指ナデ、その他は回転横ナデしている。口径14.4cm、器高4.8cm、底径8.0cm。48(I9区SD1-200)は土師器坏で、底面は回転ヘラ切り、その他は回転横ナデである。口径13.0cm、器高4.1cm、底径8.4cm。49(SD1-32)は土師器坏で、底面はヘラ切り、見込み部は指ナデ、その他は回転横ナデ仕上げである。口径13.0cm、器高4.4cm、底径7.6cm。50は底部を回転ヘラ削りし、他はナデ調整の坏で、口径13.8cm、底径8.0cm、器高3.4cm。見込み部分は回転に合せた指先による中央から外への窪みがある。51(SD1-7)は土師器坏で、底面は回転ヘラ切り、見込みから体部下半分は指ナデ、その他は回転横ナデである。口径13.0cm、器高4.1cm、底径8.0cm。20(SD1-125)は土師器坏で、底面は回転ヘラ切り、他は回転横ナデ。54(SD1-216)は底面は回転ヘラ切り、他は回転横ナデ。56(I9区SD1-68)は土師器坏で、底面は回転ヘラ切り、その他は回転横ナデ。底径7.6cm。25(I9区SD1-231)は。58(SD1-19)は土師器碗で、高台の内側は回転ヘラ切り、見込みは不定方向の指ナデ、他は回転横ナデ。口径15.7cm、器高5.9cm、底径7.5cm。59(SD1-243)は土師器碗で、器面は回転横ナデ仕上げしている。口径15.4cm、器高6.1cm、底径9.2cm。60(SD1-204)は土師器碗で、底面中央部は回転ヘラ切り、見込み部は不定方向の指ナデ、その他は回転横ナデである。底径7.8cm。61(H8区I7・18)は土師器碗である。底面は回転ヘラ削り、外面は横方向のナデ、内面は回転横ヘラミガキ。底径7.0cm。63(I9区SD1)は内黒土器碗で、外面は回転横ナデ、内面はヘラミガキ。底径8.2cm。

第23図70(I9区SA1)は須恵器杯身である。

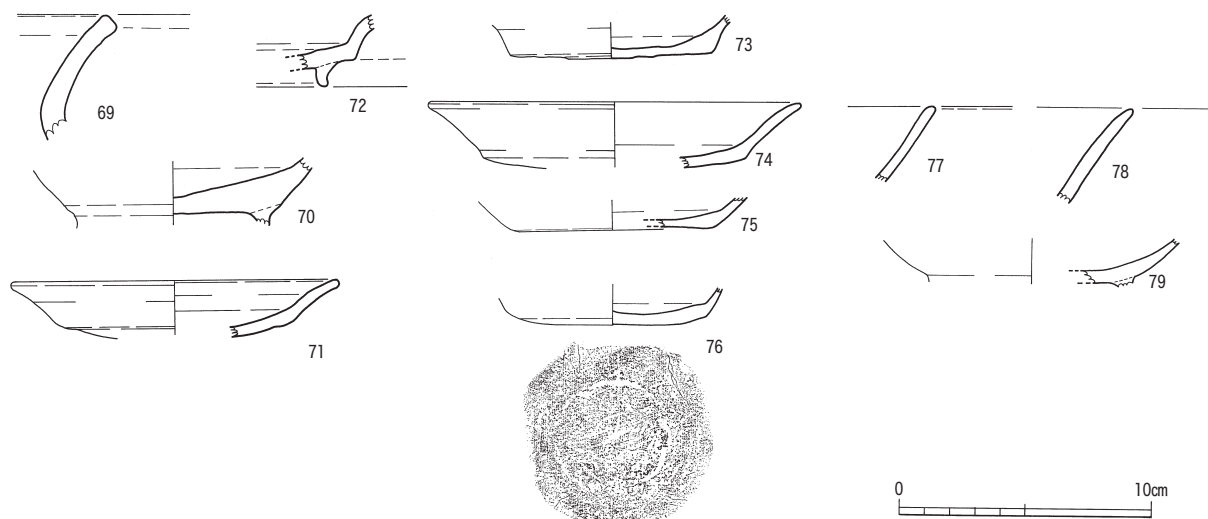
第22図64(SD1-227)は斜格子目と縄目痕の丸瓦。65(I9区SD1-200)は丸瓦で、凸面に斜格子目叩き、凹面に布目痕がある。66は鬼瓦の図に向かって左上隅の破片である。左上隅から弧状に上辺へ移行する部分と、その内側に残る珠文は外縁隅に対応する珠文から一つ右上に配されたものである。珠文から平坦面は半円形の軒平瓦接合位置となる。頭髪はその下に緩く表現されている。釘穴は眉間部分にみられる。大宰府の観世音寺出土例に近似しており、大宰府式鬼瓦II式に該当する。なお、II式の大分県内出土例は宇佐市弥勒寺跡にあり、それは右目から眉間にかけての破片である。胎土に砂粒が多く、1mm以下の白色粒子を含む。色調は灰色である。8世紀後半代以降と考えられる。67(SD1-197)は凸面に格子目叩き、凹面に布目痕が認められる。凸面側の図下部4cm弱は斜めに削り取られている。厚さは2.5cmである。68(SD1-179)は平瓦で、凸面はナデ消されているが格子目叩きらしい。凹面には布目痕がある。横断面図左端は凹面側に分割突起の跡があり、凸面側は折り取られたままである。縦断面下部で説明すると、凹面側の端は斜めに削られ、全体の断面は凸面側に屈曲する。厚さは2.6cmから3.2cmである。第23図69(SD1-139)は須恵器甕である。70(SD1-13)は須恵器坏身で、底部



第 21 图 SD1 出土遺物実測図



第 22 图 SD1 出土遺物実測図



第 23 図 SD1 出土遺物実測図

から体部への移行部は丸みを帯びる。現状で底径は 7.6cm である。72 (I 9 区 SD1-178) は土師器皿で、器面の調整は回転横ナデで、最大径 9.6cm。第 24 図 8 (I 9 区 SD1-136) は土師器皿。71 (SD1-169) は土師器坏で、底面は回転ヘラ切り、見込み部は指ナデ、その他は回転横ナデである。口径 13.0cm、底径 8.6cm、器高 2.3cm。

#### SD2 (第 5・24 図)

B 7 区から J 11 区まで断続的に一直線で続く溝状遺構である。SD1 と共に築地を構成し、E 8 区で途切れるのは門跡が考えられる。SD2 の幅は 0.7 m ~ 2.1 m だが本来は 0.7 m 程とみられる。深さは D 7 区で 0.8 m である。

#### SD2 出土遺物 (第 25・26 図)

第 25 図 80 (SD2) は須恵器甕で、内面は下部が同心円叩き、上部はカキ目、外面はカキ目を縦方向の後、横方向に入れている。81 (SD2-14) は凸面に菱形文の叩き目、凹面に布無をもつ平瓦である。端部は平たく、横方向にナデられている。厚さは 2.1cm。82 (SD2-9) は凸面が縄目叩きで、凹面はヘラナデあるいはヘラ削りしている。最大の厚さは 3.4cm。83 (SD2-2) は凸面は縄目叩き、凹面は布目痕をナデ消した平瓦である。横断面にある側面はヘラナデされている。厚さは 1.8cm。

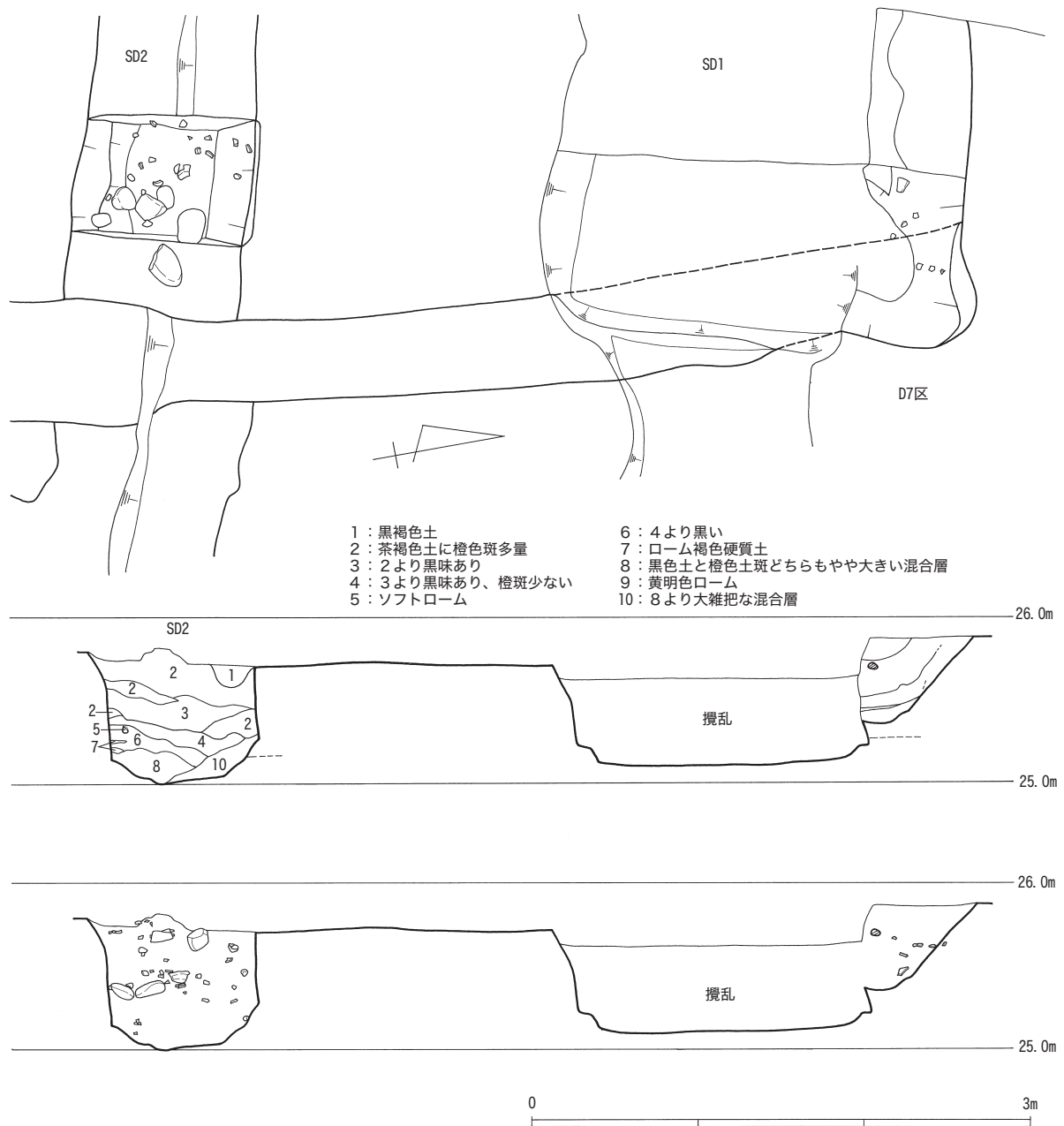
第 26 図 85 (B 4 区 12) は土師器坏蓋。つまみの直径は 2.5cm。86 (I 9 区 SD2-20) は須恵器坏蓋で、外面には自然釉葉が全面に付着する。つまみの直径は 1.8cm。87 (I 9 区 SD2-89) は須恵器坏蓋で、上面はつまみ付近以外は回転ヘラ削り、内面は指ナデ。つまみの直径は 3.3cm、高さは 0.4cm である。88 (I 9 区 SD2-34) は須恵器坏蓋。89 (SD2-11) は須恵器甕。90 (I 9 区 SD2-14) は須恵器盤で、底径 8.9cm。91 (SD2 一括) は須恵器甕。92 (SD2-184) は須恵器甕である。93 (I 9 区) は土師器のつまみ部分で、直径 3.6cm。94 は須恵器壺で、外面はカキ目調整、内面はロクロ挽きしている。I 9 区の SD2-162 と同区の遺物包含層及び表採品が接合した。

95 (I 9 区 SD2-104) は土師器坏で、器面はすべて回転横ナデである。96 (I 9 区 SD2-68) は土師器皿で、器面の調整は底面はヘラ切り、体部外面はヘラ削り、内面はナデである。底径 8.4cm。97 (I 9 区 SD2-187) は土師器の高坏であろう。器面はナデ調整している。最大径 13.4cm。98 (I 9 区 SD2-1002) は土師器坏で、器面の調整は横方向のナデで、外面全体に煤が付着する。99 (I 9 区 SD1-172) は土師器碗で、器面の調整はすべて横ナデである。口径 13.5cm。100 (SD2-32) は土師器坏で、底面は回転ヘラ切り、見込み部から口縁部の下までは不定方向のナデ、その他は横ナデである。口径 13.2cm、器高 3.7cm、底径 8.2cm。101 (SD2-18) は土師器坏で

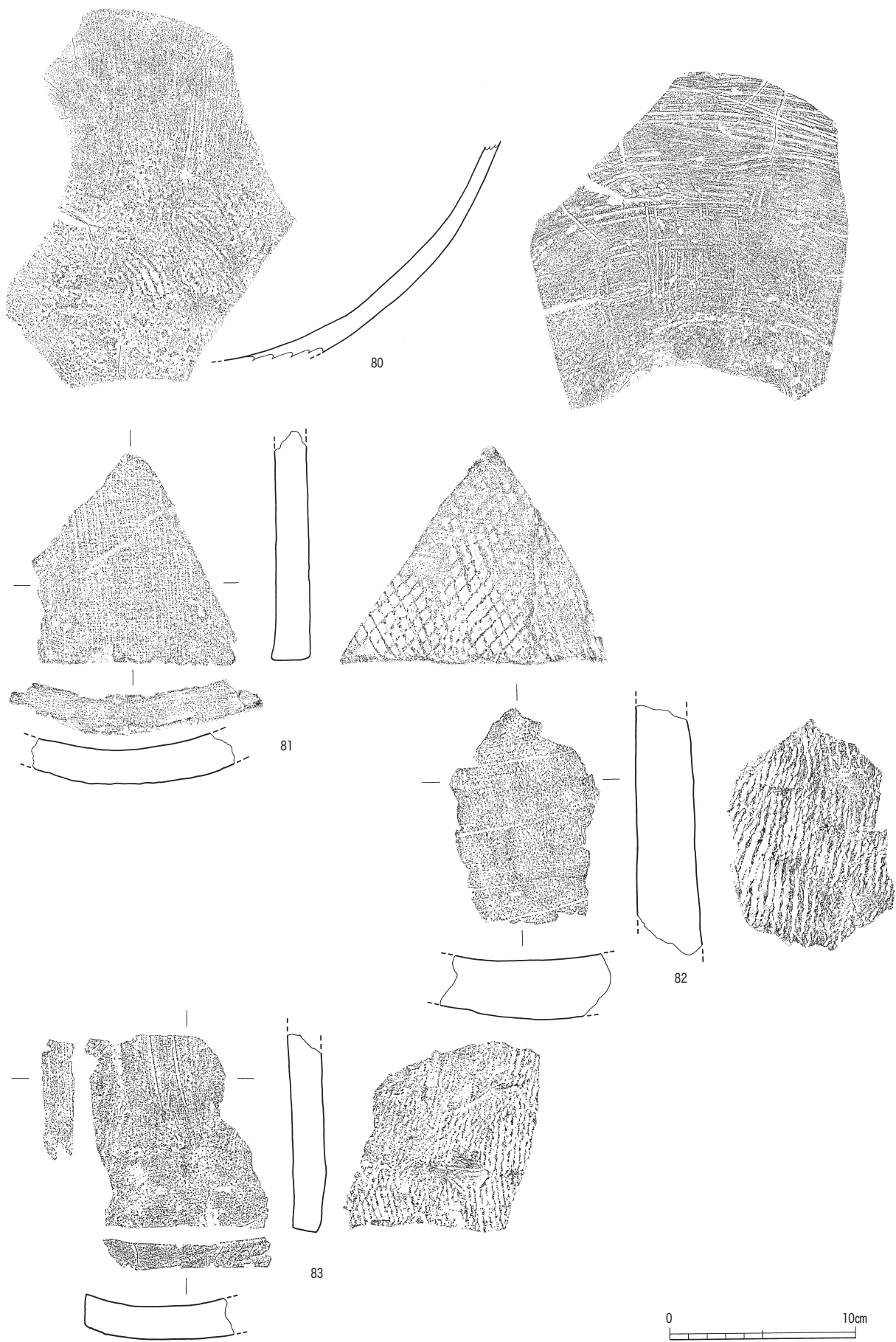
底部は回転ヘラ削りし、その他の面は横方向にナデ調整している。口縁部は外湾気味で胴部は直線的に外反する。底部は丸みを帯びている。口径13.4cm、底径8.3cm、器高4.5cmである。

103 (I 9区 SD2-64) は土師器坏で、底面は回転ヘラ切り、その他は回転横ナデである。底径8.1cm。104 (I 9区 SD2-15) は土師器坏で、底面はヘラ切り、その他は回転横ナデである。底径8.3cm。105 (I 9区・SD2) は土師器の高台付き坏である。底部は回転ヘラ切り後にナデ調整し、高台は貼り付けている。体部は横方向のナデ調整し、見込みはナデ調整。口径は15.8cm、底部最大径は8.4cm、器高は5.2cmである。102 (I 9区 SD1-29) は表面を回転横ナデした土師器坏で、底径7.6cm。106 (I 9区 SD2) は内面を部分的にヘラミガキした土師質の椀で、高台径7.2cm。109 (SD2-43) は土師器坏蓋で、口径12.0cm、回転ヘラ切りした上面径は8.3cm、器高1.5cm。0cm。25 (SD2-22) は須恵器蓋。口径8.9cm。107 (SD2-163) は高台径7.0cm。111 (I 9区 SD2-187) は土師器坏蓋で、上面はヘラ切り、その他は回転横ナデしている。

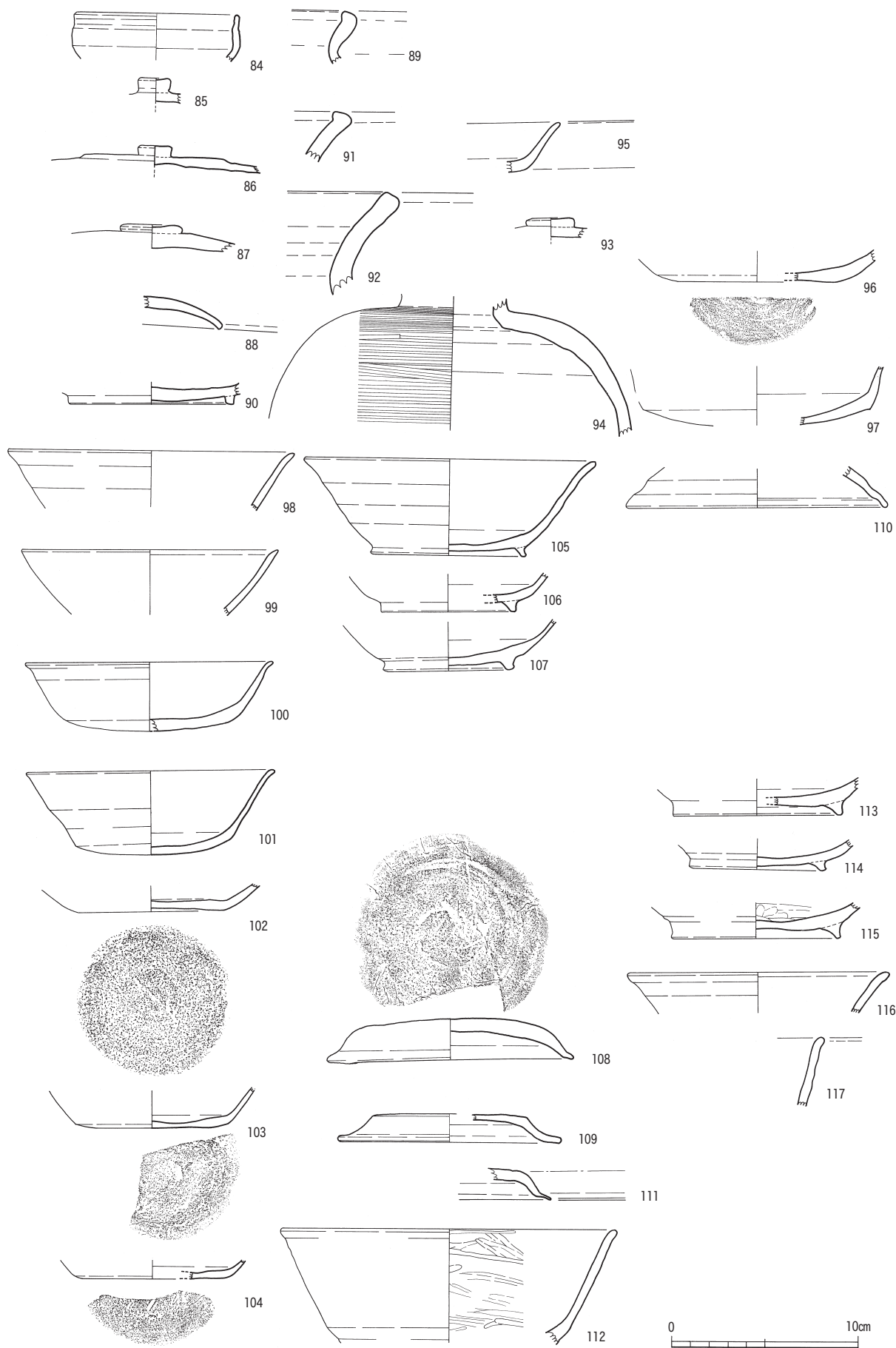
112 (SD2-3・16・186) は内黒土器で、内面はヘラミガキ、外面は回転横ナデ。口径18.0cm。114 (SD2-10) は内黒土器で、高台径は7.3cm。高台内側は回転ヘラ切り、体部は横方向のナデ。115 (SD2-84) は内黒土器で、高台径は9.0cm。内面はヘラミガキ。116 (I 9区) は土師器蓋。器面はナデ調整。口径14.0cm。117 (I 9区) は内黒土器。



第24図 SD1・SD2 平面図・層序図



第 25 图 SD2 出土遺物実測図



第 26 图 SD1·SD2 出土遺物実測図

#### (4)中世の遺構・遺物

この時期の遺構は主に道路側溝である。内部から出土した遺物には古い時期のものもあるがここで示す。SD11・12は欠番である。

#### SD4 (第5図)

D 10 区から E 4 区に続く溝状遺構であり、SD5 が西側に平行するように幅 4 m 程度離れて存在するのでこの二つは道路に伴う側溝とみられる。SD4 は幅 1 m 前後であるが内部は掘り下げていない。

#### SD5 (第5・27図)

C 12 区から E 2 区まで屈曲しながら断続的に続き、E 2 区で屈折して西側に折れる (第 27 図)。

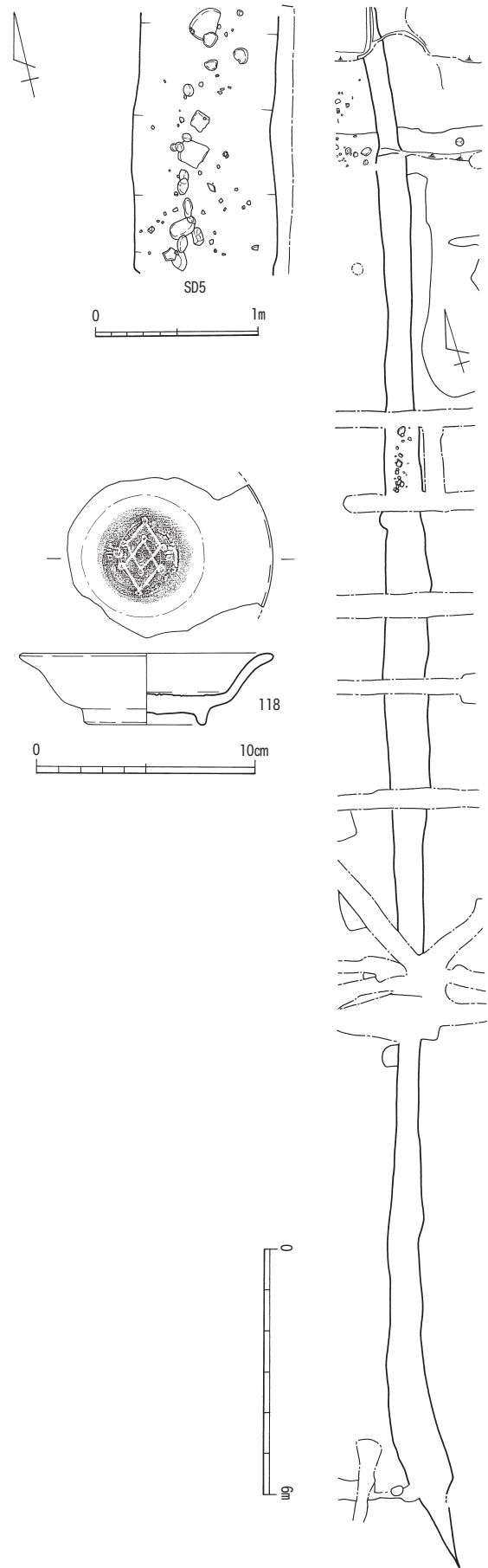
第 27 図 118 は SD5 から出土した中国龍泉窯系青磁皿である。見込みは露胎で、二つの菱形紋を組み合わせたものの左右に「記司」という漢字が入った刻印がある。皿付きから内部はへう削り。口径 11.5cm、底径 5.5cm、器高 3.2cm。

SD4・SD5 は南部では旧あけぼの学園正門の位置に重複する。このことは偶然というよりも、学園建設前の地割りが中世の名残を残していたということであろう。

#### SD6・7 (第28図)

調査区北西部で検出した二条の溝状遺構の一つが SD6 である。SD7 と共に道路の側溝とみられる。第 28 図には検出面における遺物出土状態を示す。

第 29 図 120 (B 3 区 15) は平瓦で、凸面には菱形格子目叩きがあり端部はナデ消されている。凹面には布目痕がある。121 (B 4 区-5) は SD7 のすぐ東側から出土した平瓦である。凸面は菱形の格子目、凹面は布目である。横断面図左端の断面形状は凹面側の半分は桶型の分割突起痕があり、凸面側は折り取られている。122 は B 4 区の SD6・7 に挟まれた位置で出土した平瓦である (第 28 図に出土位置を示す)。凸面は格子目叩きで、凹面は布目。凸面・凹面の片側には赤色塗料が付着する。建物木材に赤色塗料を塗った際に付着したとみられる。123 は B 4 区の SD7 から出土した平瓦である。凸面は格子目叩き、凹面は布目が残る。横断面の左端には桶型の分割突起痕と折り取った痕跡がある。124 は B 5 区 27 出土の丸瓦で凸面は平行文

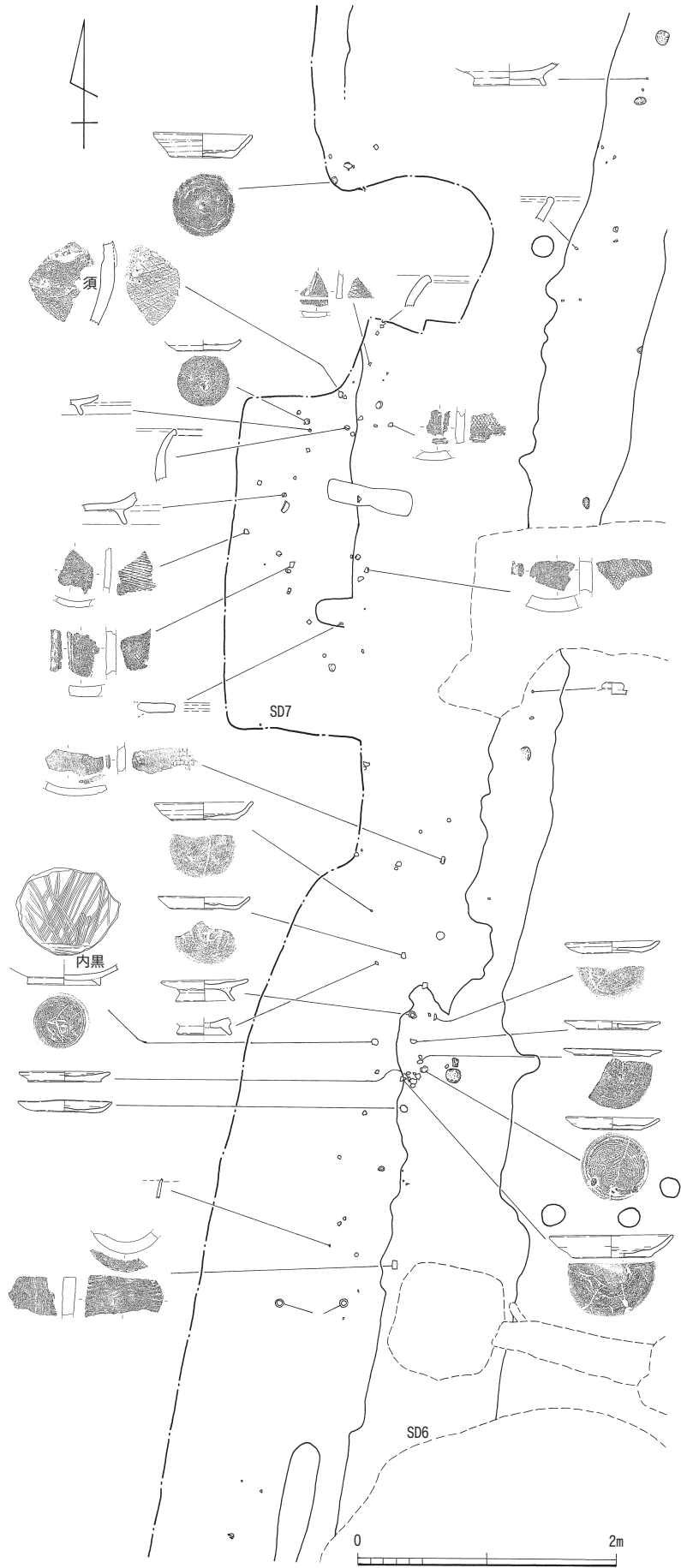


第 27 図 SD5 と出土遺物実測図

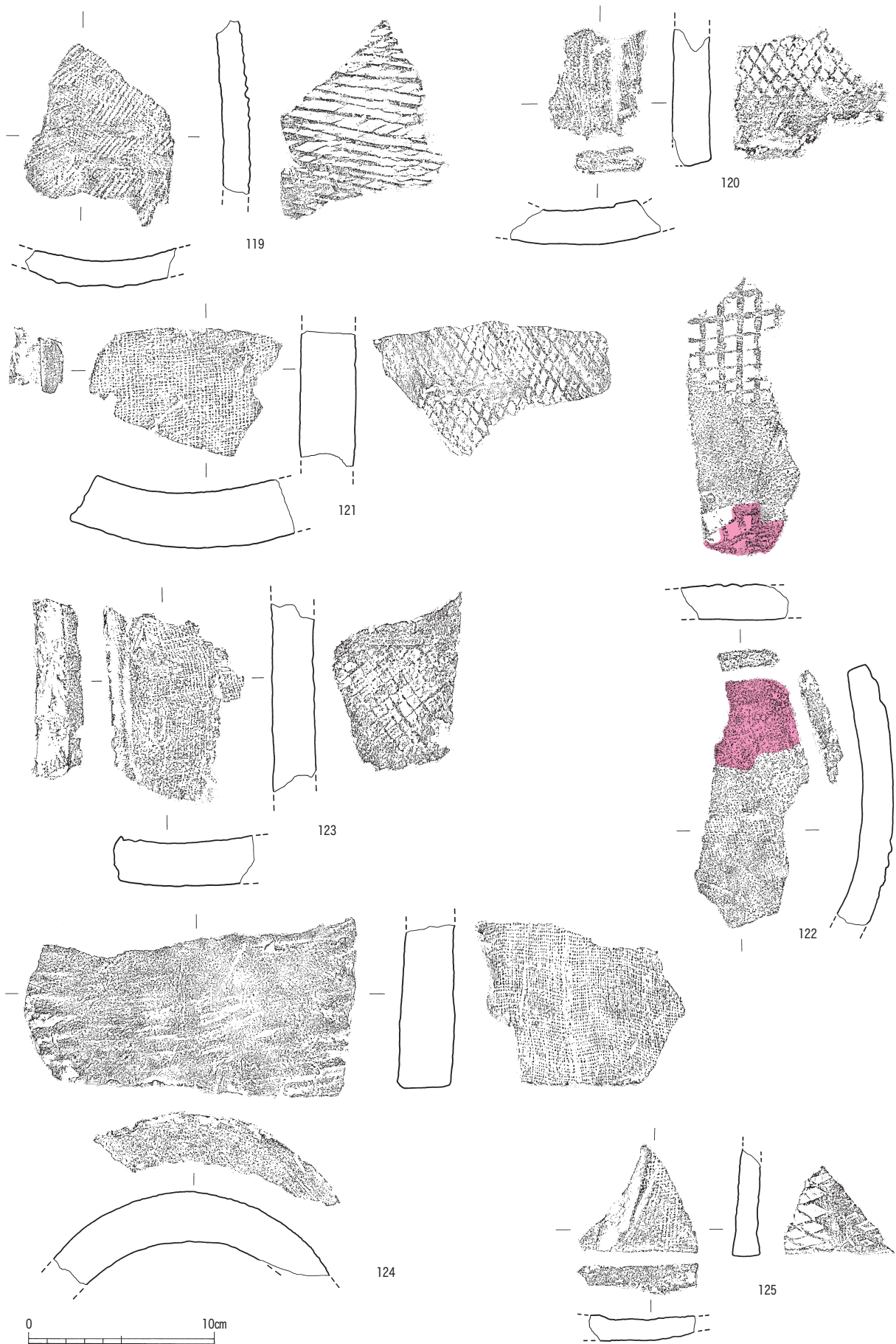


様の叩き、凹面は縄目が残る。  
厚さは最大値で2.9cmある。  
125 (B 3区 19) は最大厚が  
1.5cmの薄い平瓦である。凸  
面に菱形格子目叩きがあり、  
凹面は布目痕がある。

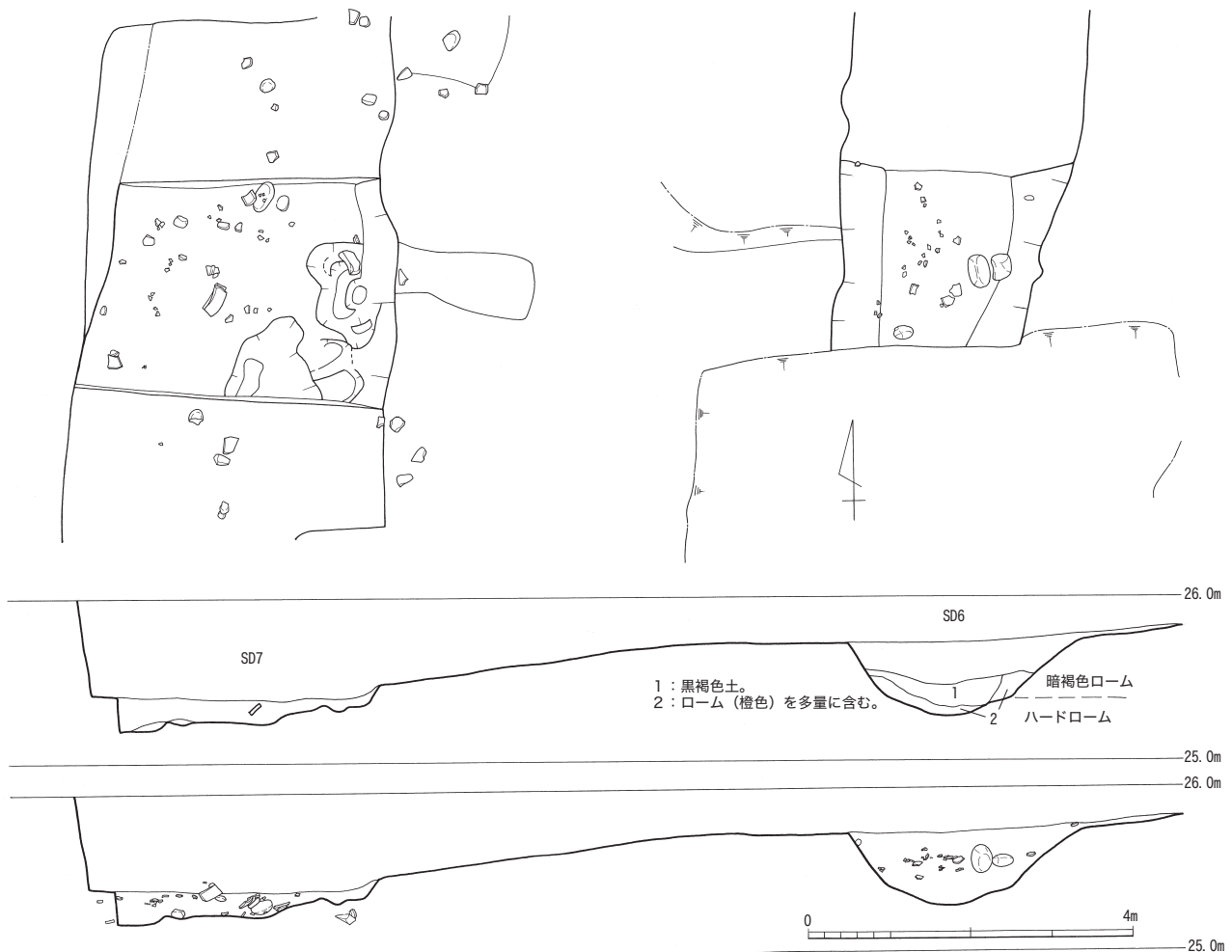
第31図 126 (B 2区 3)  
は縄文晩期の深鉢形土器で、  
器面を放射肋のある二枚貝で  
調整している。黒茶色。127  
は弥生時代の壺形土器の口縁  
部か。橙褐色で器面はナデ  
調整している。128 (B 2区  
4) は弥生時代後期の甕形土  
器である。器面はナデ調整。  
129 (B 5区 包含層) は須恵  
器坏蓋で、横ナデ調整して  
いる。130 (B 4区) は土師器  
甕。131 (B 5区 包含層) は  
須恵器坏蓋のつまみ。つま  
みの直径2.7cm。133 (B 5  
区 包含層) は須恵器甕であ  
る。134 (B 5区 包含層) は  
須恵器壺で、外面にヘラ記  
号がある。施文順序は始め  
に横方向、次に縦方向に直  
線を刻んでいる。135 (B 4  
区 包含層) は須恵器甕。137  
(B 4区 SD6) は土師質土器  
の蓋のつまみである。つま  
みは厚みのある平坦な形で  
上面中央はやや突出する。  
直径は2.5cm、高さは0.9  
cmである。138 (B 5区 包  
含層) は須恵器甕で、口縁  
部両面に施文がある。139  
(B 3区 12) は須恵器甕  
である。斜格子のタタキが  
ある。142 (B 4区) は土師  
器坏。143 (B 3区 6) は  
内黒土器の椀で、内面を  
ヘラミガキしている。外  
器面は回転横ナデ。143  
(B 3区 9・10) は土師器  
甕で、



第28図 SD6・SD7と遺物出土状態実測図

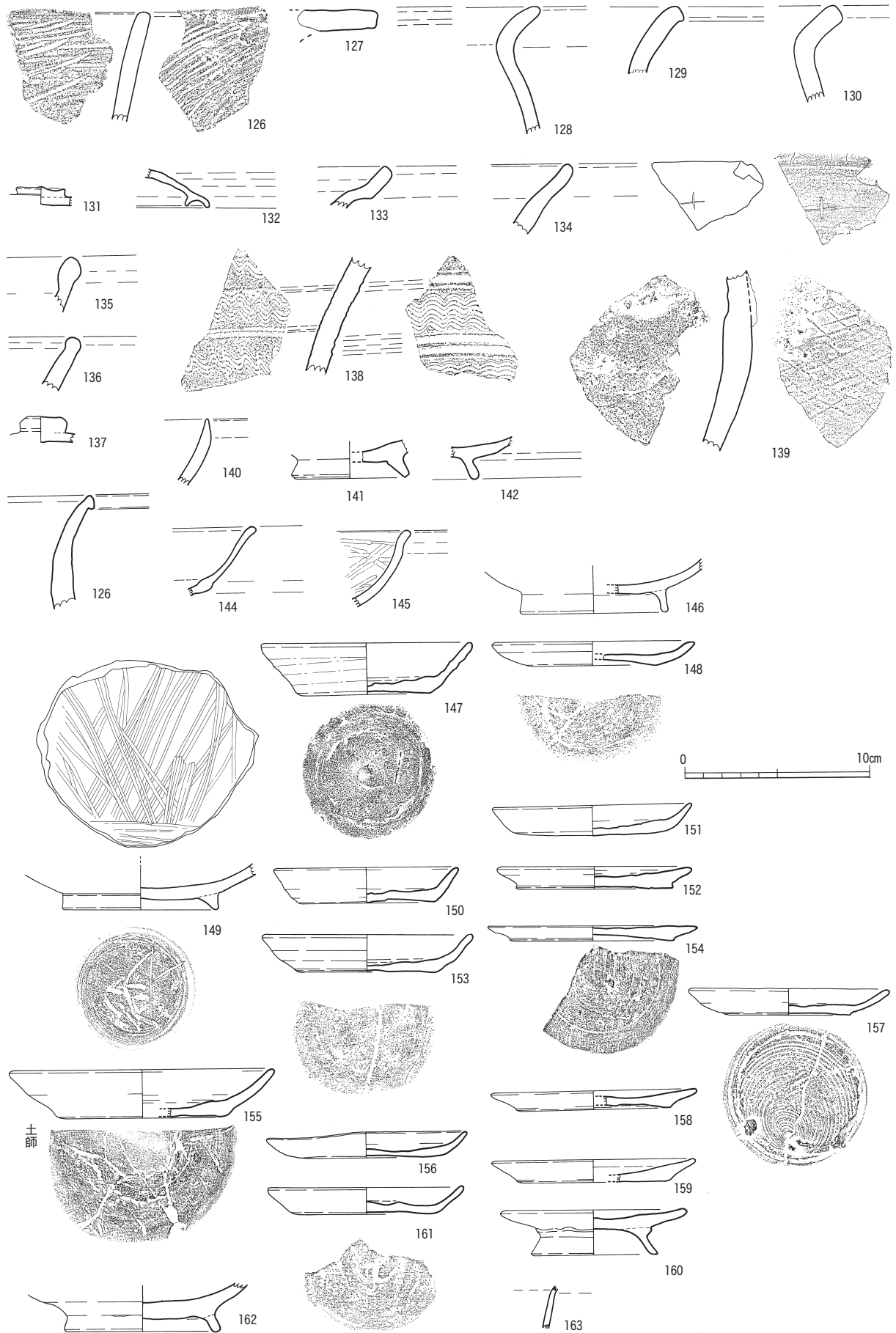


第 29 図 B 2～B 5 区・SD6 と SD7 の中間出土瓦実測図

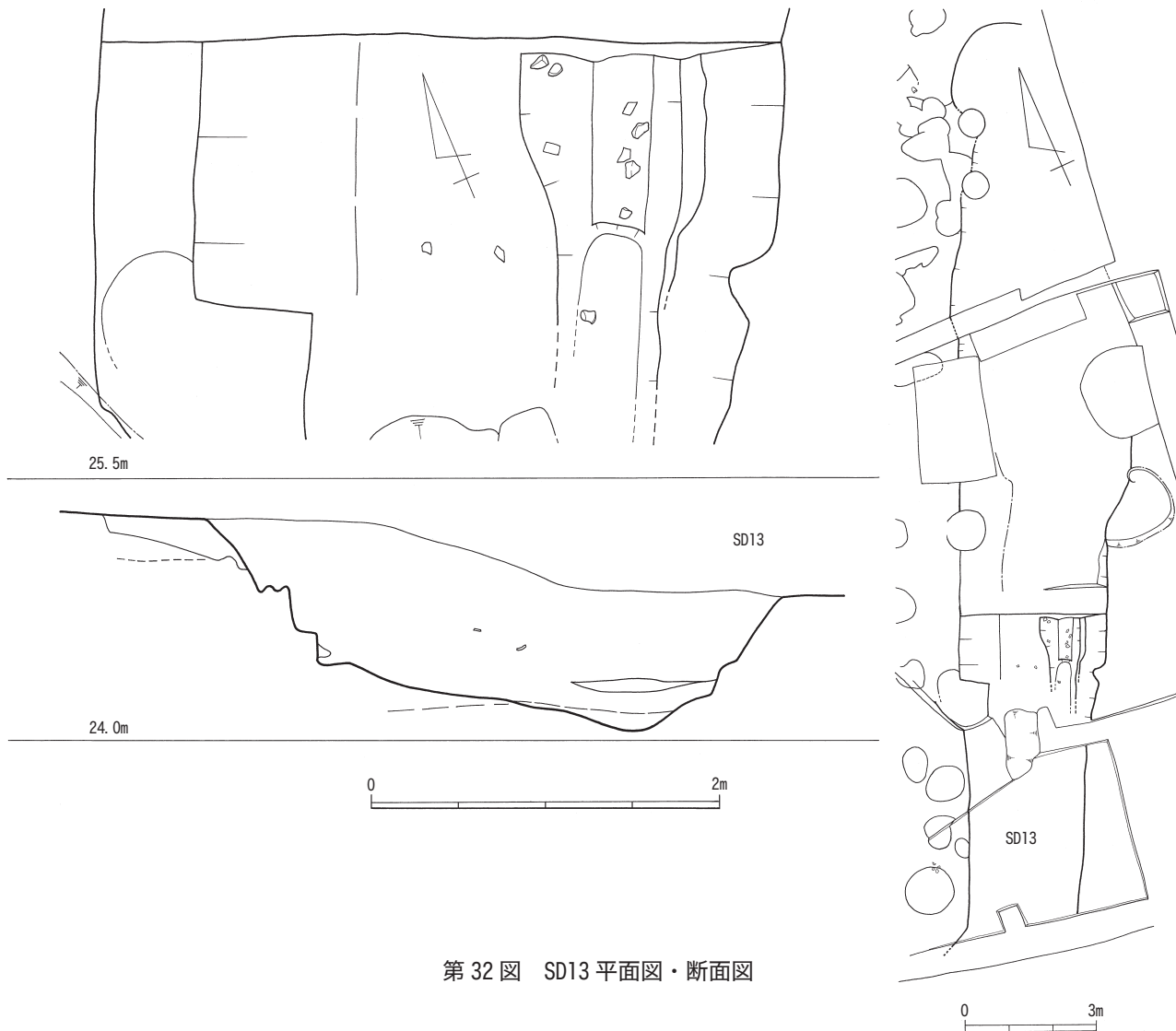


第30図 SD6・SD7 平面図・層序図

器面の調整はナデによる。144 (B 4 区) は土師器坏。145 (B 4 区) は内黒土器の腕。146 (B 2 区) は土師器腕で、器面はナデ調整している。底部最大径 8.0cm。147 (B 3 区 41) は底部へら切り離しの土師器皿で、口径 11.4 cm、器高 2.9cm。内面の見込みは渦巻き状に凹凸があり、口縁外面に煤が一部附着するので灯明皿として使っている。148 は底部糸切り底の土師器坏で、口径 10.4cm・器高 1.3cm・底径 6.6cm。淡い橙褐色。149 (B 4 区 29) は内黒土器の腕で、内面はへらミガキし、底面に尖った棒による記号様の文様がある。底径 8.2cm。150 (B 5 区 包含層) は土師器坏で、底面は回転へら切り。口径 10.0cm、器高 1.9cm、底径 7.0cm。151 は淡橙褐色で底部は回転へら切り離し。口径 10.8cm、器高 1.6cm。152 (B 5 区 9) は回転へら切り離しで淡い褐色の土師器皿。154 (B 5 区 15) は土師器皿。底面は回転へら切りで、板状の圧痕が付く。見込み中央を指ナデしている。口径 11.4cm、器高 0.8cm、底径 8.4cm。155 (B 5 区 4・6・7・12) は底面をへら切りし、板状圧痕が付く。口径 14.4cm、器高 2.6cm、底径 8.8cm である。31 (B 5 区 18) は口径 10.9cm、器高 1.4cm の土師器皿で、底面は回転へら切り、他はナデ調整。150 (B 4 区 24) は底部糸切り底の土師器坏で、口径 11.0cm・器高 2.0cm・底径 7.0cm。157 (B 5 区 14) は土師器皿で、底面は糸切り。口径 10.7cm、器高 1.5cm、底径 6.9cm。158 (B 4 区 34) は底面は回転へら切り、他はナデ調整。口径 11.2cm、器高 1.0cm、底径 8.4cm。底径 8.4cm。159 (B 4 区) は土師器皿で、底面は回転へら切り、見込み中央は指ナデ、その他は回転横ナデしている。口径 11.0cm、器高 1.2cm、底径 8.0cm である。160 は托で。器面はナデ調整で、口径 9.6cm・底部径 6.6cm・器高 2.4cm。161 は底部糸切りの土師器坏。口径 10.4cm・器高 1.45cm・底部径 8.0cm。淡い褐色を呈する。162 (H 7 区 11) は内黒土器で、底面は回転へら切り、その他外面は回転横ナデ、内面は磨き風。底径 8.6cm。第31図 163 (B 5 区 25) は緑釉陶器である。器壁は 3mm 前後と薄い。



第31図 B2～B5区・SD6とSD7付近の出土遺物実測図



第 32 図 SD13 平面図・断面図

#### SD8～10（折込図）

調査区南部にその縁辺と平行に走る細い溝状遺構を検出したが、掘り下げは行っていない。中世以降の道路側溝とみられる。

#### SD13（第 32 図）

H 14 区から I 12 区に続く幅の広い溝状遺構である。一部掘り下げたところ、上面幅は 3.3 m、深さは 1.3 m である。床面は幅 2 m 前後で、西側が高くなる。埋土は分層しにくい黒色土層である。SD11 を SD13 と改称した。

#### SD13 出土遺物（第 33 図）

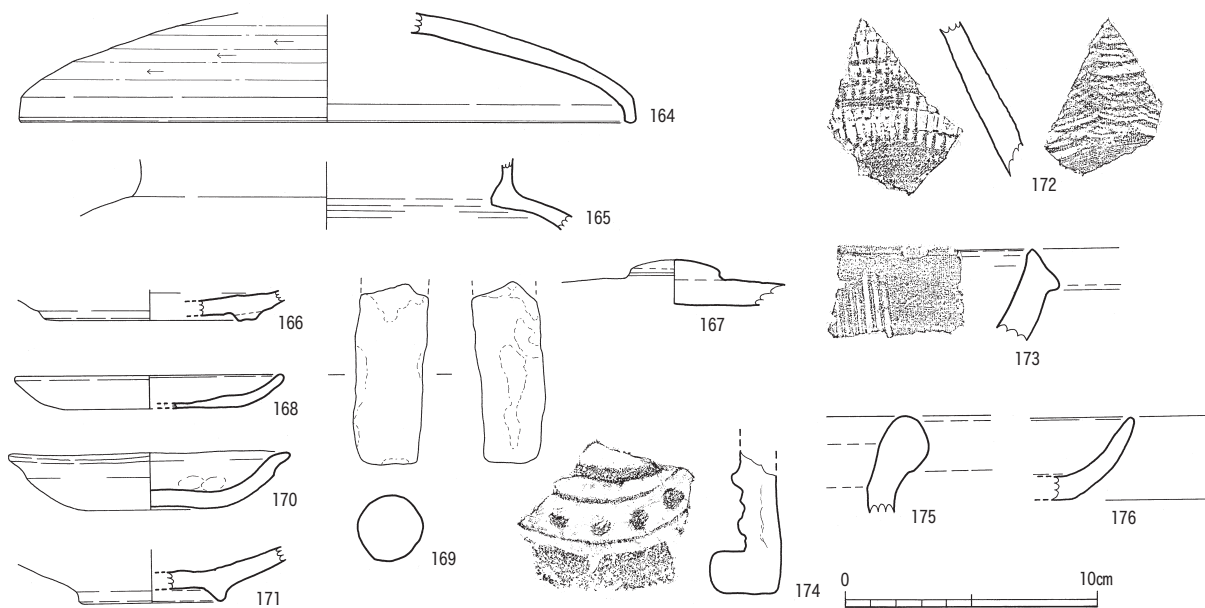
第 33 図 164（I 12 区 SD11 → SD13 と改称）は須恵器盤・皿類の蓋で、口径 24.2cm。外面上部は幅 2 cm くらい回転横ナデ、そこから口縁部に向かい長さ 6 cm は回転ヘラ削りしている。165 は I 13 区の SD13 から出土した須恵器壺の頸部付近である。胴部と頸部の変換点は内側に突出して厚く、その部分の頸部内側の直径は 11.8cm である。166（I 13 区）は須恵器杯の高台付身杯、底径 8.5cm。168（I 14 区 SD13）は土師器杯で、磨耗のため器面の詳細は不詳である。口径 9.0cm、器高 1.3cm。170（I 13 区 SD13）は京都系土師器杯で、手づくね成形。口径 11.2cm、器高 2.3cm。171（I 14 区 SD13）は陶器皿で、見込みに蛇の目状の釉剥ぎがある。畳付きから内側は露胎。底径 5.8cm。169（H 13 区）は SD13 出土の土師質土器の脚部である。砂粒が多く淡い褐色。手づく

ねで成形している。

174 は I 13 区出土の軒丸瓦で、連珠文と巴文がある。174 は I 13 区出土の須恵器甕の胴部片である。外面は格子目叩き、内面は青海波文である。173 (I 13 区) は備前焼播鉢で、口縁端部は斜めになる。7 条単位の櫛目がある。15 世紀のものである。175 (I 14 区 SD13) は備前焼甕である。176 は中世の土師器坏で、底面は糸切り離しである。

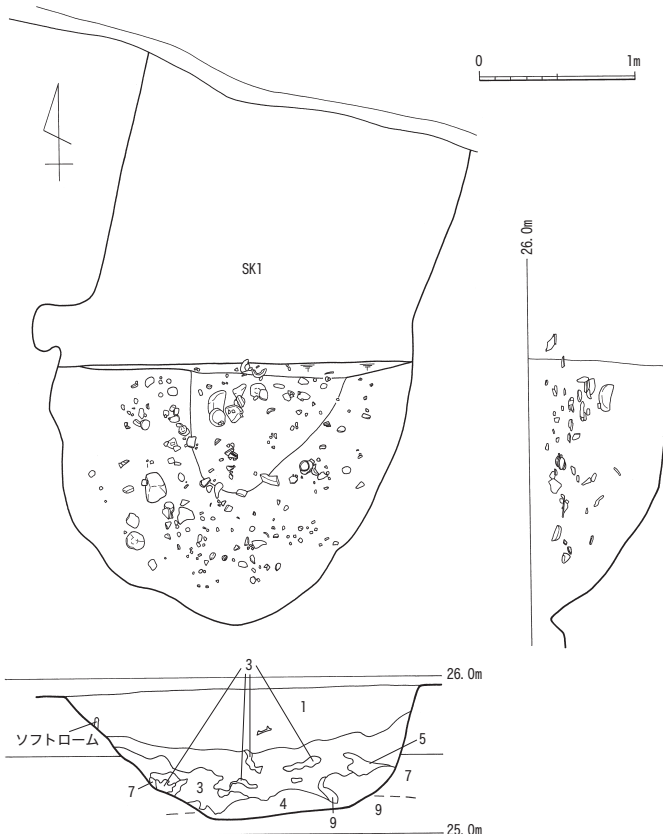
SK1 (第 34 図)

SK1 は D 5 区東部にある楕円形平面の土坑である。北部は攪乱が重なる。SK1 の南にも楕円形土坑である SK2・



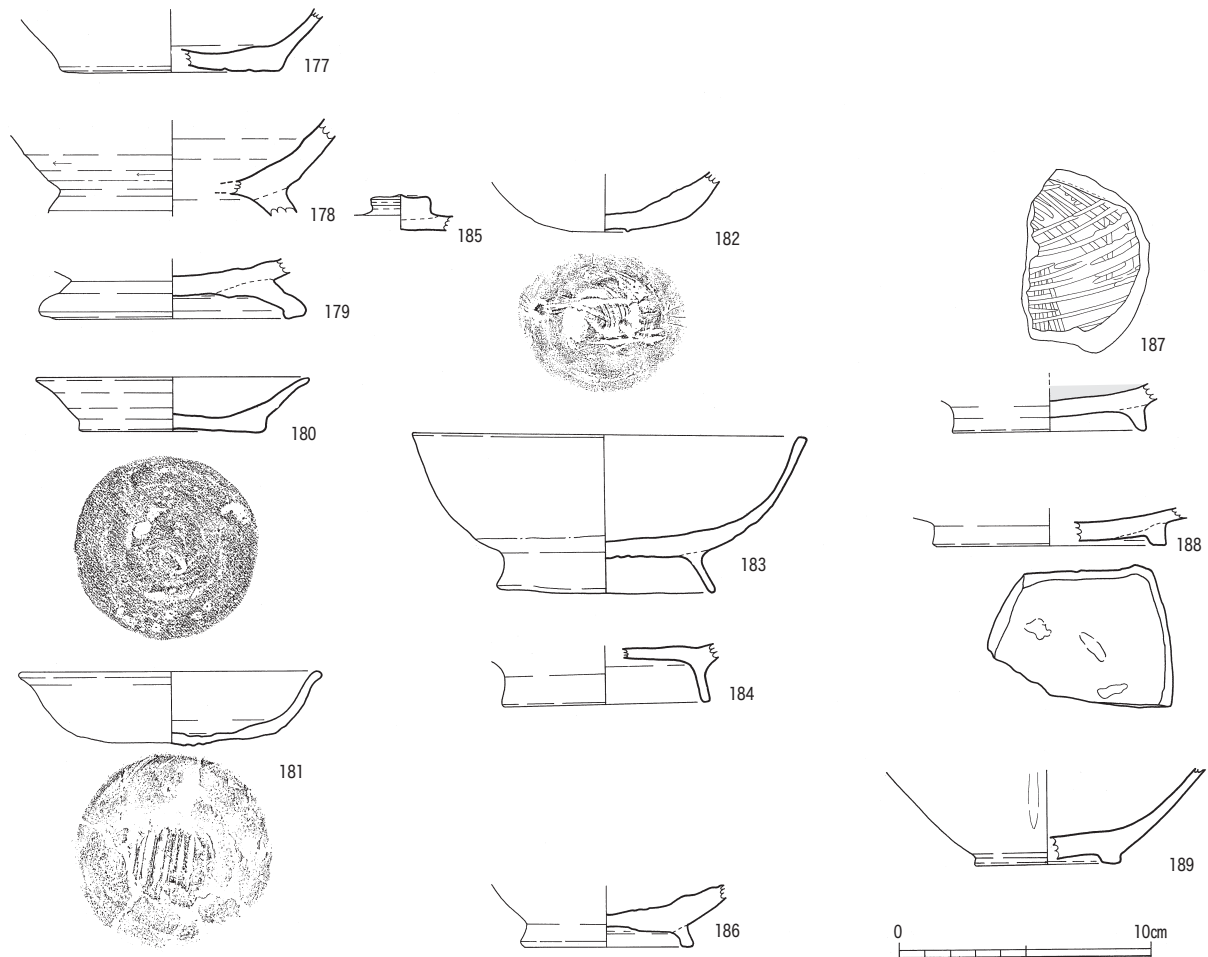
第 33 図 SD13 出土遺物実測図

SK3・SK4 が断続して一直線に並んでおり、これらは一連の遺構を形成すると思われる。SD5 のうち、E 4 区北部で遺構が西側に張り出す部分があるが、SK1 等の延長上に土坑がある可能性がある。とすれば、調査区中央から東部を区画する遺構であったとも考えられる。



- 1 : 暗褐色土。
- 2 : 1 より黒く 橙少量を含む。
- 3 : 黒色土。
- 4 : 褐色粘質土。
- 5 : 4 に似るが柔かい。

第 34 図 SK1 平面図・断面図



第 35 図 SK1 出土遺物実測図

SK1 出土遺物 (第 35 図)

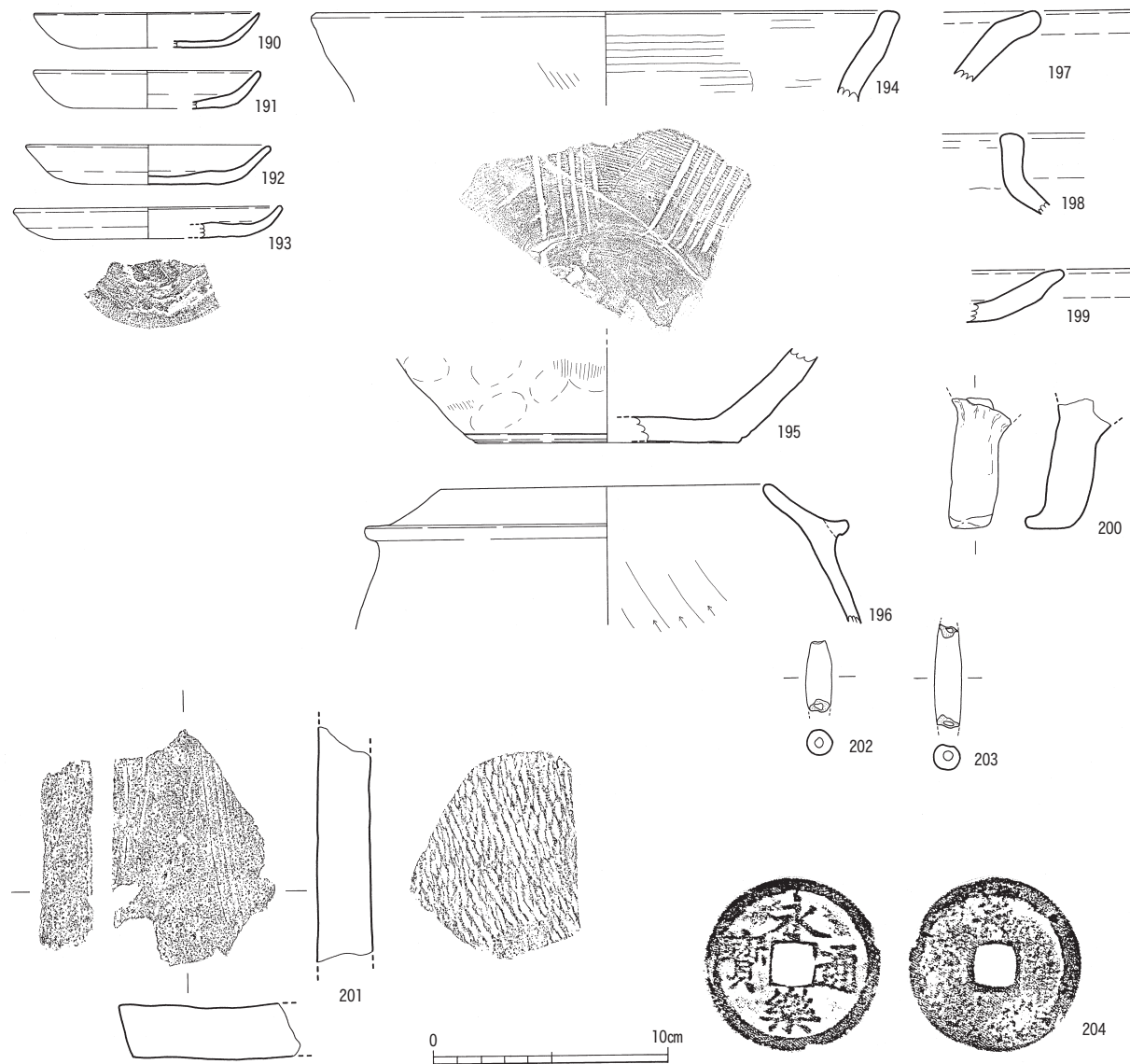
第 35 図 177 (SK1-46) は須恵器坏身で、底面は回転ヘラ切り、体部は回転横ナデ。底径 8.6cm。178 (SK1-54) は須恵器壺である。179 (SK1-57) は須恵器壺の底部で、内面には自然釉が付着する。高台内径 9.2cm、外径 120.6cm。180 は土師器坏で、底部は回転ヘラ削り、口径 10.7cm、底径 7.0cm、器高 2.1cm。181 (SK1-8) は土師器皿で、底面は回転ヘラ切り、その他は回転横ナデ。底面中央部に編み物状の圧痕が付く。口径 11.8cm、高さ 3.0cm。182 (SK1-51) は土師器椀で、底面は回転ヘラ切り、その他は回転横ナデ。181 と同様の圧痕が付く。183 (SK1-15) は土師器椀で、内面から体部外面は回転横ナデしている。口径 16.0cm、器高 6.5cm、底径 8.6cm である。184 (SK1-38) は土師器高台付き椀で、器面はすべてナデ調整。底径は 6.8cm。186 (SK1-5) は土師器椀で、見込み部は中心に向かい渦巻状の指ナデ。底径 6.6cm。オリーブ色である。高台は削り出しており、底径 5.8cm である。185 (SK1-17) は須恵器坏蓋のつまみ。直径 2.4cm。

187 (SK1-31) は内黒土器で、底面は回転ヘラ切り離し。底径 7.6cm。188 (SK1-1) は須恵質の緑釉陶器である。全面に釉葉が掛けられている。底径 9.4cm。189 (SK1 検出時出土) は中国の越州窯青磁碗である。口縁部を欠く。見込みには使用による細かな傷が認められる。外面に一箇所縦方向の窪みが見られる。出土品は破片であり、完全なら数箇所ある筈である。見込みには三箇所の目跡が残る。釉葉の色は黄色がかったオリーブ色である。高台は削り出しており、底径 5.8cm である。

SK2 ~ 4・5 は内部を調査していないので出土遺物はない。SK5 は H 3 区南西部にあり、別の土坑とは位置が異なる。SK1 出土遺物は 10 世紀代のものが主体であり、Ⅲ期とした築地遺構 SD1・SD2 に近い時期のものと思われる。

包含層等出土遺物（第36～42図）

第36図 190（I 13区古代包含層）は精製胎土の土師器坏で器壁が薄い。口径9.6cm、器高1.5cm。191（I 13区II層）はナデ仕上げした土師器坏で、口径9.6cm、器高1.6cm。192（D 6区I）は土師器の皿で、底面はへら削り、他は横方向のナデ仕上げである。底径6.6cm。193（A 5区包含層）は土師器皿で、底面は回転へら切り、見込み部は指ナデ、その他は回転横ナデである。口径11.4cm、器高1.3cm、底径8.2cm。194（H 8区25）は土師器



第36図 包含層等出土遺物実測図

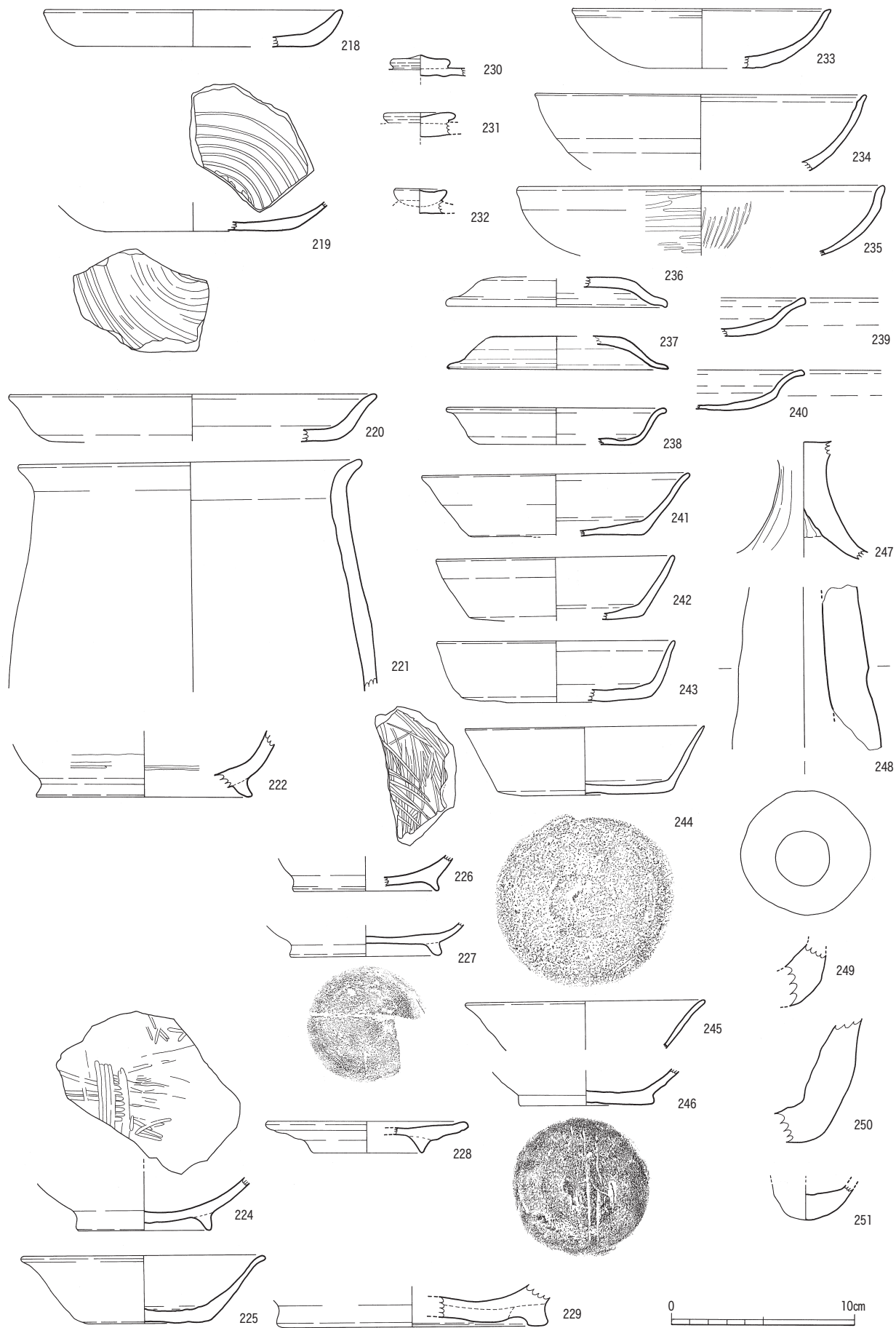
の企救型甕形土器である。口縁部外面は横方向のナデ、他は刷毛目調整。口径25.0cm。195（C 7区）は瓦質土器の播鉢で、外面は指圧痕と縦方向の刷毛目があり、内面は横方向の刷毛目と6条の櫛目がある。底径11.2cm。196（I 11区5）は土師器の鍔付き甕で内面下部は斜め方向のへら削り、他はナデ調整。口縁内径は13.3cm。197（C 7区築地攪乱部）は土師質土器の土鍋で、淡黒灰色を呈する。器面の調整は横方向のナデである。198（I 12区）は中世の土師質土鍋で、器面は回転横ナデ。199（C 7区）は京都系土師器である。200（I 区11）は土師質土器の脚部である。高さ5cm前後。202（I 13区黒色土）は一端を欠く土師質の土錘で、長さ2.9cm、幅1.1cm、孔径0.4cm、重さ3.8gである。203（I 13区黒色土）は同じく長さ4.3cm、幅1.1cm、孔径0.4cm、重さ5.6g。201（H 8区14）は平瓦で、凹面は板具のナデ、凸面は縄目痕がある。204（I 13区黒色土層）は明の銅銭で永楽通宝。重さ2.2g、直径2.5cm。





第 37 図 Ⅰ区包含層出土遺物実測図

第 37 図 205 (SK5-2) はサヌカイト製の旧石器時代剥片。黒塗りつぶしは傷である。206 (C 4 区 3) は流紋岩製の剥片で、二次的な使用痕は認められない。長さ 6.2cm、幅 4.9cm、厚さ 1.4cm、重さ 48.5g である。207 (C 4 区 1) は青黒色と灰色の混じったチャート製で、先端を欠く打製石である。長さ 2.0cm、幅 2.1cm、厚さ 0.3cm、重さ 1.6g である。208 (Ⅰ 12 区包含層) は縄文時代晩期鉢形土器の底部。底径 7.2cm。209 (E 7 区築地攪乱) は弥生土器甕である。底径 6.2cm。210 (F 5 区一括) は土師器の小型甕。胴部内面はへら削り、外面は刷毛目風、その他は横方向のナデ。口径 9.9cm。211 (Ⅰ 9 区包含層) は土師器底部。底径 6.0cm。外底面は回転へら削り、他は横方向のナデ。212 (D 11 区 3) は土師器高坏である。器面の調整は脚部内側はへら削り、脚端部は横方向のナデ調整、筒部はへら削り、坏部はナデの後に内面をへらミガキしている。口径 15.4cm、器高 11.1cm、底径 11.1cm、坏部直径 15.4cm である。213 (Ⅰ 9 区 11・包含層) は古墳時代の土師器丸底壺で、内面下部はへら削



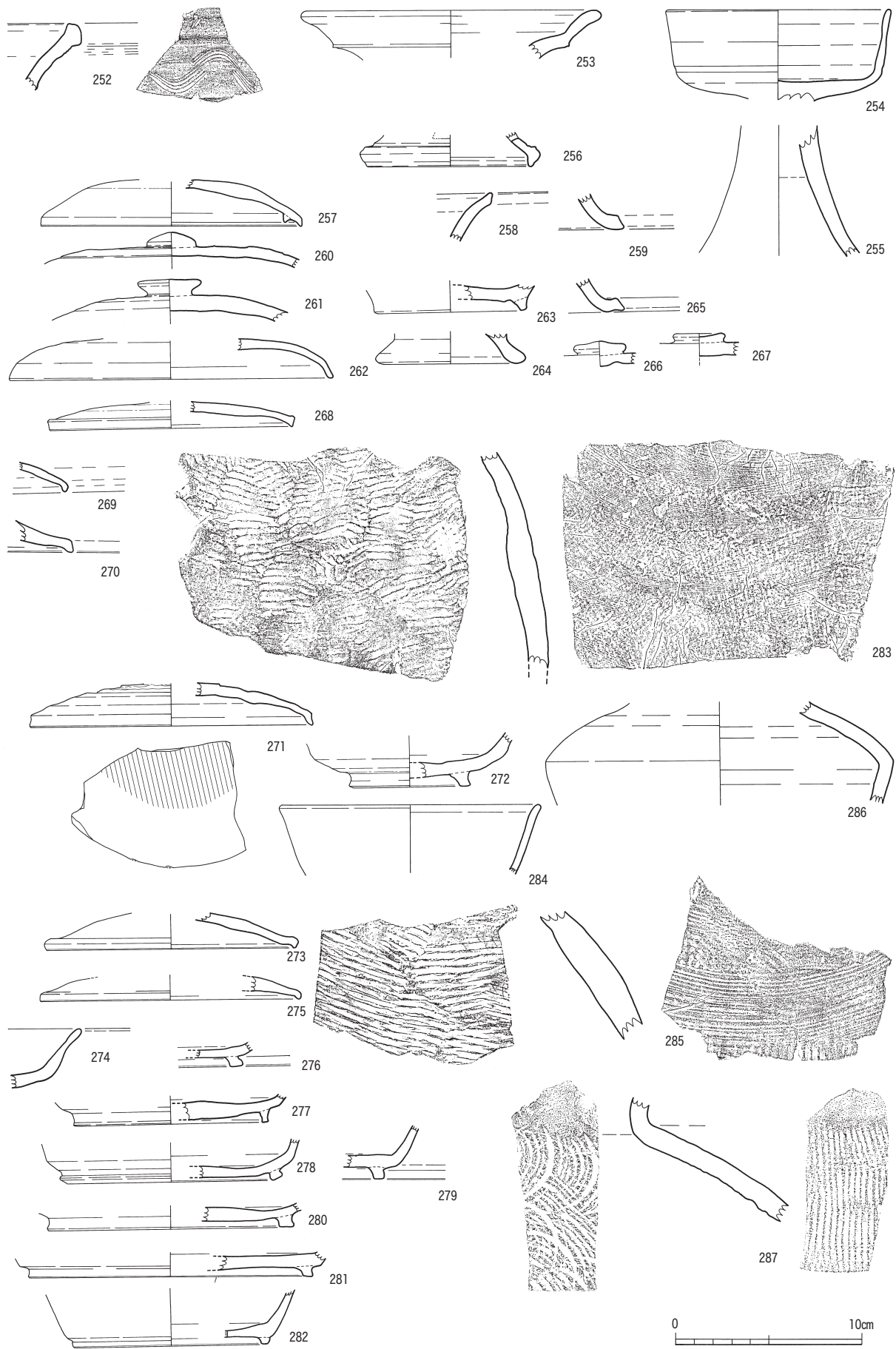
第 38 图 包含厝等出土遺物実測図

り、その他は刷毛目調整し、口縁部周辺はナデ消す。口径9.4cm、幅12.0cm、器高12.2cm。214（I 12区包含層）は土師器甕で、胴部内面は斜め方向のへら削り、外面は縦方向の刷毛目、口縁部は横方向にナデ調整している。口径21.5cm。215（I区包含層）は土師器甕で、口縁部は緩やかに外湾し、口径28.0cm。胴部内面は縦方向のへら削り、外面は縦方向の刷毛目、口縁部周辺は横方向のナデ調整。216（G 5区一括）は土師器甕の把手。217（H 9区40）は土師器の蓋。ナデ調整後、同心円状にへら磨き。

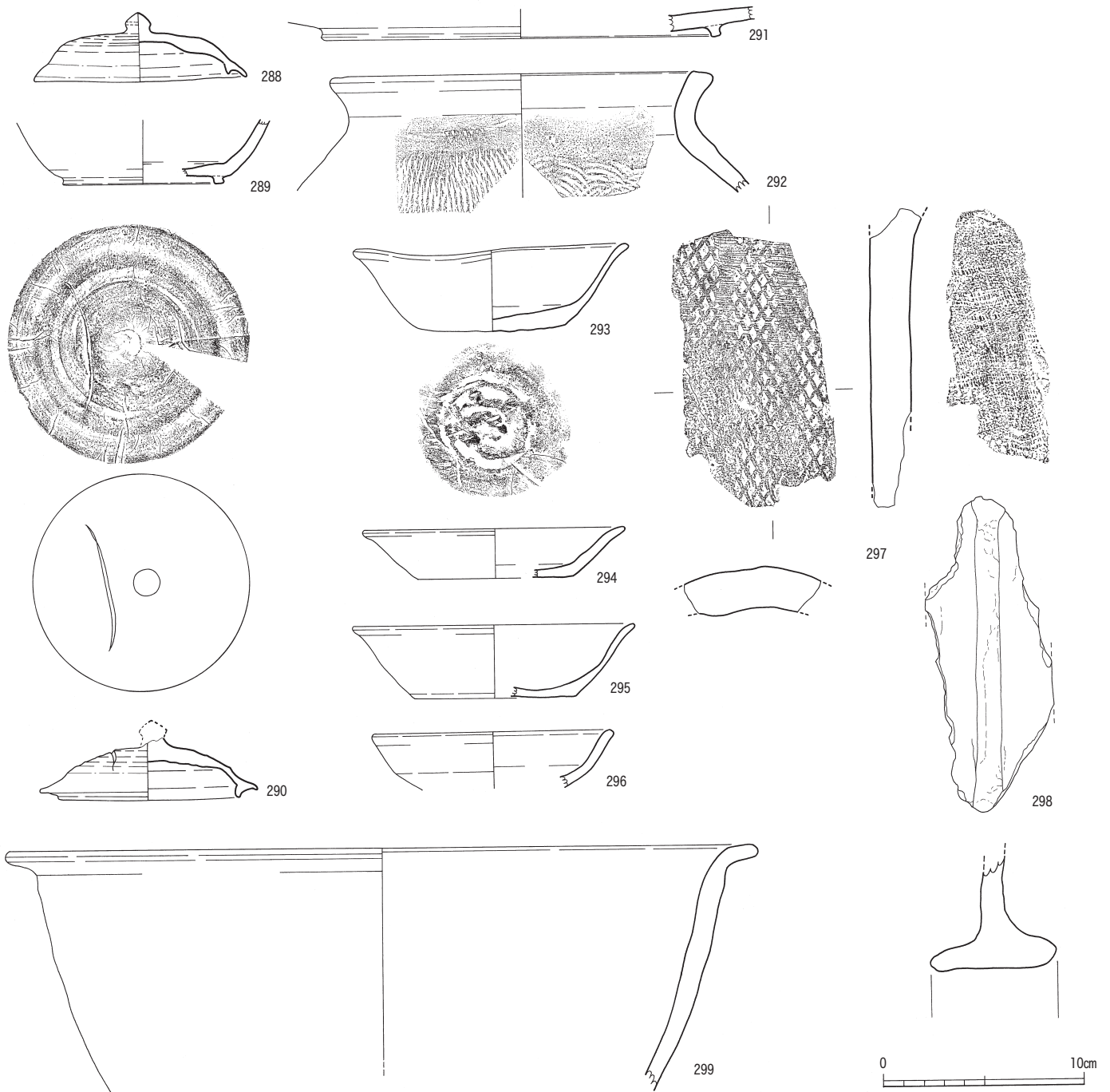
第38図218（H 11区4）は土師器皿で底面から体部下半と見込み部は中心から外方向のナデ調整、口縁部は横方向のナデ。口径14.3cm、器高2.0cm。219（I 10区包含層）は土師器坏で、両面とも同心円状のへらミガキ底径は9.4cm。220（H 9区43）は土師器皿で器面は横方向のナデ、口径20.0cm、器高2.6cm。221（J 10区16）は土師器甕で、器面が磨耗していて調整の観察不能。胴部内面は凹凸がみられ、へら削りらしい。口径18.6cm。222（I 8区28）は土師器碗で内面は部分的にへら磨き。底径11.6cm。224（I 8区17）は内黒土器で、底面は回転へら切り、内面はへらミガキ。底径7.0cm。224（I 12区2）は底面を回転へら切りし、内面はへらミガキ、外面は横方向のナデ。高台の直径は7.8cm。228（D 8区1）は土師器坏で、器面の調整は回転横ナデ。口径11.0cm、器高1.8cm、底径6.0cm。229（B 11区）は土師器甕か。厚さは1.0cm以上ある。器面はナデ調整。底部最大径は14.8cm。淡い褐色を呈する。230・231は須恵器のつまみ。232（I 13区II層）は土師器のつまみ部分で直径2.8cm。235（J 10区15）は土師器の大型皿で、口縁部外面を少し窪ませ、外面は横方向のへらミガキ、内面は縦方向に感覚を空けてへらミガキしている。口径20.0cm、器高3.8cm以上。236（F 9区一括）は土師器坏蓋で、口縁部端をわずかに内側に折る。外面上部は回転へら切り後に不定方向のナデ、天井部も中心近くは不定方向のナデ、その他は回転横ナデ。口径12.0cm。239（I 9区包含層）は土師器皿。底面は回転へら切り、その他は回転横ナデ。240（I 9区包含層）は土師器皿。底面は回転へら切り。見込み部は不定方向の指ナデ、その他は回転横ナデ。241（I 9区包含層）は土師器坏で、底面は回転へら切り、見込み部は不定方向の指ナデ、その他は回転横ナデ。口径14.6cm、器高3.4cm、底径9.4cm。244（I 9区4）は土師器坏で、底面は回転へら切り、その他は回転横ナデしている。口径12.9cm、器高3.7cm、底径9.4cm。246（I 12区7）は土師器碗で、底面は回転へら切り、見込み部は不定方向の指ナデ、その他は回転横ナデしている。底径7.3cm。247（I 8区31）は土師器高坏。248（I 12区3）は鞆の羽口。長さ8.9cm、最大径8.1cm。249（I 9区包含層）は胎土に1mmから3mmの石英が非常に多い。手づくねで淡い橙色。鍛冶関係遺物。250（I 9区包含層）は鍛冶関係の土師質土器。淡い橙色。251（I 9区包含層）も250と同様の遺物。

第39図252（I 13区黒色土層）は須恵器甕で、外面に櫛描き波状文がある。253（G 10区10）は須恵器壺で、口径16.0cm。254（H 7区19）は須恵器高坏で、口径11.8cm。255は須恵器高坏脚部である。256（I 12区攪乱土坑）は須恵器高坏の脚部。透かしがある。底径8.6cm。257（B 8区1）は須恵器坏蓋で、内側に接地面に付かないかえりが付く。口径14.0cm。259（I 10区包含層）は須恵器高坏の脚部である。260（I 12区1）は須恵器坏蓋で、外面のつまみ以外は回転へら削りである。つまみの径は2.6cm。261（I 11区2）は須恵器坏蓋で、外面のつまみ以外は回転へら削りである。つまみの径は3.4cm。262（I 11区4）は須恵器の蓋である。直径は17.0cm、高さは2.1cm。器面には横ナデの痕跡だけが全面にある。264（I 12区包含層）は須恵器壺の脚部である。底径8.0cm。265（I 9区包含層）は須恵器高坏の脚部。266（I 12区）は須恵器坏蓋で、つまみの直径は2.8cm、高さは0.7cmである。268（H 12区1）は須恵器坏蓋で、口径13.2cm。外面の中程は幅2.5cm前後を回転へら削り。269（H 12区6）は須恵器坏蓋で、器面は回転横ナデしている。270（I 9区包含層）は須恵器坏身。271（I 13区II層）は須恵器坏蓋で、口径15.2cm。外面上半分は回転へら切り、その他は回転横ナデ。内面天井部上半分は硯として転用したため滑らか。272（J 10区1）は須恵器坏身で、体部から底部は緩やかに移行する。高台は内側に付き、高台径6.5cm。

274（I 12区）は須恵器坏身で、外底面は回転へら切り。275（H 9区1）は須恵器坏蓋で、口径13.9cm。276（I 9区包含層）は須恵器坏身で、体部から底部への移行は緩やかである。277（I 13区II層）は須恵器坏身で、底径は10.5cm。278（I 9区包含層）は須恵器坏身で、底部から体部にかけては二度屈折し、高台が付く



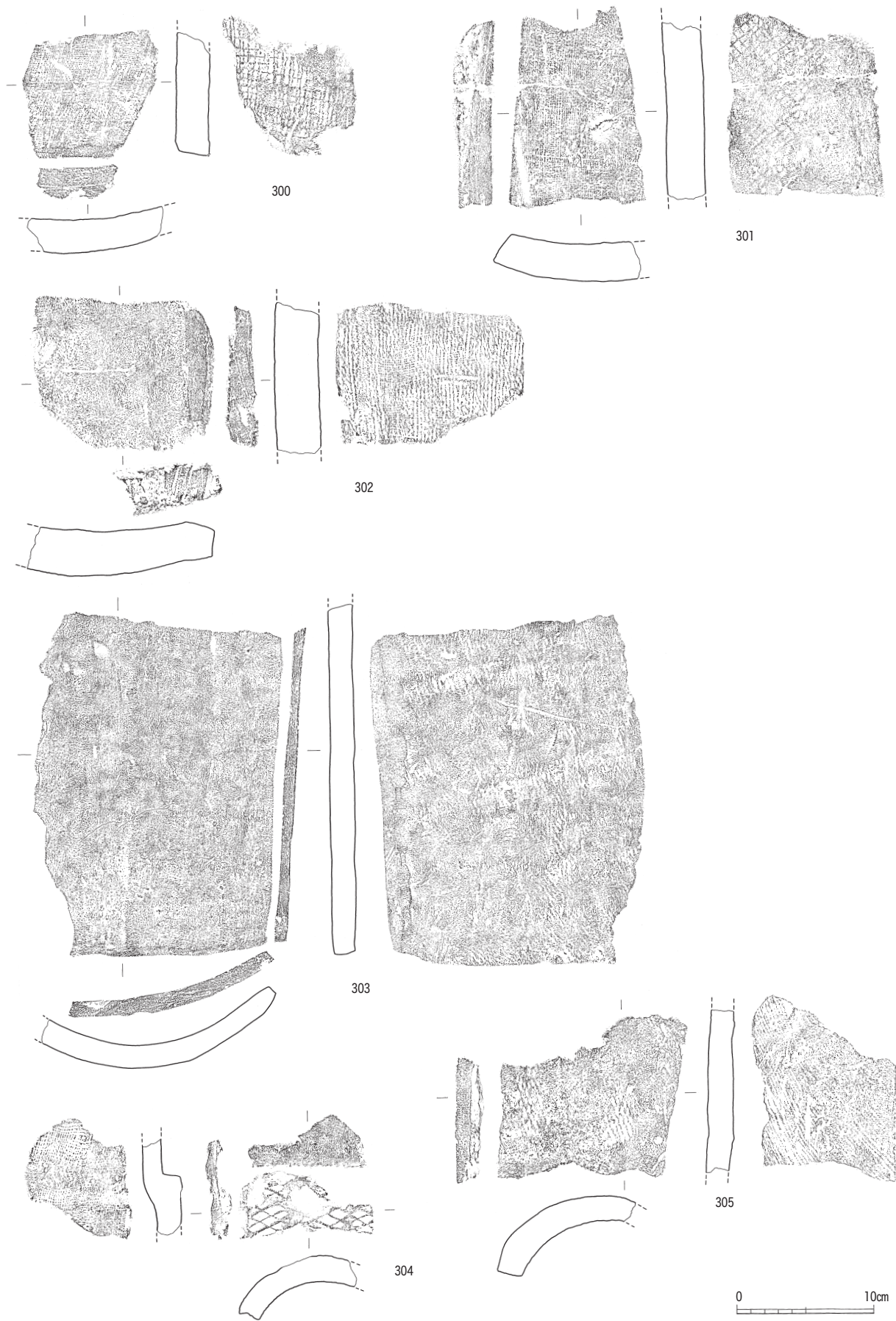
第 39 图 包含層等出土遺物実測図



第 40 図 包含層等出土遺物実測図

底径 11.9cm。279 (I 13 区 II 層) は須恵器坏身で、底部の端から 8mm ほど内側に高台が付く。280 (I 9 区包含層) は須恵器坏で底径 13.2cm。282 (I 9 区包含層) は須恵器坏で、底径 15.2cm。見込み全体に赤色顔料が付着する。転用硯。280 (I 10 区包含層) は須恵器坏身で、底部の端に高台が付く。底径 10.5cm。283 (I 13 区 8) は須恵器壺で外面は格子目叩きのあとカキ目調整、内面は平行文様の当て具痕がある。285 (H 12 区包含層) は須恵器坏身で、口径 14.0cm である。286 (I 11 区 3) は須恵器長頸壺である。内外面とも横ナデである。286 (H 9 区 P1) は須恵器甕で外面は格子目叩きの後からカキ目調整、内面は平行文の叩き目が残る。器壁は 1.8cm と厚い。287 (I 9 区 9) は須恵器甕である。

288 (J 9 区 90) は I と並んで出土した。つまみを欠く他は壊れていない。外面にはへらで印を付けている。これも天井点中央に二回指ナデを並べるように行っている。返しは十分に接地する長さがある。口径 10.8cm、器高 3.1cm。第 40 図 290 (J 9 区 91) は須恵器坏蓋で、つまみを欠失するが完品である。天井部以は回転へら削りを施し、内面には接地しない低いかえりがある。天井部中央は幅 5cm ほど一方向に指ナデしている。口径は 10.5cm、器高は 3.4cm。SD1 と重複するように出土した。293 (J 9 区 23) は土師器坏で、口縁端部は外湾す

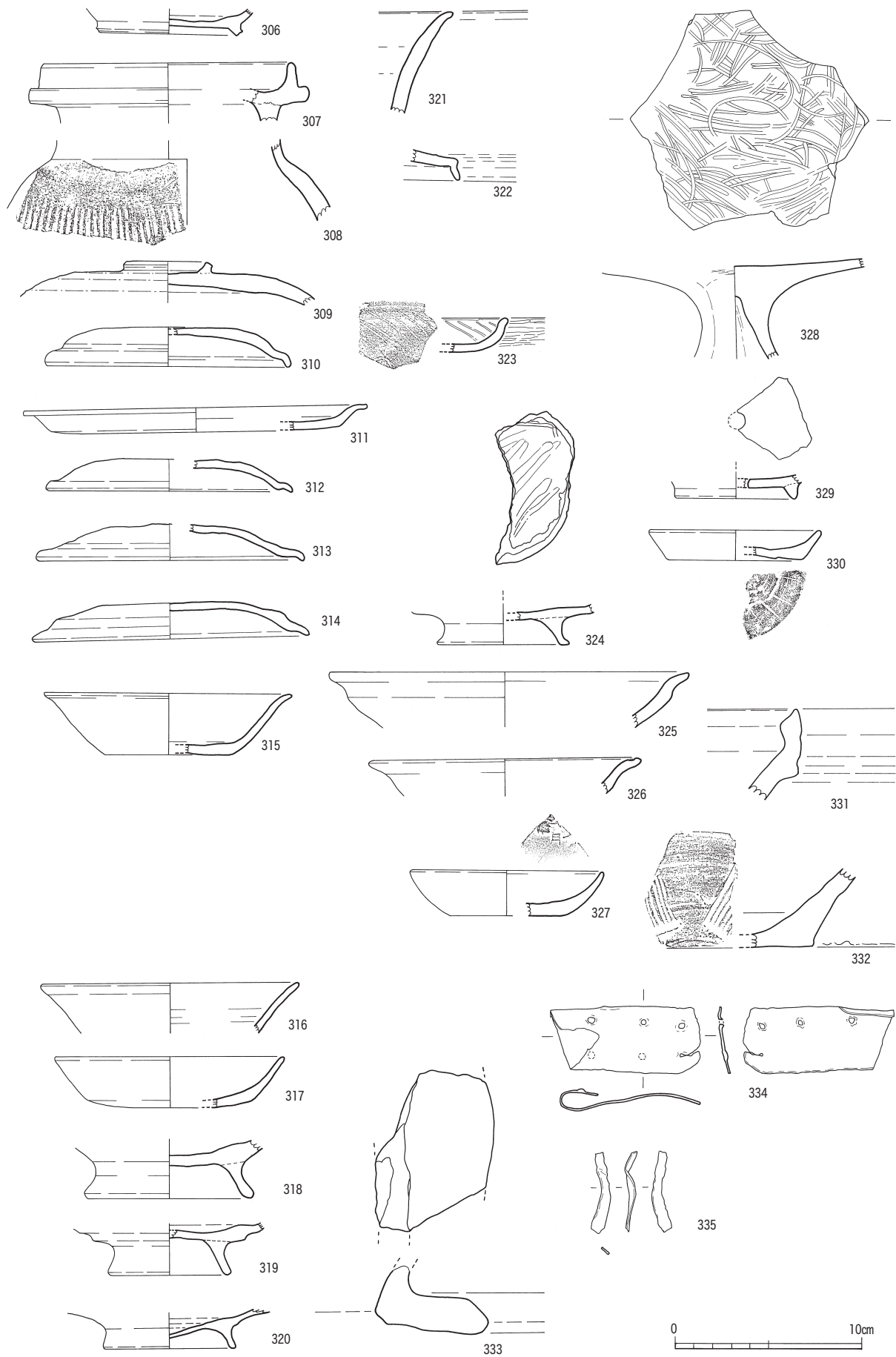


第 41 图 包含層・表面採集等遺物実測図

る。底面中央寄りの大部分は回転ヘラ切りし、周囲の体部寄りは指ナデ、内面中央の直径3cmほどは不定方向のナデ、その他は回転横ナデである。口径13.2cm、器高4.3cm、底径5.0cm。294（J9区61）は土師器環で、口縁端部は外湾する。底面中央寄りのだいたい半分は回転ヘラ切りし、周囲の体部寄りは指ナデ、内面中央の直径3cmほどは不定方向のナデ、その他は回転横ナデである。口径13.0cm、器高2.5cm、底径7.6cm。295（J9区2）は土師器環で、口縁端部は外湾する。底面はヘラ切りし体部との境近くを指ナデ、その他は回転横ナデしている。口径14.0cm、器高3.6cm、底径8.0cm。296（J9区48）は須恵器環身で、口径12.0cmである。299（J9区4）は土師器甕で、器面は横方向のナデで、内面は部分的に不定方向のナデ。口径37.2cm。暗褐色を呈する。297（J9区66）は軒丸瓦で凸面は菱形格子目、内面は布目痕。298（J9区100）は土師質の移動式カマド。鏝部分の幅は6.2cm。

第41図300（I8区表面採集）は凸面が格子目叩きで、凹面に布目痕があり、正面側は幅6mm前後ヘラ削りされている。301（G13区包含層）は凸面格子目叩き、凹面布目痕のある平瓦である。側面は一面が残り、型の分割突起痕と折り取り痕が見られる。厚さ2.8cm。302（B7区1）は凸面が縄目叩きで、凹面は布目痕があるがかすかである。凹面の端から側面はヘラ削りされている。厚さは3.2cm。303（H9区P1一括）は凸面に縄目痕があり、凹面は布目痕があるがナデ消されている。横断面は一直線の側面部はヘラによるナデ調整で、その付近の両面はヘラ削りで厚みを少なくしている。304（I13区6）は軒丸瓦である。格子目の叩き目が施されているが、一段低い筒部分は凸面はナデ調整、凹面に布目痕がある。横断面左には桶型の分割突起痕内側にあり、外側は折り取られたままである。305（I11区1）は内面にカキ目、外面に縄目叩きをもつ。

第42図306は須恵器碗で底径7.8cm。307はB4区表面採集。須恵器の円面硯で体部下面に線を入れ、そこに脚部を接合している。口縁部全周の1/4破片である。口径13.2cm。308（I13区南東部攪乱）は須恵器壺である。外面は縦方向平行文の叩きで、内面はナデ調整である。胎土に白い微細な砂粒が入る。現状で最大径は17.4cm。309（表面採集）は須恵器環の蓋である。外面は回転ヘラ削り、内面は横ナデで、内面の中央幅10cmほどは摩滅してつるつるになっている。硯に転用したものである。つまみの直径は4.8cm。310（E6区攪乱）は土師器環蓋で、外面中心寄りの半分は回転ヘラ削り、その他は横方向のナデ。口径13.2cm。311（攪乱溝）は時期皿で、器面はナデ調整。口径18.4cm、器高1.3cm、底径15.6cm。312（E6区攪乱層）は土師器環蓋である。上部外面はナデ仕上げ、その他は横方向にナデしている。最大径14.3cm、器高2.0cm。313は端部を短く折り返す環で、器面は横ナデ調整。口径13.0cm・器高1.7cm。318（I13区近世層）は土師器碗で、底面は回転ヘラ切り、その他は回転横ナデしている。底部最大径は9.0cm。319（表面採集）は土師器環で、器面はナデ調整。高台の最大径は6.6cm。第42図320（J9区東側攪乱）は土師器高台環の碗。器面はナデ調整。底径6.9cm。321（E6区攪乱）は須恵器の長頸壺。322（調査区北側斜面採集）は須恵器の蓋で、器面は横ナデしている。323（表面採集）は土師器環で、両面に線状のヘラミガキがある。324（築地中央攪乱層）は土師器皿で、内面はヘラミガキし、底径7.2cm。326（北側斜面採集）は肥前系陶器の溝縁皿である。口径14.6cm。327（表面採集）は陶製胎土で、見込みに押型文がある。「月」と蔦の葉様のものである。口径10.4cm、器高2.4cm、底径6.0cm。近世のもの。328（表採）は土師器高環で、環部内面はヘラ磨きにより文様的に施文され脚部は鋭利で直線的な削りが縦方向に行われ、鋭い稜線を残す。329（D7区攪乱）は土師器碗で、底面は回転ヘラ切り、見込み中央部に焼成後の穿孔がある。底径6.5cm。330（表面採集）は土師器皿で底面は回転ヘラ切り。口径9.2cm、器高1.6cm、底径7.2cm。第42図333（E6区攪乱層）は土師質の移動式かまどである。内面は布目、外面は格子目叩き。図の上側が瓦当面にあたる。暗灰色。335（位置不詳）は薄い板状の銅製品である。



第 42 图 搅乱层出土遗物实测图



## (5) 平成9年度の試掘調査

平成8年度の試掘調査では県立大分芸術文化短期大学に隣接する旧あけぼの学園跡地に対しては試掘調査が行われ3本の試掘溝が入れられた。その結果、遺跡の存在が明らかになり平成9年度に本調査を行うことになったのであるが、調査の進展に伴い古代豊後国にとって重要な遺跡であることが次第に浮かび上がってきた。そのため、それまで試掘調査が行われてなかった大学敷地についても遺跡の広がりを把握することが必要であるとして、芸術文化短期大学構内における遺物包含層・遺構の状態を調べるために1997年8月28日・29日、9月1日・2日に、試掘調査を行った。

8箇所の試掘溝を入れ、掘り下げたところ調査中の旧あけぼの学園に近い南部では造成工事による旧地形の改変が激しいことが分かり、構内西南部にある管理棟とダイヤモンド広場と呼ばれる場所の南東側にあるクラブハウスとを結ぶ線から南側では遺跡が消滅していると推定できた。一方、その線の北側では地表下50cm～60cm以下に中世・古代の遺物を含んだ遺物包含層が広がっていた。5トレンチ～7トレンチでその状況が認められた。遺物包含層の下には遺構検出面があると考えられる。

1トレンチでは地表下すぐに旧建造物のレンガ基礎が現れたため、それ以上は掘り下げなかった。

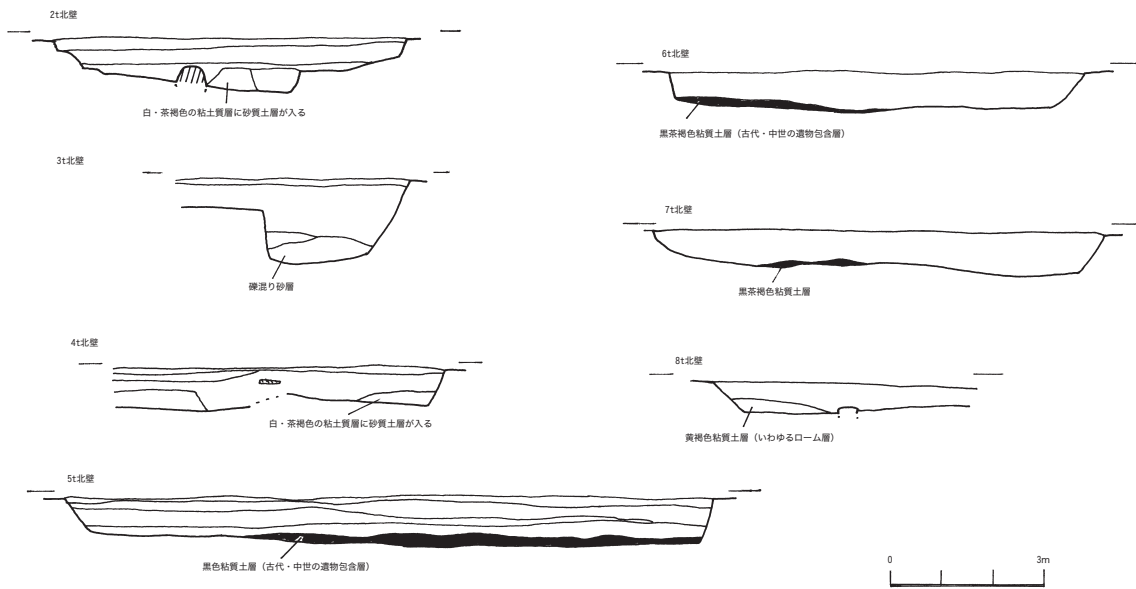
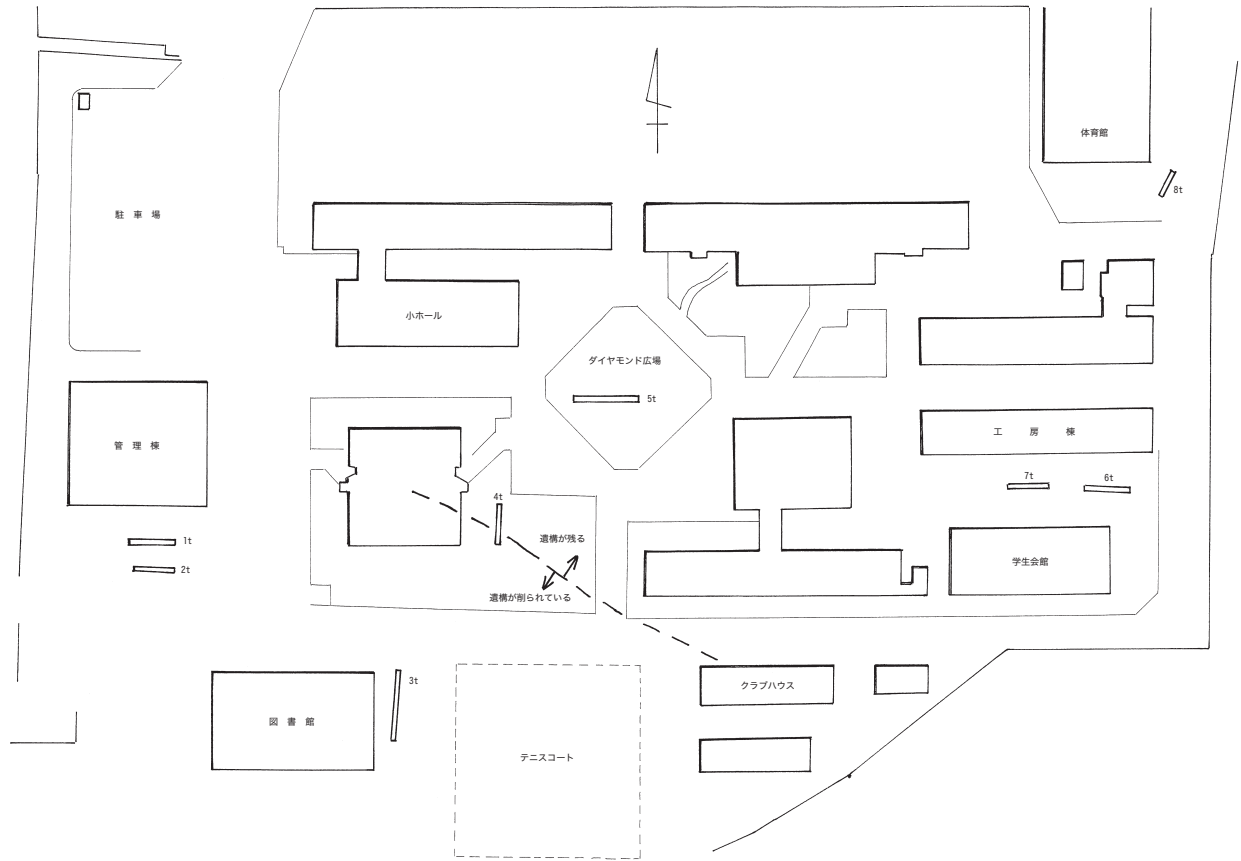
また、東端部を試掘した8トレンチでは厚い攪乱層でもある表土の下にはローム層が存在した。いつの時点か分からないが、縄文時代以降に相当する層は削り取られてしまったようである。北東側に大臣塚という前方後円墳があるので、その影響かもしれない。

この場所にはかつて大分高等商業学校、その後旧大分大学があり、学校建設の際に大規模な造成が行われたと思われる。第43図は大学の南部であり、この北側には運動場や校舎ビルが建てられている。おそらく、南側を削って出た土を北側に盛り上げており、そうであれば北側には良好な状態の遺跡がいわば盛土保存された状態で存在するはずである。

## 出土遺物（第44図336～342）

敷地南東部の工房棟と学生会館の間の空間に入れた6トレンチでは地表下50cm以下に中世・古代の遺物を包含する黒茶褐色の粘質土層が存在する。層は東側に向かって下がっており、自然地形を反映するようである。

336（試掘6t包含層）は托で、底面は回転ヘラ切り、その他は回転ナデ。口径12.2cm、器高3.1cm、底径8.4cm。337は土師器坏で、底部は回転ヘラ削り、口径12.4cm、器高4.4cm、底径8.0cmである。338は土師器碗で、底面は回転ヘラ切り、その他は回転横ナデ。底径8.8cm。339は土師器坏で、底面は回転ヘラ切り、見込みは指ナデ、その他は回転横ナデ。底面に板状圧痕が付く。口径11.6cm、器高1.9cm、底径7.3cm。340は土師器碗で、内面はヘラミガキ、外面は回転横ナデ。口径10.0cm、器高4.0cm、底径5.0cm。341は土師質の土錘。長さ4.8cm、幅1.8cm、孔径0.4cm、重さ15.4g。



第 43 図 芸術文化短期大学南部試掘調査の位置と試掘溝の層序

## (6) 小結

当初、竜王畑遺跡発掘調査は調査終了後大学の建物等を建設する予定であったが、調査の進展に伴い方位を共有する掘立柱建物群が検出され、遺構の性格が豊後国古代の公的施設である可能性が高いと考えられるようになった。文化庁の指導もあり必要最低限の掘下げに留め、現地に遺跡を残すことになった。

遺跡の時期と検出した遺構は古墳時代初頭の集落跡、7世紀末・8世紀・9世紀のそれぞれの掘立柱建物群と土坑

群、10世紀・12世紀から13世紀の道路側溝である。その他、旧石器時代や縄文時代晩期、弥生時代中期頃の遺物も少量出土した。また、近世の陶磁器類若干も出土している。遺構の性格は総括に譲り、ここではその他の点について述べる。

調査区内から散漫に蛇紋岩の円礫が出土し、地面に玉砂利として敷いていたと考えられる。古代あるいは中世のものと思われる。竜王畑遺跡調査後、蛇紋岩の玉砂利は中世大友城下町跡・白杵市野村台遺跡等からも出土している。石材の産地は佐賀関半島の先端、黒浜といわれる蛇岩紋露頭が海に現れる場所と考えられる。

赤い色が付着した瓦が出土しているのは、建物には赤い色が塗られていた証拠であろう。この点からも官衙建物があったと思われる。調査区中央を東西に走る二つの溝状遺構は築地遺構と考えた。中央部分で途切れているのは出入り口と思われる。これと同じ方位をもつ遺構は調査区南東部に分布する大小の掘立柱建物跡群である。調査当時、南北に2棟並ぶような状態から国司館の可能性があると山中敏史氏のご教示があった。

鎌倉時代に豊後に派遣された大友氏が政治を行った場所は不明であるが、古代を引き継ぐなら上野台地が有力な場であったと考えられるが、中世の遺構は貧相な道路跡だけであり、遺物は少量であった。

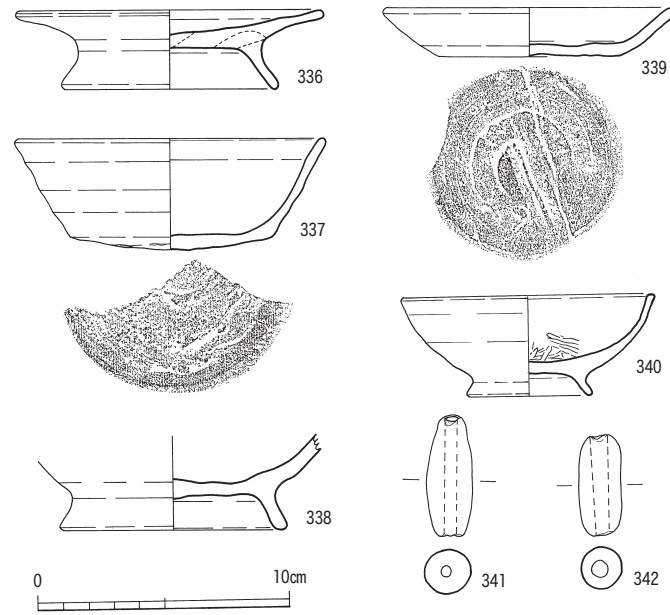
## 第2節 平成26年度の調査

### (1) 調査の概要

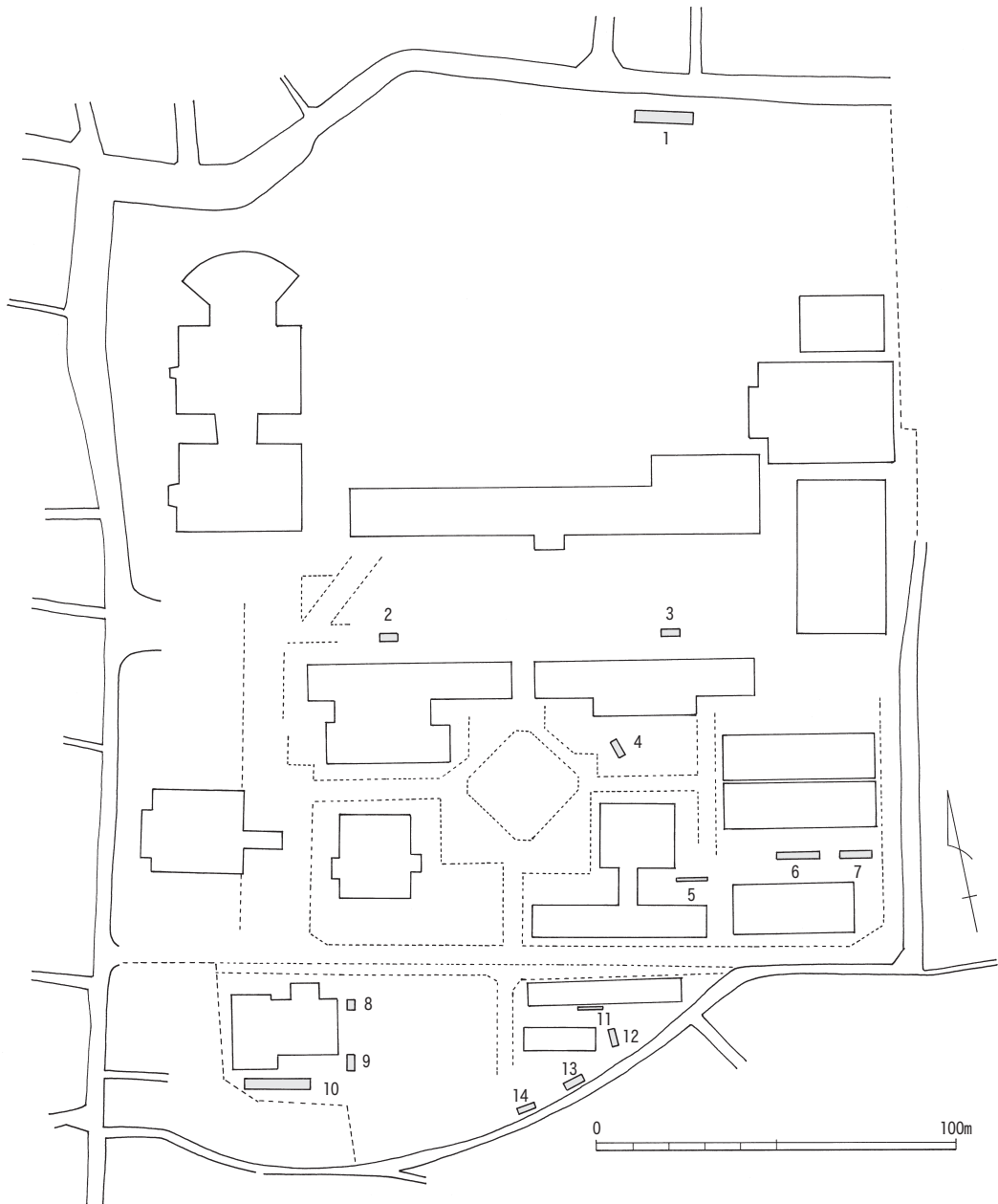
上野遺跡群の範囲に所在する県立芸術文化短期大学施設整備工事に先立ち、遺構の存否確認を目的として調査を実施した。調査は大学敷地内の事業予定地7箇所にトレンチ14箇所を設定し、遺構及び遺物の有無を確認する方法をとった。対象地9,850㎡に対して、幅3m、長さ5m～20m程度のトレンチ14箇所を設定し、地山まで0.7m～2.1mまで層毎に掘り下げた。

調査の結果、対象地全体に造成による旧地形の掘削が著しく、明確な遺構は残っていなかった。特に調査区南部のトレンチ8～14では、地山まで工事による掘削が及んでおり遺構が形成された生活面は消失したと考えられる。調査区北側では北端の丘陵裾部付近のトレンチ1で地表下約5mまで掘削したが地山に達せず、盛土による造成範囲であった。調査区中央部ではトレンチ2・4で遺物包含層を確認した。出土遺物はこのトレンチ以外にトレンチ7で確認できた。

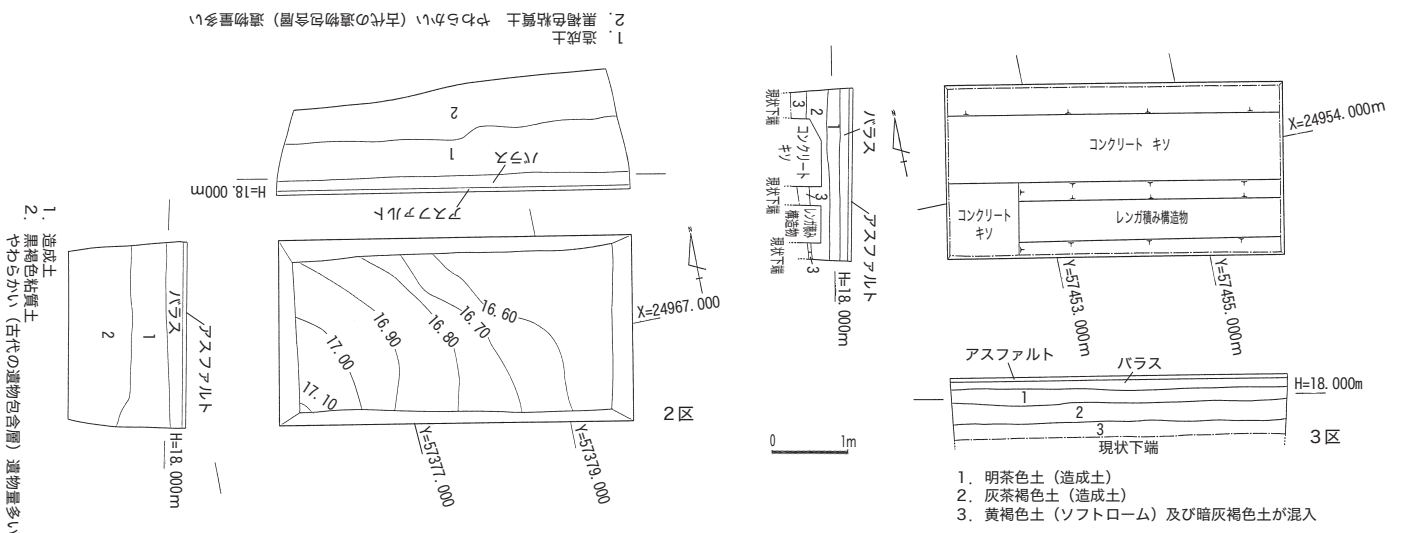
遺物包含層を確認したことから、本来、県立芸術文化短期大学・芸術緑丘高校敷地内に古代の遺構が存在したものと想定される。



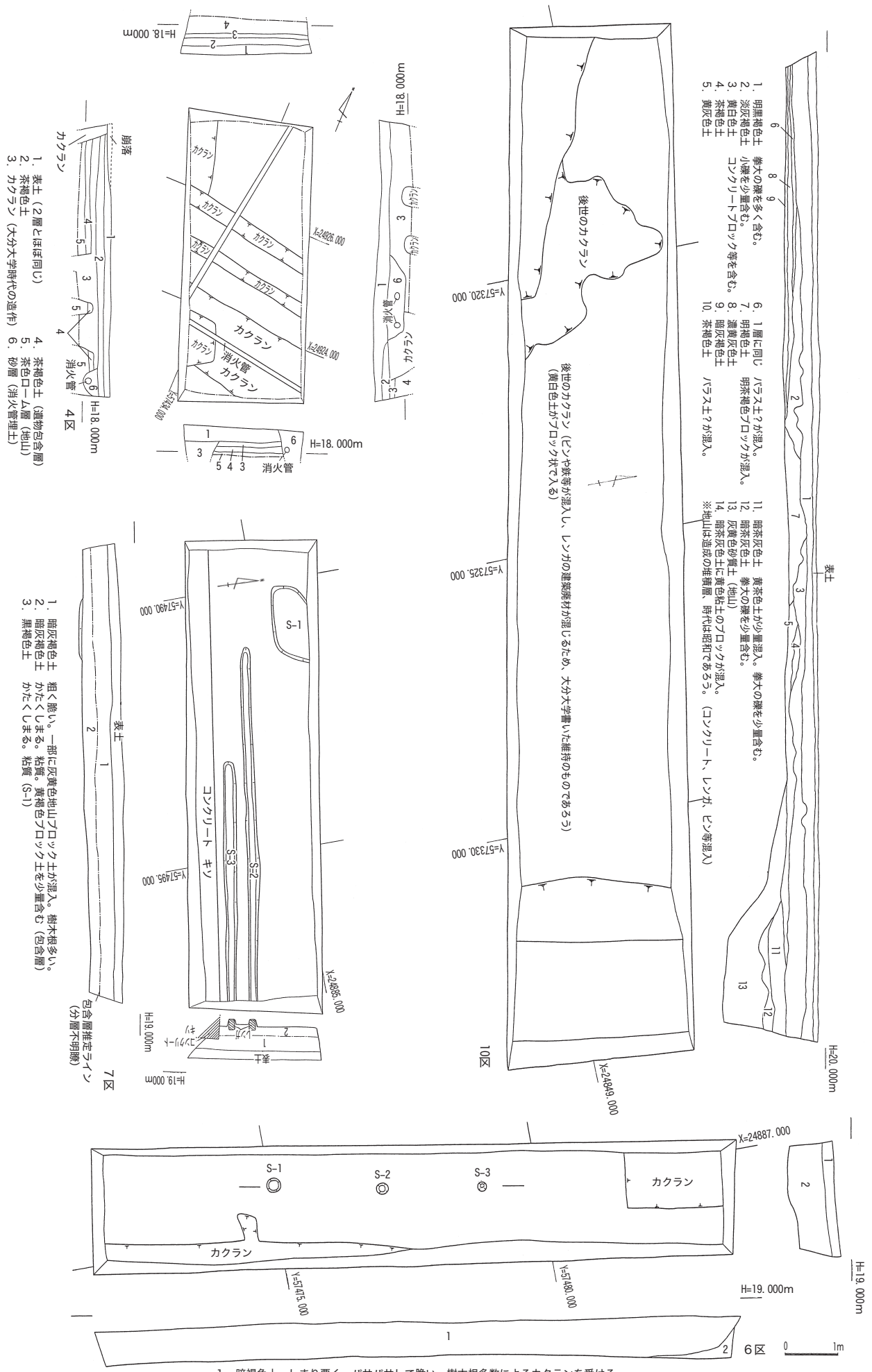
第44図 芸術文化短期大学試掘6トレンチ出土遺物実測図



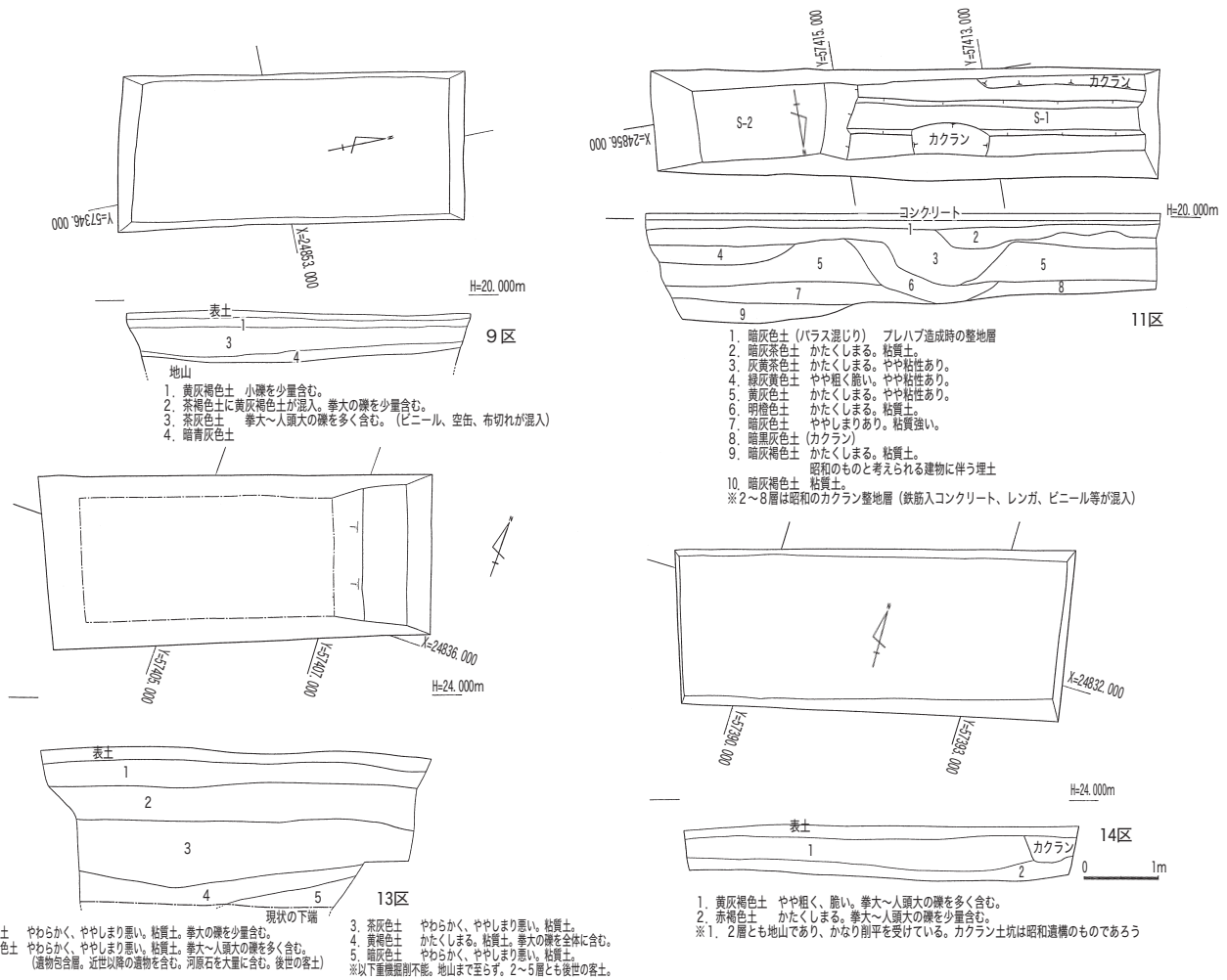
第45図 上野遺跡群調査区配置図 (1 / 1,000)



第46図 上野遺跡群2・3区平面・断面図 (1 / 100)



第47図 上野遺跡群4・6・7・10区平面・断面図(1/100)



第 48 図 上野遺跡群 9・11・13・14 区平面・断面図 (1 / 100)

上野遺跡群発掘調査結果一覧

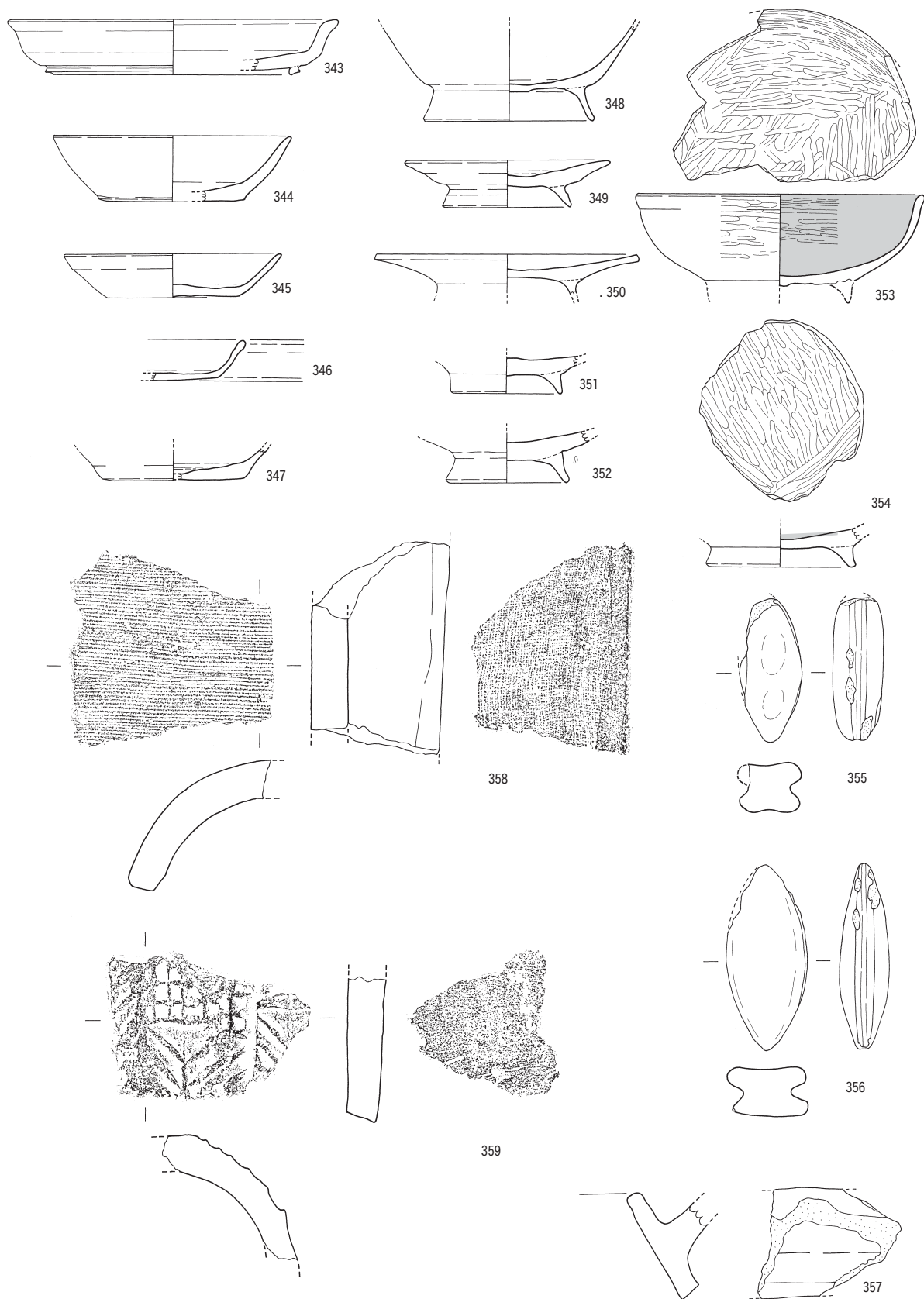
トレンチ 番号	縦 (m)	横 (m)	面積 (㎡)	結 果
①	15.2	3.0	45.6	重機での掘削が可能な地表下 4.8 m (標高 11.1 m) まで掘削を行ったが、すべて埋め土であり、地山まで達せなかった。
②	4.6	2.4	11.04	大分大学造成・解体時の攪乱がみられたが、地表下 0.6 m ~ 1.6 m (標高 16.6 m ~ 17.5 m) の深さにおいて、古代を中心とした遺物包含層が確認できた。地山は谷状地形を呈し、その谷状地形に遺物包含層が堆積した状態であった。なお、遺構は確認できなかった。
③	4.6	2.4	11.04	解体された大分大学の建物の基礎が確認され、重機による除去を試みたが、果たせなかった。可能な限り基礎部分以外の掘削を試みたが、地山まで達せなかった。なお、遺構は確認できなかった。
④	5.4	2.5	13.5	大分大学造成・解体時および現代の消化管敷設の攪乱がみられたが、地表下 0.3 m ~ 0.4 m (標高 18.0 m ~ 18.2 m) の深さにおいて、古代を中心とした遺物包含層が確認できた。地山は平坦な茶色ロームであり、その上に遺物包含層が堆積した状態であった。なお、遺物は確認できなかった。
⑤	8.7	1.2	10.44	大分大学造成・解体時の攪乱がみられたが、地表下 1.4 m (標高 17.3 m) の深さにおいて、低湿地状の青褐色粘土層が確認できたが、湧水が激しく、それ以下の掘削ができなかった。調査の結果、池状の低湿地を呈していたことが想定でき、遺構・遺物は確認できなかった。
⑥	12.1	2.2	26.62	大分大学造成・解体時の攪乱がみられたが、地表下 0.6 m ~ 0.8 m (標高 17.8 m ~ 18.0 m) の深さにおいて、地山が確認できた。調査の結果、黄色ロームまで地形が大きく削平され、地山上で柱穴が 3 基確認できたが、いずれも 5 cm 程度にすぎなかった。
⑦	9.0	2.5	22.5	大分大学造成・解体時の攪乱がみられたが、地表下 0.6 m ~ 0.8 m (標高 18.0 m) の深さにおいて、地山が確認できた。調査の結果、黄色ロームまで地形が大きく削平され、地山上で植栽痕の可能性が高い深さ 5 cm 程度の土坑が確認された。なお、この土坑埋土中から土師質土器が出土している。
⑧	19.0	2.7	51.3	大分大学造成・解体時の攪乱がみられたが、地表下 0.6 m ~ 0.8 m (標高 19.2 m) の深さにおいて、地山が確認できた。調査の結果、地形が大きく削平されており、遺構・遺物は確認できなかった。
⑨	3.2	2.0	6.4	大分大学造成・解体時の攪乱がみられた。2 m 以上に及び重機により可能な限り掘削を試みたが、谷状地形にあるせいか、湧水が著しく、地山まで達せなかった。なお、遺構・遺物は確認できなかった。
⑩	4.6	2.0	9.2	大分大学造成・解体時の攪乱がみられたが、地表下 1.0 m ~ 1.5 m (標高 18.6 m ~ 19.0 m) の深さにおいて、地山が確認できた。調査の結果、地形が大きく削平されていることが確認された。なお、遺構・遺物は確認できなかった。
⑪	7.1	1.4	9.94	大分大学造成・解体時の攪乱がみられたが、地表下 0.6 m ~ 0.8 m (標高 19.3 m) の深さにおいて、地山が確認できた。調査の結果、地形が大きく削平されていることが確認された。なお、遺構・遺物は確認できなかった。
⑫	4.9	2.1	10.29	すべて埋め土であり、2 m 以上に及び重機により掘削を試みたが地山まで達せなかった。なお、遺構は確認できなかった。
⑬	4.9	2.4	11.76	すべて埋め土であり、2 m 以上に及び重機により掘削を試みたが地山まで達せなかった。一部、埋め土中に遺物が出土している。なお、遺構は確認できなかった。
⑭	5.5	2.4	13.2	地表下 0.6 m ~ 0.8 m (標高 23.2 m) において地山が確認できたが、かなり深く削平されているものと考えられる。遺構は確認できなかった。

## (2) 出土遺物 (第 49・50 図)

遺物はトレンチ 2 の包含層からまとまって出土した。須恵器・土師器・土錘、瓦類などがコンテナ 4 箱の量であった。このうち実測が可能な 20 点を図示した。

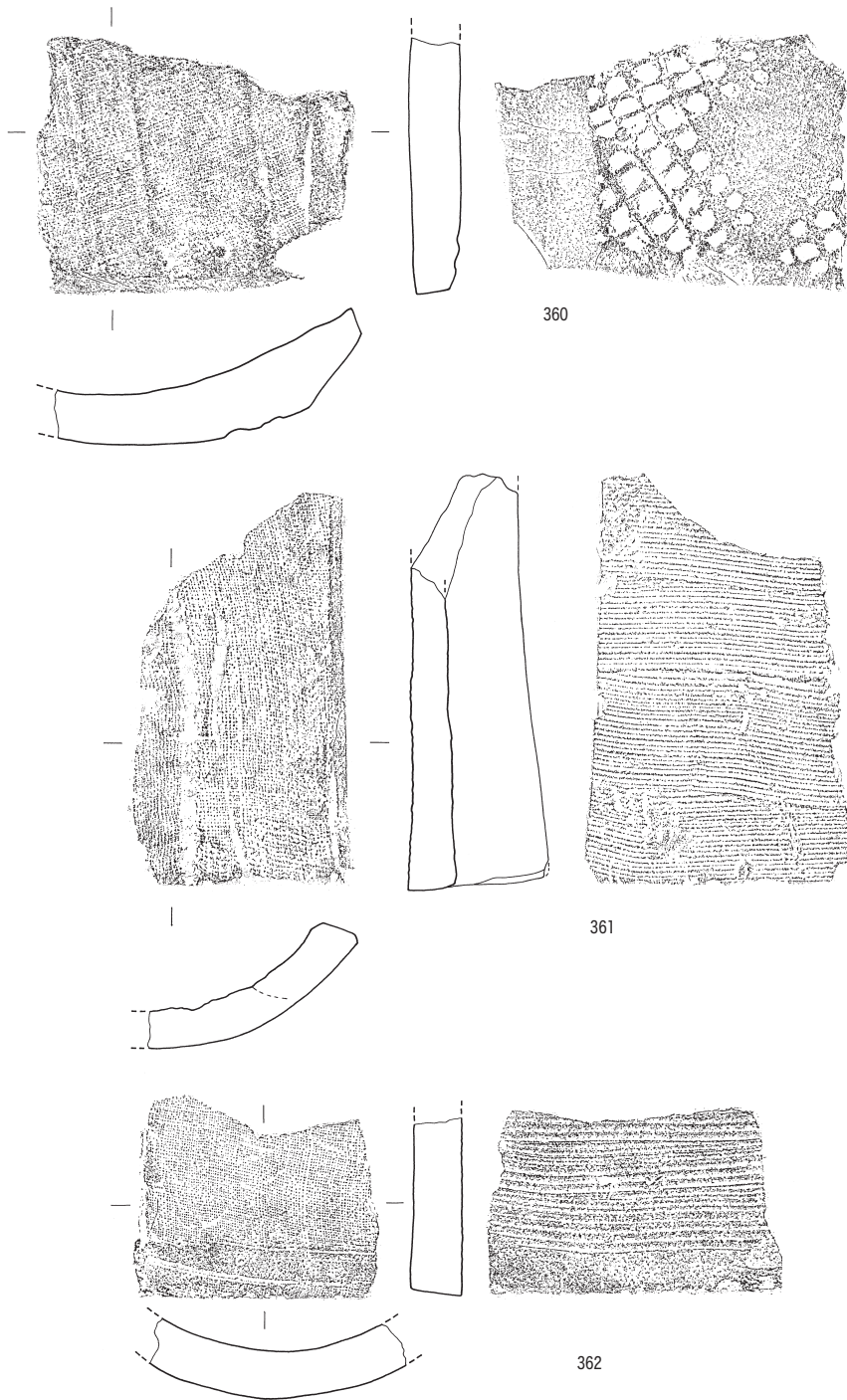
343 は須恵器高台付皿である。口縁端部は外反し、体部下端が丸みをもつ。高台はやや端寄りにつき、内側が接地する。大きさは口径 16.6 cm、器高 2.8 cm、底径 12.2 cm である。344～351 は土師器である。344 は坏である。大きさは口径 12.1 cm、器高 3.4 cm、底径 6.8 cm で、弱く内湾気味に立ち上がる。345 は浅い器形の坏である。大きさは 11 cm、器高 2.2 cm、底径 6.7 cm で体部はやや直線的に立ち上がる。346 は口縁部～底部の破片である。口縁端部がやや丸く肥厚する。347 は坏の平坦な底部破片である。348 は碗の底部付近の破片で長い高台をもつ。349～352 は托と思われる。349 は口径 10.3 cm、器高 2.4 cm、底径 6.5 cm である。350 は高台の下半部を欠くがほぼ器形を把握することができる。口径 13.3 cm とやや大型である。351・352 は底部の破片で、先端が細くなる高台をもつ。353・354 は内黒土器である。353 は体部が球形化し口縁部は丸く肥厚する。内外面にヘラミガキを施す。355・356 は先端が細まる楕円形をなし、縦方向の側面に溝を巡らす有溝土錘である。大きさは 355 が長さ 7.5 cm 程度、最大幅 3.2 cm、厚さ 2.6 cm、356 は長さ 9.6 cm、最大幅 4.2 cm、厚さ 2.5 cm である。357 は移動式カマドで、焚口側の廂付近の破片と考えられる。瓦は 358・359 は丸瓦とともに凹面に布目が残る。凸面は 358 がカキ目状の調整痕、359 は綾杉、格子目の叩き痕が残る。360～361 は平瓦の破片である。360 は凹面に布目と模骨痕が残り凸面に格子目の叩き痕がみられ、361 は凹面に布目、凸面にカキ目状の調整痕が残る。361 には分割界線がみられる。

遺物の時期については須恵器の 343 が 8 世紀中頃、土師器は 345 の坏や 349・350 の托は 10 世紀前半、内黒土器の 353 は 10 世紀中頃、瓦類は 8 世紀～9 世紀と思われる。



第 49 图 出土遺物実測図 (1)





第 50 图 出土遺物実測図 (2)

## 第4章 遺構と遺物の検討

### 第1節 遺構

#### (1) 建物の変遷

竜王畑遺跡は9,000 m<sup>2</sup>の範囲に掘立柱建物27棟や溝状遺構（築地塀を含む）などで構成されている。掘立柱建物群の時期については、柱穴などの埋土や包含層から出土した遺物、主軸方位を基準に古代を4期に区分した。なお、今回報告する調査範囲において礎石建物は確認されていない。

#### I 期

主要建物は調査区南西部に配置されている。時期はSB1の柱穴掘形埋土から出土した須恵器坏蓋が示す7世紀後半代を上限とし、それ以降の時期と考えた。SB1～4、23の5棟の掘立柱建物で構成された建物群の段階である。SB1・2・23の3棟は50 m<sup>2</sup>を越す規模で規則性がみられ、調査区の南西部に位置する。おそらく調査区外の西へ展開したと思われる。配置はSB2（東西棟）が北、SB1（南北棟）が南に配されSB2の東柱列の延長上にある。SB23（東西棟）はSB1の南西至近地に位置する。特に、SB1は5間×3間、面積72.6 m<sup>2</sup>と当遺跡では最大規模であり、この時期の中心建物のひとつである。SB3はSB1と平行し東10 mに位置する。SB4はこの建物群の北約30 mに位置するが、SB1・2の東柱列の延長上に西柱列が並ぶ。建物配置はSB2の東妻側とSB1の東平側が柱筋を揃えており、山中敏史の分類（註1）のL字型となる。建物の主軸方位は北8度東前後を指向する。

#### II 期

建物は調査区中央の南北に配置されている。遺構出土の遺物がなく建物の時期を特定することは困難であるが、整地層出土遺物や前代の建物主軸との差異から8世紀代と想定した。SB5～8の4棟の掘立柱建物で構成された建物群である。SB8はSB6の主軸延長上北約15 mに位置する。SB5はSB6の南西約20 mと離れている。主軸方位は北13度東を中心に指向する。建物配置はSB6・7が北妻側を揃えて並列に配置されており山中分類の並列型a類に該当する。

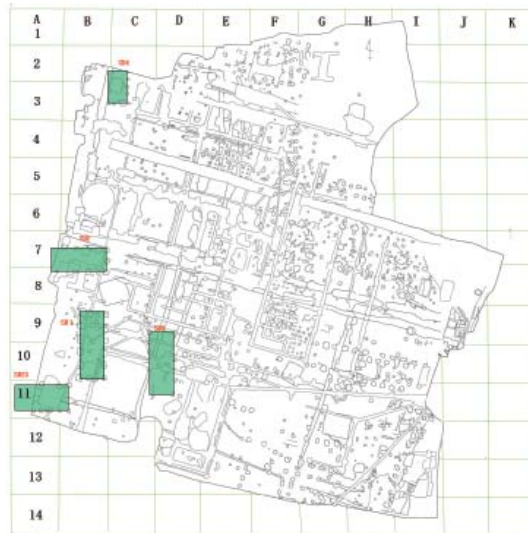
#### III 期

建物群は、基数や規模が最も充実する。調査区南東と中央北部の2群を確認した。時期はSD1・2、SA1の埋土出土遺物などから9世紀後半代～10世紀前半を中心とした時期と考えた。SB9～SB22、SB24～SB27の掘立柱建物18棟とSD1・2の溝2条（SA1築地塀）で構成された建物群である。SA1はSD1・2で挟まれた築地塀と想定したもので、古代の外郭施設としては唯一確認された遺構である。調査区の中央部を東西に延び、南北を区画する形態で中央部に空隙がある。門の構造を示す柱穴などは確認されていないが、出入口の施設と思われる。築地塀を境とする南北2域で掘立柱建物の規模や配置に違いがある。南域は規格性の高い建物配置が顕著である。北辺はSA1と平行して東西棟のSB13・14・15が東西に並ぶ。東辺はSB12が位置し、中央部に南面に廂をもつSB9とSB10が南北に配置されている。西辺部の建物は不明であるが、西にSB9・10の正方形プランのSB16・17が他の建物とはやや離れて位置する。建物配置はSB13・14・15が桁行両平側を揃えて直列に配置されおり、山中分類の直列型a類に該当する。SB9と10を仮に同時期に設置されたものとすれば、並列型a類にあたるであろう。北辺のSB11とSB14・15、南の建物SB9と10はそれぞれ前後関係を把握できていないが、建替えの可能性がある。北域ではSB17・18・20の3棟が調査区北辺付近に集中して配置され19・20は重複する。南側にSB21・22・25・26・27の5棟が東西方向に配置され21・22は重複する。SB24はこの一群よりやや南東に、SB26は東に位置する。この時期に少なくとも2回の建替えが考えられる。建物の主軸方位ははやばらつきがあるものの、前代よりもさらに東へ振る傾向がある。竜王畑遺跡の東約130 m付近を南北方向に伸びる推定古代道が所在しており、この方位に規制されて造営方位が変更された可能性が考えられる（註1）。

#### IV期

この時期の建物を特定できないが、包含層から10世紀代の土師器が出土しており、当該期の建物の存在或いはⅢ期建物群の継続が考えられる。

#### I 期建物群



#### II 期建物群



#### Ⅲ期建物群



第 51 図 建物変遷図

## (2) 掘立柱建物の検討

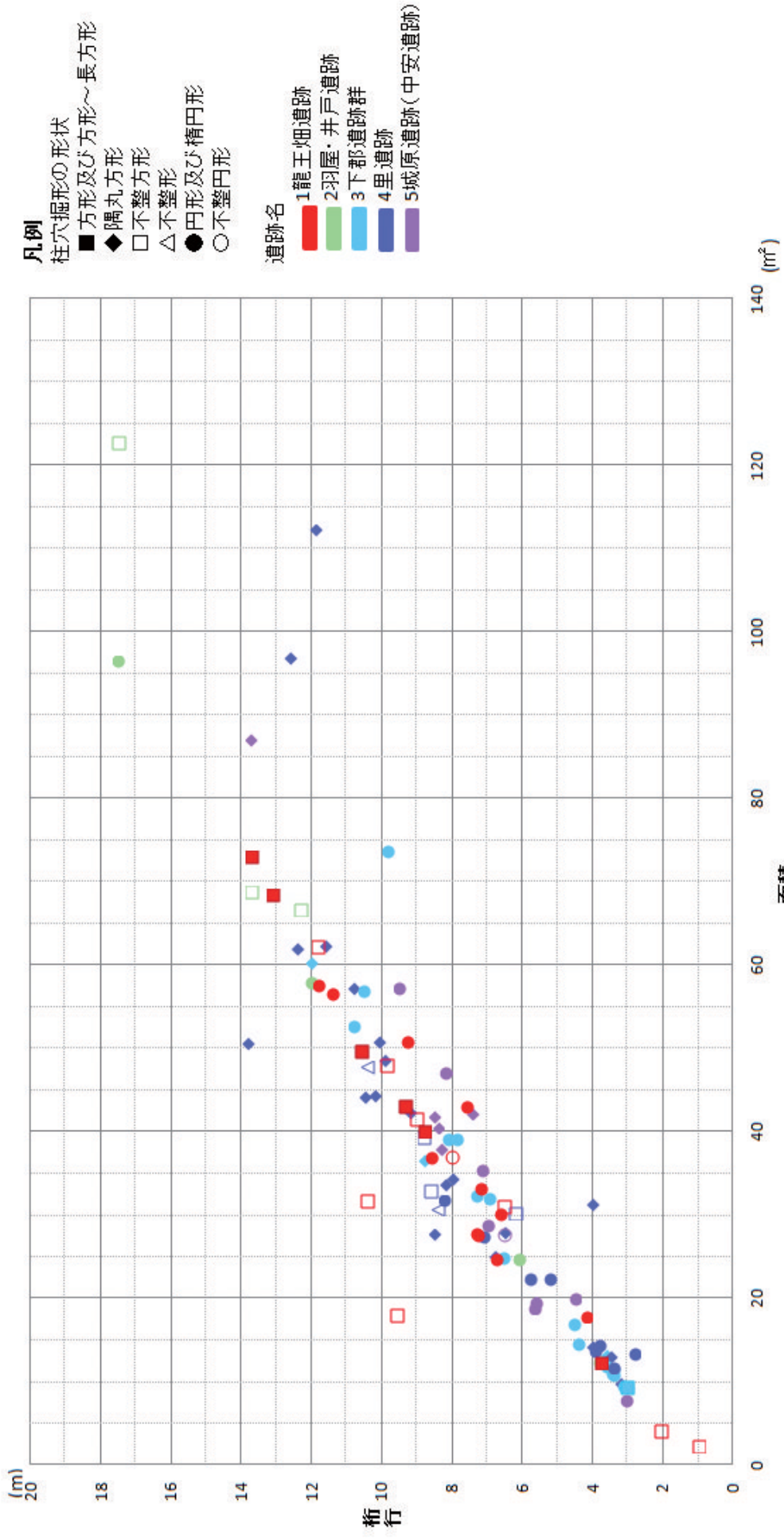
竜王畑遺跡の性格や特徴については、発掘調査が保存目的の調査であったため遺構の存否確認、時期決定資料を得るための包含層（整地層）の部分的な発掘調査となった。調査の結果、掘立柱建物や溝などの遺構平面形は確認できた。遺物については時期を想定する一定量の土器類を確認した。越州窯磁器、陶硯、緑釉陶器、瓦類、蛇紋岩玉砂利など特殊な遺物もあるが、遺跡の性格を決定し得るものではなく、遺物の組成は十分には把握できていない。したがって、遺跡の特徴を掘立柱建物の規模や構造を中心に検討した。

建物の規模、形態を①柱掘形、②平面規模、③梁行の柱間、④柱間寸法などを観点として検討した。観察のめやすとして、柱掘形が平面方形を基本として1辺1m以上、平面規模は桁行五間・七間、梁行は二間、桁行全長10m以上、柱間七尺以上の建物の抽出を試みた（註2）。竜王畑遺跡Ⅰ期では、SB1・2・3・23がほぼ該当する。SB1は柱掘形が方形で平面規模は5間×3間、桁行13.7mと10mを越し、柱間は梁行2.75mと七尺をはるかに超す。SB2・3は梁行2間で桁行は5間か7間が考えられる。Ⅱ期ではSB5・6・7が桁行4間以外の要件は満たす。Ⅲ期ではSB9・10・11・15がほぼ該当する。4棟ともに5間×2間の平面規模をもつ点が共通する。各時期の中心建物がこの大規模な基準を満たす傾向がある。建物構造では廂建物に注目したい。竜王畑遺跡では唯一の例であるⅢ期SB9は片方の平側全体に柱列が付く片廂であり、外周柱穴の径は身舎柱列の2/3に程と小規模であり、山中分類E類に近い。柱掘りかた（柱）・根入れの規模は建物本体よりも一回り小規模のものでⅢ類に該当する（註3）。

竜王畑遺跡周辺の官衙関係遺跡をみると、羽屋・井戸遺跡は7世紀後半～8世紀初頭の分郡（評）衙と推定されている。7棟の掘立柱建物で構成されているが上記①～③を満たす大規模建物は桁行全長17.5mのSB001をはじめSB003・004を確認できるもののいずれも柱掘形は平面円形で、平面規模は梁行3間が多く、2間は総柱建物以外にはない。下郡遺跡群は8世紀前半代に羽屋・井戸遺跡から移動したとされる分郡衙推定地である。官衙的建物とされる掘立柱建物約30棟についてみると、梁行2間、桁行5間・7間の例は090SB294などと少ない。桁行全長が10mを越す例は090SB294・004SB001などであり、柱掘形の平面形も多くが円形という傾向がみられた。大分市東部の海部郡衙推定地とされる城原・里遺跡では、先行する里遺跡（7世紀後半～8世紀初頭）の掘立柱建物に柱穴規模が1m未満が多いもののSB005・003・009・017・012・013・022などが桁行全長10mを越す。平面規模はSB012が7間×3間であるが、他は5間×2間となっている。後続する8世紀前半の城原遺跡（中安遺跡）は四脚門、廂付建物で構成された官衙遺跡である。掘立柱建物は柱掘形に平面円形が多く、平面規模は桁行5間×梁行2間はみられない。桁行全長10m超は唯一SB540が13.7mと大規模である。ただ、平面規模は桁行5間×梁行3間である。建物構造では廂付建物が里遺跡に3例確認されている。SB023・024は両平側全体に柱列が巡る山中分類C類―二面型、根入れの規模は建物本体柱穴の1/2程度以下のⅢ類に該当する。SB012は部分的に廂を有する（山中分類F類）と考えられる（註3）。なお、県内で廂をもつ例としては、国東半島の久末京徳遺跡北群SB1（9世紀前半～中頃）で東と南に廂が確認されている（註4）。

第52図は桁行と平面積の相関関係を示したものである。桁行が長いものが平面積も大となる傾向が窺える。方形プランの柱掘形をもつ建物で平面積40㎡以上の事例は竜王畑遺跡に顕著である。

このように周辺の官衙関係遺跡の掘立柱建物と比較して大規模であり、建物規模、形態の規格性が高く、廂付建物をもつなど格式の高い位置づけが考えられる。



第 52 図 桁行長と面積の相関関係図

# 竜王畑遺跡及び周辺官衙関係遺跡の掘立柱建物の一覽

番号	遺跡名	遺構名	桁行	梁行	面積	間×間	柱間平均長	桁行	梁行	柱穴掘形 (単位: m)		方位 ※1 (方位: 鹿嶋北)	時期 (報告書) 区分	時期 (報告書) 世紀	廂	遺構の特徴	残存状態	遺物の特徴	遺跡の性格
										形状	径								
1		SB1	13.7	5.3	72.61	5 × 3	1.7	2.75	1.7	1.5	N-9-E	I	7 後半	×	最大面積				
2		SB2	(10.6)	4.65	(49.29)	(5 + α) × 2	2.3	2.4	2.3	1.3	N-7-E	I	7 後半	×	東西棟、西側柱列欠失		伴膳形態主体	豊後国衙以前遺構群	
3		SB3	13.1	5.2	68.12	6 × 2	2.7	2.4	2.7	1.2	N-7-E	I	7 後半	×					
4		SB4	6.75	3.6	24.30	4 × (1 + α)	1.8	1.7	1.8	0.8	N-11-E	I	7 後半	×	東西棟				
5		SB23	(7.6)	5.6	(42.56)	(4 + α) × 2	-	1.9	1.9	1.0	N-7-E	I	7 後半	×	西半部欠失				
6		SB5	11.8	4.85	57.23	4 × 2	2.4	3	2.4	1.2	N-14-E	II	8	×	南側柱列欠失		円面視		
7		SB6	9.32	4.58	42.69	4 × 2	2.3	2.3	2.3	1.5	N-12-E	II	8	×			伴膳形態主体		
8		SB7	8.78	4.52	39.69	4 × 2	2.3	2.2	2.3	1.1	N-13-E	II	8	×					
9		SB8	7.3	3.74	27.30	4 × 2	1.85	1.8	1.85	0.8	N-12-E	II	8	×					
10		SB9	11.84	5.22	61.80	5 × 2	2.6	2.9	2.6	1.3	N-20-E	III	9 ~ 10 後半	×	南側柱列欠失		伴膳形態主体		
11	1	SB10	10.45	3	(31.35)	5 × 2 ?	2.9	2.2	2.9	1.0	N-19-E	III	9 ~ 10 後半	×	南館 ?		越州窯磁器		
12	1	SB11	9.87	4.83	47.67	5 × 2	2.4	2	2.4	1.1	N-17-E	III	9 ~ 10 後半	×	南館 ?		黑色土器		
13		SB12	8.6	4.24	36.46	5 × 2	2.1	1.7	2.1	1.0	N-24-E	III	9 ~ 10 後半	×	南北棟				
14		SB13	7.2	4.55	32.76	5 ? × 2	1.3	-	1.3	0.9	N-17-E	III	9 ~ 10 後半	×	東西棟、柱穴一部欠失				
15		SB14	8	4.58	36.64	4 × 2	2.3	2.2	2.3	1.0	N-19-E	III	9 ~ 10 後半	×	東西棟、柱穴一部欠失				
16		SB15	9.05	4.55	41.18	4 × 2	2.3	2.3	2.3	0.8	N-21-E	III	9 ~ 10 後半	×	東西棟				
17		SB16	4.18	4.18	17.47	2 × 2	2.2	2.1	2.2	0.7	N-25-E	III	9 ~ 10 後半	×	平面正方形、柱穴一部欠失				
18		SB17	-	4.18	-	-	-	-	-	0.5	N-24-E	III	9 ~ 10 後半	×	平面正方形、柱穴一部欠失				
19		SB18	3.77	3.19	12.03	2 × 2	1.9	1.9	1.9	0.5	N-22-E	III	9 ~ 10 後半	×	平面正方形、柱穴一部欠失				
20		SB19	9.3 ?	5.42	50.41 ?	(5 + α) × 3	1.7	1.8	1.7	0.7	N-18-E	III	9 ~ 10 後半	×	南北棟、北側柱列欠失				
21		SB20	6.65	4.48	29.79	3 × 2	2.2	2.2	2.2	0.9	N-17-E	III	9 ~ 10 後半	×	南北棟				
22		SB21	11.4	4.93	56.20	5 × 2	2.4	2.4	2.4	0.7	N-16-E	III	9 ~ 10 後半	×	南北棟				
23		SB22	6.57	4.66	30.62	3 × 2	2.3	2.1	2.3	0.8	N-20-E	III	9 ~ 10 後半	×	東西棟、柱穴一部欠失				
24		SB24	7.28	3.73	27.15	4 × 2	1.9	1.9	1.9	0.4	N-15-E	III	9 ~ 10 後半	×	東西棟				
25		SB25	2.09	1.73	3.62	2 × 2	0.85	1.05	0.85	0.5	N-24-E	III	9 ~ 10 後半	×	東西棟				
26		SB26	9.6	1.83	17.57	6 ? × 1	1.8	1.8	1.8	0.7	N-18-E	III	9 ~ 10 後半	×	東西棟、柱穴不明				
27		SB27	(1.02)	1.85	(1.89)	2 × 2	0.9	1	0.9	0.4	N-24-E	III	9 ~ 10 後半	×	西側柱列欠失				
28	2	SB001	17.5	5.5	96.25	9 × 3	2	2	2	1.4	N-6-E	I	7 後半 ~ 8 初	×	最大長			大分郡 (評) 衙の可 能性	
29	2	SB002	12	4.8	57.60	6 × 3	1.5	2	1.5	1.0	N-8-E	I	7 後半 ~ 8 初	×	東西棟		柱穴の須恵灰B蓋		
30	2	SB006	6.1	4	24.40	3 × 1	2	2	2	0.7	N-7-E	I	7 後半 ~ 8 初	×	中央の柱間が広い				
31	2	SB007	3.8	3.2	12.16	2 × 2	1.9	1.5	1.9	0.5	N-8-E	I	7 後半 ~ 8 初	×	総柱建物				
32	2	SB003	13.7	5	68.50	6 × 3	1.5	2.2	1.5	0.8	N-12-E	II	7 後半 ~ 8 初	×	東西棟			大分の君等の居館を 想定 ?	
33	2	SB004	17.5	7	122.50	8 × 3 + 4	2	2	2	1.6	N-13-E	II	7 後半 ~ 8 初	×	最大面積				
34	2	SB005	12.3	5.4	66.42	6 × 3	1.8	2	1.8	1.4	N-14-E	II	7 後半 ~ 8 初	×	東西棟				
35	2	094SB031	4.4 α	3.6	-	(2 + α) × (2 + α)	2.2	1.9	2.2	0.8	N-5-E	-	8 C	×	南北棟 ?、北西隅柱列残存			大分郡 (評) 衙の可 能性	
36	2	094SB062	4.1 α	5.2	-	? × (2 + α)	2.2	1.8	2.2	0.8	N-5-W	-	7 末 ~ 8 初	×	東西棟、南北柱列一部残存		柱穴埋土土師蓋跡さ 縄跡のみ、浮石跡不明		
37	2	090SB008	6.8 α	7.7	-	(3 + α) × 4	1.8	2.1	1.8	0.8	N-2-E	-	8 中 ~ 8 後半	×	南北棟				
38	2	090SB011	4.68	3.44	-	15.4	2.2	1.8	2.2	0.4	N	-	8 中 ~ 8 後半	×	南北棟				
39	2	090SB111	3.44	3.12	10.73	2 × 2	1.6	1.8	1.6	0.5	N	-	8 中 ~ 8 後半 ?	×	南北棟				
40	2	115SB1130	7.86	4.94	38.82	4 × 2	2.5	2	2.5	0.8	N-11-E	-	8 中 ~ 8 後半	×	南北棟				
41	2	115SB1210	8.1	4.8	38.88	4 × 2	2.2	2	2.2	0.9	N-8-E	-	8 中 ~ 8 後半	×	南北棟				
42	2	090SB294	10.76	4.76	52.50	5 × 2	2.4	2.12	2.4	1.0	N	-	8 中 ~ 8 後半	×	東西棟				
43	2	115SB0448	7.5 α	4.42	-	(2 + α) × 3	2.2	2.2	2.2	1.6	N-12-W	-	8 後半前後	×	東西棟、西側柱列欠失			094sk054 から巡方出 土、官衙的性格	
44	2	115SB1050	7.3	4.4	32.12	4 × 2	2.16	2	2.16	0.7	N-11-W	-	8 後半前後	×	南北棟				

番号	遺跡名	遺構名	桁行	梁行	面積	間×間	柱間平均長		柱六隅形 (単位: m)		方位 (方位: 鹿嶋北)	時期 (報告書) 区分	遺構の特徴	残存状態	遺物の特徴	遺跡の性格
							桁行	梁行	形状	径						
45		115S81602	12	5	60.00	5 × 2	2.2	2.6	隅丸方形	0.65	N-17-E	8後半前後	南北棟			
46		034S8033	8.1 α	5.4	-	4 ? × 3	1.9	2	円形	0.3~0.6	N-4-E	8後半頃	東西棟			
47		115S80449	8.78	4.14	36.35	4 × 2	2.3	2.1	隅丸方~楕円	63~1.0	N-9-E	8後半代	南北棟			
48		019S8001	6.9	4.6	31.74	4 × 2	1.9	1.4	円形	0.3~0.9	N-6-E	8後半~末	東西棟			
49		086S8050	3	3	9.00	2 × 2	1	1	方形	0.35	N-18-E	8後半~末	正方形プラン			
50		007S8010	4 α	5.3	-	(2 + α) × 3	2	1.6	円形	0.5	N-30-E	8後半~9	東西棟、東半部欠失			
51		007S8013	2.2 α	5.2	-	(1 + α) × 3	2	2.2	円形	0.3~0.6	N-30-E	8後半~9	西柱列残存			
52		007S8011	6 α	3.4	-	(2 + α) × 3	2	1.7	円形	0.6	N-22-E	8後半~9	正方形プラン			
53	3	007S8006	6.4 α	6	-	(3 + α) × 3	2	1.8	円形	0.7~1	N-22-E	8後半~9	東西棟			
54	下	032S8014	3.6	3.2	11.52	2 × 2	1.6	1.8	円形	0.5~0.7	N-13-E	8後半~9	総柱建物、南柱列大半欠失			
55	郡	108S8196	3.1	3	9.30	2 × 2	1.5	1.5	円形	0.5~0.8	N-2-E	8後半~9	総柱建物			
56	遺	120S82590	4.5	3.7	16.65	2 × 3	1.4	1.8	円形	0.3~0.6	N-7-E	古代	南北棟			
57	跡	120S82600	4.4	3.24	14.26	2 × 3	1.6	1.7	円形	0.3~0.8	N-2-E	古代	南北棟			
58	群	120S82520	9.8	7.5	73.50	4 × 4	1.9	2.4	円形	0.6~0.8	N-1-E	古代	南北棟			
59		120S81252	3.4	3.1	10.57	2 × 2	1.5	1.7	円形	0.6~0.8	N-5-E	古代	総柱建物			
60		120S81350	3.38	3.32	11.22	2 × 2	1.66	1.7	円形	0.6~0.8	N-7-E	古代	総柱建物			
61		004S8001	10.5	5.4	56.70	7 × 3	1.5	1.8	円形	0.6~0.7	N-25-E	奈良~平安	南北棟			
62		004S8002	3.6 ?	3.6	12.96 ?	2 × 3	1.7	1.8	隅丸方形	0.9	N-28-E	奈良~平安	南東隅残存			
63		004S8003	6.5	3.8	24.70	2 × 3	1.9	2.2	円形	0.4	N-6-W	9前半代	南北棟			
64		004S8004	4.8	4.5	-	(2 + α) × 3	1.4	1.8	円形	0.5	N-23-E	奈良~平安	南北棟			
65		004S8005	5.6 α	3.6	-	(3 + α) × 2	1.7	1.9	隅丸方形	0.6~0.8	N-53-E	奈良~平安	南北棟、総柱建物			
66		SB005	10.5	4.4	43.84	5 × 2	1.9	2.2	隅丸方形	0.7~0.8	N-12-W	1	東西棟			
67		SB008	5.2	4.2	22.00	3 × 2	1.9	2.1	円形	0.7	N-10-W	1	東西棟			
68		SB015	8	4.4	34.00	4 × 2	1.9	2.1	隅丸方形	0.5~0.7	N-15-W	1	総柱建物			
69		SB001	3.9	3.5	13.30	2 × 2	1.8	1.9	円形	0.7	N-6-W	2	総柱建物			
70		SB002	8.2	4	33.40 ?	5 ? × 2	1.8	2.1	隅丸方形	0.7	N-6-W	2	南北棟			
71		SB004	10.1	5	50.60	5 × 3	1.9	1.7	隅丸方形	0.8~1.0	N-6-W	2	南北棟			
72		SB006	13.8	3.7	50.40	8 × 2	1.7	1.8	隅丸方形	0.6~0.7	N-6-W	2	東西棟			
73		SB011	12.4	5.1	61.71	5 × 3	1.9	1.6	隅丸方形	0.3~0.6	N-6-W	2	南北棟			
74	4	SB016	5.4 ?	-	-	2 × ?	2.1	-	隅丸方形	0.6~0.8	N-6-W	2	東西棟?			
75		SB019	8.4	3.6	30.50	5 × 2	1.7	1.9	不整形	0.7~1.0	N-7-W	2	南北棟			
76	里	SB034	6.8	3.6	24.70	4 × 2	1.7	1.8	隅丸方形	0.7~1.2	N-6-W	2	東西棟			
77		SB037	8.6	3.7	32.70	5 × 2	1.7	1.8	不整形	0.9~1.4	N-6-W	2	東西棟			
78	遺	SB040	8	4.6	48.50	6 ? × 3	-	1.5	-	-	N-6-W	2	東西棟			
79		SB042	4 α	3.8	14.00 α	3 ? × 2	1.9	1.5	隅丸方形	0.5~0.7	N-6-W	2	東西棟西半欠失			
80	跡	SB043	4 α	3.8	-	(2 + α) × 2	1.6	2.2	隅丸方形	0.6	N-6-W	2	柱六列一部残存			柱六埋土須葺杯G蓋
81		SB003	11.6	5.4	62.10	7 × 3	1.7	1.8	隅丸方形	0.7~0.85	N-4-W	3	総柱建物			
82		SB007	3.4	3.3	11.40	2 × 2	1.7	1.6	円形	0.3~0.5	N-4-W	3	総柱建物			
83		SB009	10.4	4.5	47.50	5 × 2	1.7	2.2	不整形	0.8~1.0	N-4-W	3	総柱建物			
84		SB017	9.9	4.9	48.40	5 × 2	1.6	2	隅丸方形	0.5~0.7	N-4-W	3	東西棟			
85		SB020	5.3 α	-	-	4 × α	1.4	-	隅丸方形	0.4~0.6	N-4-W	3	東西二面廂			
86		SB023	4 α	8	31.00 α	4 × 2	2.3	2.3	隅丸方形	0.9~1.0	N-4-W	3	東西二面廂			
87		SB024	11.9	9.5	112.00 ?	7 × 3	1.9	1.7	隅丸方形	0.9~1.0	N-4-W	3	東西二面廂			
88		SB035	8.8	4.3	39.00 ?	5 × 2	1.8	2.1	不整形	0.9~1.0	N-3-W	3	東西棟			

番号	遺跡名	遺構名	桁行	梁行	面積	間×間	柱間平均長 桁行 梁行	柱穴掘形 (単位: m)		方位 (方位: 座標北)	時期 (報告書)		遺構の特徴	残存状態	遺物の特徴	遺跡の性格
								形状	径		区分	世紀				
89		SB039	6.5	4.1	27.60?	3 × 2	2.1	2.1	隅丸方形	N-4-W	3	7第4~8第4半	東西棟			
90		SB044	5.77	3.85	22.00?	3 × 2	1.7	1.9	円形	N-4-W	3	7第4~8第4半	南北棟			
91		SB012	12.6	5.2	96.60	7 × 3	1.8	1.7	隅丸方形	N	4	8第1四半	南部の三面に廂	柱穴埋土須恵坏身G		
92		SB017	8.5	4.2	27.30α	(4 + α) × 2	1.7	2.1	隅丸方形~円形	N	4	8第1四半				
93		SB027	3.5	3.5	12.75	2 × 2	1.8	1.8	隅丸方形	N	4	8第1四半	総柱建物			
94		SB028	3.2	3	9.60	2 × 2	1.6	1.5	隅丸方形	N	4	8第1四半	総柱建物			
95	4	SB029	-	3	9.00?	2 × 2	1.5	1.4	円形	N	4	8第1四半	総柱建物、南柱列欠失			
96		SB032	6.2	4.8	30.00	4 × 3	1.5	1.6	不整形円形	N	4	8第1四半				
97	里	SB033	-	3.5	-	2 × 2	1.8	1.8	円形	N	4	8第1四半	南西隅残存			
98	遺	SB045	3.8	3.4	14.00?	3 × 2	1.3	1.8	円形	N	4	8第1四半	西柱列を欠失			
99	跡	SB046	3	3?	9.00?	2 × 2	1.5	1.5	隅丸方形~円形	N	4	8第1四半				
100		SB013	10.8	5.3	57.00	6 × 3	1.8	1.8	隅丸方形	N	4	8第1四半				
101		SB014	8.2	3.8	31.45	5 × 2	1.8	1.8	隅丸方形	N-2-E	5	8第1~2四半	南北棟			
102		SB022	10.2	4.3	44.00	5 × 2	2.1	2.1	隅丸方形	N-2-E	5	8第1~2四半	南北棟			
103		SB031	9.2	4.5	42.10	4 × 3	2.2	1.5	隅丸方形	N-3-E	5	8第1~2四半	南北棟			
104		SB038	2.8α	4.8	13.00α	(2 + α) × 3	2	1.9	円形	N-3-E	5	8第1~2四半	東側柱列のみ残存			
105		SB041	7.1α	4.8	27.00α	(2 + α) × 3	1.7	1.7	円形	N-3-E	5	8第1~2四半	南北棟、北側柱列欠失			
106		SB775	7.4	3.7?	42.00?	4 × 3?	1.9	1.8	隅丸方形	N-18-W	1	7未~8初	南北棟、北・西柱列欠失			海部郡衙?
107		SB850	5.6	3.3	19.10	4 × 2	1.6	1.4	円形	N-17-E	1	7未~8初	南北棟			
108		SB1250	9.5	6.1	56.88	5 × 3	1.8	2.1	円形	N-12-E	1	7未~8初	南北棟			
109		SB1280	8.2	5.7	46.74	4 × 3	2	2.1	円形	N-13-E	1	7未~8初	南北棟			
110		SB1240	4?	4.7?	-	(3 + α) × (2 + α)	2	1.8	隅丸方形	N-16-E	1	7未~8初	北・西柱列欠失			
111	5	SB1185	5.65	3.6	18.50	4 × 3	1.2	1.3	円形	N-13-E	1	7未~8初	南北棟			
112	城	SB935	-	-	-	(3 + α) × (2 + α)	1.2	1.6	円形	N-16-E	2	8初~8前半	南東隅残存			
113	遺	SB605	7.16	4.89	35.01	4 × 2	2.3	1.9	円形	N-17-E	2	8初~8前半	南北棟			
114	跡	SB655	6.98	4.06	28.34	3 × 2	2	2	円形	N-18-E	2	8初~8前半	南北棟			
115	(中	SB540	13.7	6.34	86.86	5 × 3	1.5	2	隅丸方形	N-17-E	2	8初~8前半	南北棟			
116	安	SB820	8.4	4.8	40.32	5 × 3	1.6	1.6	隅丸方~隅丸	N-22-E	2	8初~8前半	東西棟			
117	遺	SB765	8.5	4.9	41.65	4 × 2	2.1	2.1	隅丸方~隅丸	N-22-E	2	8初~8前半	東西棟			
118	跡	SB770	-	-	-	-	2.2	2.3	隅丸方~隅丸	N-19-E	2	8初~8前半	東西棟? 東側柱列残存			
119		SB1255	3	2.8	7.60	2 × 1	1.5	2.8	隅丸方形	N-20-E	2	8初~8前半	四脚門			
120		SB795	4.92 + α	1.97 + α	-	(2 + α) × (1 + α)	1.7	2	円形	N-19-E	3	8後半	南側柱列のみ残存			
121		SB830	6.52	4.19	27.30	3 × 2	2.1	2.2	不整形円形	N-17-E	3	8後半				
122		SB1235	8.3	4.5	37.70	5 × 3	1.8	1.5	隅丸方~円形	N-29-E	3	8後半	南北棟			
123		SB1290	4.5	4.4	19.66	2 × 2	2.1	2.1	円形	N-11-E	3	8後半	総柱建物			

〈建物規模等数値資料の典拠〉

- 1 今回報告
- 2 坪根信也・塩地潤一「豊後国府推定地周辺の発掘調査Ⅱ」『大分県地方史』(大分県地方史研究会 1996. 10)
- 3 『下郡遺跡群Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ』(大分市教育委員会 2002~2010)
- 4 池邊千太郎ほか『城原・里遺跡』(大分市教育委員会 2010. 3)
- 5 讀取和夫ほか『海部の遺跡Ⅰ』(中安遺跡群第2・3次調査 大分市教育委員会 2005. 3)

註1 建物規模を示す数値については、各報告書の一覽表及び掲載の測図区を示す数値を用いた。  
 註2 羽屋・井戸遺跡の時期区分については、主軸方位をもとに便用上2区分した。  
 ※1 竜王知遺跡の方位は座標北を座標北に変換した(本文中の建物平面図は座標北)。なお、一覽表の方位は建物の長軸・短軸にかかわらず、座標北に対する偏を示した。  
 ※2 「古国府遺跡群第10次調査」と調査回数で整理されている(「古国府遺跡群Ⅰ」大分市教育委員会 2013. 3)



## 第2節 遺物（第53図）

竜王畑遺跡で確認した古代の出土遺物について時期ごと説明を行う。

### [7世紀]

#### 須恵器

器種には坏蓋、無蓋高坏がある。288・32は坏蓋であり、内面にかえりをもつ。かえりは退化し断面三角形を呈す。288は宝珠状のつまみをもつ。7世紀後半代である。32はSBI柱穴掘形埋土中から出土したものであり、建物の時期決定資料となった。

254は無蓋高坏の坏部である。6世紀後半代からみられるが、7世紀初頭まで残る可能性がある。

#### 土師器

器種には皿と高坏がある。323・235の皿は底部から丸く立ち上がり口縁端部でやや外反する。内外面にミガキを施す。

なお、212の高坏は坏部が大きく開き柱状の長い筒部をもつ。裾部はやや小さい。6世紀後半代に該当する。

### [8世紀]

#### 須恵器

坏蓋（34・37・268・309・273）、蓋（262）、長頸壺（286）、高台付き坏（278・289）がある。34は内面のかえりが僅かに残る。37はかえりが消失し、その痕跡が稜をなす。8世紀初頭頃に該当する。268はかえりの痕跡もない。309は輪状つまみをもつ。262は口径が大きく皿類に伴うと思われる。278は丸い底部に内側が接地する高台をもつ。8世紀前半代である。273は口縁部が嘴状に屈曲する。289は底部が平坦で高台は短く矩形をなし、やや底部外縁に付く。8世紀後半代である。

#### 土師器

皿（218・190）、高坏（328）がある。皿はともに内湾気味に立ち上がるが、器形は低く、平底化が進んでおり、7世紀末～8世紀初頭と思われる。328の高坏は扁平な坏部をもつと思われ、脚部を面取りし明瞭な断面八角形をなす。坏部底部内面に弧状の暗文を施している。胎土が精良であり、各部位の特徴から都城系土師器と考えられる。時期は破片であるため明確でないが8世紀前半と思われる。

#### その他の遺物

鬼面瓦（66）は左上隅付近の破片が出土した。大宰府式鬼瓦Ⅱ式系で8世紀後半代以降と考えられる（註5）。

### [9世紀]

#### 須恵器

高台付き坏（282）は体部が底部との境で直線的に立ち上り、高台は低く、底部外縁端部に付く。器形は牛頸窯跡群中の井手24号窯跡出土例や弥勒寺跡SK-1出土の高台付き坏22に近い。8世紀末～9世紀初頭にあたる。307は円面硯と思われるが、硯部の陸と脚部を欠くため器形が明確でない。ただ、円面硯の場合、小型化しており8世紀後半～9世紀初頭頃と想定される。須恵器は9世紀代初頭以降、ほとんどみられなくなる。

#### 土師器

皿（311・39）は311が口径18.4cm、器高1.3cmで底部は平坦で低平な形状を呈し、口縁部は外へ大きく伸びる特徴がある。調整はナデである。39は同様に口縁部が外反する。内面にミガキが残っている。9世紀初頭頃に位置づけた。

蓋（236・310・312・313・314・108）は天井部や口縁部の形態変化を窺えた。器面調整はナデであり、ミガキは残らない。236は天井部から緩く屈曲し口縁端部は短く垂下する。310は天井部から緩い屈曲を示すが口縁端部は緩く垂下する。

313・312は口縁部が外へ緩く伸びる形状となり、さらに314・108は口縁部の退化は顕著であり、器面調整にミガキがみられないことや形態の特徴から9世紀中頃以降と思われる。坪根伸也・塩地潤一氏の「豊後国の土器編年」(註6)との比較では、236・310・313・312が9-2期、314・108は9-3期にほぼ該当する。

坏(43・295・293・315・225)は口径13.4cm~14.8cm、器高3.4cm~5.4cmの大きさをもつ。基本的な形態は平底をなす底部からやや丸みをもって立ち上がり、口縁端部はやや外半する。口径・器高から型式変化をみる事ができる。器面調整はミガキなし、ナデである。小柳編年(註7)では、口径(12cm台~16cm)と調整技法によって1式~5式を設定されている。これに基づくと、43は口径14.5cm、ミガキなしのため9世紀第3四半期初頭頃とした。1式(16cmでミガキ・ケズリ有り)と2式(口径14cmのミガキなし)の中間型式に当てたい。295・293は口径14cm・13.2cmで、9世紀第3四半期とした。2式に該当する。315・225は13.5cm前後と小型化する。9世紀第4四半期とした。3式に該当する。

埴(58・59)は口径が15.7cm、15.4cmと15cm台である。58は底部下端に矩形の高台をもち、体部はほぼ直線的に立ち上がる。59は体部下端が丸みを帯びるものの体部上半は直線的に立ち上がる。加原遺跡B区SK03の一括遺物に類例がみられる。

加原遺跡の159~162はほぼ直線的に立ち上がり、58に近い形状を示している。小柳編年Ⅷ期・9世紀後半代と考えたい。

甕(214・221)本遺跡では貯蔵形態の土器は少ない。214は口縁部が「く」字状に屈曲する。221は短かく外反する。胴部はともに長胴形が想定される。時期は9世紀後半代を想定した。

黒色土器はSD1・2や包含層から10点ほど出土している。112は体部が直線的に立ち上がる特徴をもつ。加原遺跡C区包含層(521)、SK03(161)、SK08(407)などの例は小柳編年Ⅷ期・9世紀後半と思われる。

## [10世紀]

坏(344、180・181・155・147・317)、344は体部が内湾気味に立ち上がり、口径が12.1cmと前代より小型化する。

180・181・155・147・317は口径11cm~14cm、器高2cm~3cm程度の大きさをもつ浅い形状を示す坏である。前代の坏とは形態が異なり、別系譜と思われる。時期は仮に10世紀前半代としたが、不確定である。今後、資料の追加に伴い検討が必要であろう。

埴(183・184)、183は前代から形態変化がみられる。体部下半は丸くなり、高台がやや中央部に付き、長く伸びた形状を呈すようになる。184は底部の破片であるが、高台は細長い形状である。大分市下郡遺跡群第47次SE01などを例示した坪根・塩地編年10-II期にあたり、10世紀前半代としたい。

托(336・160・349)は浅い平板な身と細長い脚部をもつ。160・349は口径10cm前後と口径12.2cmの336よりも小型であり若干後出と思われる。現段階では、明確な共伴遺物、型式変化の把握に至っていないが、口径の縮小化などを勘案し10世紀前半~中頃と考えた。また、既存の編年観では、中津市長者屋敷遺跡出土例を10-II期、守岡遺跡例を10-IV期と比定している(註6)。また、丹生坂ノ市条里跡では、第4地点SB012と重複関係をもつピットから出土した托S2471-1111は10世紀前半と想定されているが(註8)、口径10cmと小型化しており10世紀中頃まで下る可能性も考えたい。(註9)

小皿は器形によって小皿1、小皿2の2分類した。

小皿1(150・339・153・330・191・156・151・193・161・148・192)は口径10cm前後、器高1cm~2cm程度の大きさをもつ。坪根・塩地編年では、大分市守岡遺跡出土土器を資料として10-III期(口径10cm前後、器高2cm~2.5cm前後)から後続する10-IV期(口径10cm前後、器高1.5cm~2cm前後)の10世紀後半に該当する。

小皿2(152・154・158・159)は口径11cm前後、器高1cm前後で、短い体部が横方向へ直線的に伸びる浅い形態を示す。底部はヘラ切りである。小皿1とは異なる形態を示すが、小皿の出現時期や底部切離し技法から10世紀後半代と想定したい。

黒色土器(353・187)、353は内外面にヘラミガキを施し、球体状に丸い器形をなす。187はやや細い高台をもつ。

守岡遺跡などの例から10世紀前半代と考えたい。

緑釉陶器(62) 矩形に近い高台をもつ。9世紀後半～10世紀代。

越州窯系青磁(189) 底部から体部下半付近の破片である。色調は釉薬の発色がよく黄緑色を呈す。高台は幅の広い輪状高台で、全面施釉の後に高台畳付釉を削りとっている。体部外面に篋押圧縦線文を有する。大宰府の型式分類・編年のI-2bイに該当する精製品と思われる(註10)。時期は9世紀後半～10世紀前半と想定した。

10世紀前半の土器については、坏(344)、埴(183)、托(336・160・349)、黒色土器(353)の相伴関係を編年上の試案として提示したい。

#### [11世紀]

この時期の明確な遺物は確認できない。

#### [12世紀]

土師器の小皿(157) 底部を右回転糸切り痕が残る。12世紀以降と思われる。

註1 山中敏史「VII-4 建物配置と地割」『古代の官衙遺跡 I 遺構編』(奈良文化財研究所 2003年)

註2 山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』(塙書房 1992年)

山中敏史「III-2 柱掘りかたの形状」『古代の官衙遺跡 I 遺構編』(奈良文化財研究所 2003年)

註3 山中敏史「VI-1 外周柱穴列の諸類型」『古代の官衙遺跡 I 遺構編』(奈良文化財研究所 2003年)

註4 丸山啓子『久末京徳遺跡』(安岐町教育委員会 1991年)

註5 毛利光俊彦「古代日本の鬼面文鬼瓦」『研究論集VI』(奈良国立文化財研究所 1980)

横田賢次郎「第VI章 出土遺物(1) 瓦磚類」『大宰府政庁跡』(九州歴史資料館 2002年)

註6 坪根伸也・塩地潤一「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』(大分・大友土器研究会 2001年)

註7 小柳和宏「第5章総括第1節遺物」『加原遺跡』(大分県教育委員会 2014)

註8 五十川雄也ほか「第16章考察第1節丹生郷・丹生庄域の出土遺物分類・編年」『丹生川坂ノ市ノ丹生遺跡群』(大分市教育委員会 2009年)

註9 筑後国府Ⅲ期のST1718土壙墓出土の一括遺物である托と体部下半が丸い埴は同時期であることが確実に10世紀前半に比定できるとされている(久留米市文化観光部文化財保護課神保公久氏の御教示による)、『筑後国府跡(1)』(久留米市教育委員会 2008年)

註10 『大宰府条坊跡XV-陶磁器分類編一』(太宰府市教育委員会 2000年)

区分	土器の種類	
	須恵器	土師器
I 期 (7世紀後半)	<p>288, 32, 254</p>	<p>323, 235, 212</p>
	<p>34, 37, 268, 309, 273, 286, 278, 289, 262, 281, 343</p>	<p>218, 190, 328</p>
III 期 (9世紀)	<p>282, 307</p>	<p>311, 236, 39, 310, 313, 312, 314, 108, 328</p>
	<p>43, 295, 293</p>	<p>214, 221, 112</p>
	<p>315, 225, 233, 58, 59</p>	<p>62</p>
期 (10世紀)	<p>344, 180, 181, 155, 147, 317</p>	<p>183, 184, 336, 160, 349, 187, 189, 353</p>
IV 期		<p>150, 152, 339, 154, 153, 330, 191, 158, 156, 159, 151, 193, 161, 148, 192</p>
(12世紀)		<p>157</p>

第 53 図 出土遺物（土器・陶磁器類）編年図

## 第5章 総括

前章で報告した発掘調査をもとに竜王畑遺跡の性格にふれ、総括としたい。

### 1 竜王畑遺跡の分析方法

発掘調査は保存目的調査を主目的として実施したが、遺構の平面確認と部分的な発掘調査にとどめ、限られた出土遺物の整理から時期を特定せざるを得なかった、という制約があった。そのため、遺跡の検討方法については、掘立柱建物の時期決定を①掘立柱建物柱穴や関連遺構の埋土出土遺物、②同一主軸方位を基準とした。建物規模・内容については、羽屋・井戸遺跡、下郡遺跡群、城原・里遺跡など国府所在地及び周辺の内容が明らかな郡衙推定地の建物と比較検討する方法をとった。さらに、竜王畑遺跡の建物規模を客観的に評価するため上記遺跡の数値データを用いて、桁行と平面積の相関を遺跡別に示した。

### 2 遺跡の特徴

建物では、Ⅰ期～Ⅲ期の各時期で中心となる建物が桁行二間×五間以上、50㎡以上の大型建物が存在する。遺跡の存続時期は、7世紀から10世紀と古代ほぼ全期間を通じて継続された遺跡であることが明らかとなった。特に、平安時代（9世紀後半～10世紀前半）に建物、付属施設の充実が示されている。出土遺物には官衙認定の要件である特殊遺物がみられた。陶硯や緑釉陶器、越州窯磁器があり、土器の構成では供膳形態が主体をなす。また鬼面瓦を含む瓦類の出土などの特徴がみられた。現在、上記の特徴の全てをもつ遺跡は県内では竜王畑遺跡以外にはない。特に建物規模、規則的な配置は近隣の郡衙関連遺跡を大きく凌駕している。このことは、国東半島など県内他地域の状況や最近の検討結果とも矛盾するものではない（註1・2）。

### 3 遺跡の性格

国庁や国府中枢施設が特定されていない現状では、竜王畑遺跡の具体的な位置付けを示すことは難しいが、竜王畑遺跡は国府関連遺跡とする認識は妥当であり共通認識とされている。これまでの国府域に関する認識では、古国府地区が「古国府」の地名や「国政」・「石明」・「銅給」など小字名をもとに豊後国府を想定していた時期から、昭和48年～59年の11地区における発掘調査や近年の発掘調査結果はこの地区に国府の中枢施設があったことに否定的であることを示した（註3）。また、竜王畑遺跡の北西約1kmの沖積地に位置する大道遺跡は周辺部では少ない9世紀代の官衙的要素をもつ遺跡のひとつである。8世紀～9世紀前半とされる掘立柱建物群や三彩・越州窯磁器・緑釉陶器など特殊な出土遺物があり、官衙的な遺跡との認識がされているものの建物規模の様相は全体に竜王畑遺跡よりも小規模であり、国府域の中心的な建物の位置付けには無理がある。（註4）

上野台地の遺跡状況は竜王畑遺跡から西に約2km離れた上野遺跡群11次において長舎建物が確認され、律院付近に国府を含む中枢施設のひとつが存在する可能性を示した。国庁推定地は大分市史や竜王畑遺跡の調査概要（註5）で示したように概ね上野台地西半部の上野丘高校周辺、特に北部の字名で示すと東・西・南・律院付近に所在するとの認識が一般的であろう。さらに、竜王畑遺跡は台地中心部ではなく東縁部に所在していることが特徴的である。当遺跡の南100m地点の14次調査では遺構が希薄とはいえ、円面硯など8世紀代の遺物が出土していること（註6）、北部の今回調査を実施した県立芸術文化短期大学敷地内で8世紀～10世紀の土器が出土したことから、本来、上野台地の東辺部全域に竜王畑遺跡と関連する遺構の拡がる可能性が高まった。

以上のように、竜王畑遺跡は現状では国庁や国司館と特定する外郭施設、長舎建物など建物構成・配置や記録資料を有さないことから国府に伴い配置された曹司の一つと考えたい。

今回の調査において、竜王畑遺跡が古代豊後・大分の政治的な中枢機能をもつ重要な官衙遺跡であることが再認識された。今後、当遺跡の早急な保存を図るとともに、当該地区の古代官衙遺跡の保存・活用に向けた検討を関係機関の協力を得ながら進める必要がある。

- 註1 後藤一重『久末京徳遺跡』（大分県教育委員会 2004年）
- 註2 長直信氏は、古代豊後国の官衙関連遺跡について建物規模・建物配置・桁行から属性の抽出を行い分析・類型化を試みている。竜王畑遺跡はA類型：「律令国家」的施設にあて、さらに建物面積15坪以上、桁行5間以上、建物配置に規則性がある国府クラスに位置づけている。（長直信「豊後国における官衙関連遺跡の基礎的研究―旧大分郡・海部郡を中心として―」『福岡大学考古学論2集』（福岡大学考古学研究室 2013年））
- 註3 讃岐和夫「豊後国府推定地周辺の発掘調査」「大分県地方史第117号」（大分県地方史研究会 昭和60年3月）、長直信ほか『古国府遺跡群1』（大分市教育委員会 2013年）
- 註4 長直信ほか『大道遺跡群7』大分市教育委員会 2014年）
- 註5 高橋信武「上野遺跡群竜王畑遺跡の発掘調査」「大分県地方史第173号」（大分県地方史研究会 平成11年3月）
- 註6 五十川雄也「4上野遺跡群第14次調査」『大分市埋蔵文化財調査概要報告2012』（大分市教育委員会 2013年）
- 註7 今関信之助「大日本帝国市町村地図」大日本帝国市町村地図刊行会 1934年



第54図 竜王畑遺跡周辺の字名

竜王畑遺跡遺物観察表

図版番号	遺物番号	出土遺物	種別	時期	器種	口径	器高			胎土	色調	内面調整	外面調整	焼成・底面他
							高	底	径					
							K:角閃石・C:長石・S:石英・H:白色粒・A赤色粒							
3	1		土師器		高坏形土器									刷毛目・ナデ
	2	SH2	土師器		高坏形土器	8.2								
	3	SH3	縄文土器	縄文晩期	深鉢形土器									
4	4	SH3	縄文土器	縄文晩期	深鉢形土器									
	5	SH3	土師器		甕形土器									
	6	SD3	土師器	古墳時代	甕形土器	13.8				K・H・A粒微量	明褐色	刷毛目	刷毛目	
	7	SD3	土師器	古墳時代	甕形土器	15.0				C・K・Hが多い	黒褐色	刷毛目	刷毛目	
	8	SD3	土師器	古墳時代	甕形土器	16.4				C・K・Hが多い	淡褐色	刷毛目	横ナデ	
	9	SD3	土師器	古墳時代	甕形土器	17.0				C・K・Hが多い	暗茶褐色	刷毛目・横ナデ	刷毛目	
	10	SD3	土師器	古墳時代	甕形土器	10.6				K微量	明褐色	刷毛目・横ナデ	刷毛目	口縁部ナデ
	11	SD3	土師器	古墳時代	甕形土器	8.4				C・K・Hが多い	明茶褐色	磨き	刷毛目・ナデ	
	12	SD3	土師器	古墳時代	甕形土器	11.0				H・小S・C・Kが多い	暗茶褐色	胴：ヘラ削り	刷毛目	
	13	SD3	土師器	古墳時代	甕形土器	14.0				C・Sが多い	淡黒褐色	刷毛目		
	14	SD3	土師器	古墳時代	甕形土器	15.0				A・小S・K・Cが多い	作:黒緑・水:黒緑	刷毛目	刷毛目	
	15	SD3	土師器	古墳時代	甕形土器					K・H微量	明褐色	刷毛目	刷毛目	
	16	SD3	弥生土器	古墳時代	甕形土器					K・H・A微量	明褐色	刷毛目	刷毛目	
	17	SD3	弥生土器	古墳時代	甕形土器					K・H微量	明褐色	刷毛目	刷毛目	
	18	SD3	弥生土器	古墳時代	壺形土器					K微量	明褐色	刷毛目	刷毛目	
	19	SD3	弥生土器	古墳時代	壺形土器					K微量	鈍い黄褐色	ナデ	刷毛目	
	20	SD3-3	土師器	古墳時代	甕形土器					K微量	明褐色	刷毛目	刷毛目	
	21	SD3	土師器	古墳時代	甕形土器					C・K・Hが多い	明褐色	刷毛目	刷毛目	刷毛具押圧列
22	SD3	土師器	古墳時代	甕形土器			4.6		C・K・S・Aが多い	淡褐色	刷毛目	刷毛目		
23	SD3	土師器	古墳時代	壺形土器	29.6					黄褐色	横ナデ	横ナデ	赤色顔料	
24	SD3	土師器	古墳時代	壺形土器	20.4				C・Kが多い	淡橙褐色	ヘラナデ・ナデ	刷毛目		
25	SD3	土師器	古墳時代	甕形土器					C・K・Sが多い	淡褐色	ヘラ削り・刷毛目	刷毛目		
26	SD3	土師器	古墳時代	壺形土器					C・K・Sが多い	淡褐色	剥落	刷毛目		
27	SD3	土師器	古墳時代	丸底鉢	11.8	8.7			C・K・A少量	明褐色	胴は丁寧なナデ	刷毛目		
28	SD3	土師器	古墳時代	脚付き鉢			7.7		C・K・A・Hが多い	褐色	ナデ	刷毛目・回転ナデ		
29	SD3	土師器	古墳時代	高坏形土器					C・K・Sが多い	淡褐色	ナデ	横ナデ		
30	SD3	土師器	古墳時代	高坏形土器					C・K・Sが多い	淡褐色	ナデ	横ナデ	石英が多い	
31	SD3	土師器	古墳時代	高坏形土器				8.0	C・Kが多い	淡褐色	指押さえ	横ナデ	外底指押さえ	
32	SB1-P9-29	須恵器	古代	坏蓋	10.9	2.6			S1mm以下				台は時計回り	
20	33	SD1-4	瓦	古代	平瓦	長13.0	幅9.8	厚2.7	砂粒少量	暗赤褐色	布目痕	網目叩き	側面ヘラ切り	
21	34	SD1	須恵器		蓋坏									
	34	I9区SD1-31	須恵器		蓋坏	宝珠径2.4			小S	淡青灰色	指ナデ	回転ヘラ切り・ナデ		
	35	I9区SD1-202	須恵器		蓋坏				C・K・Sが多い	淡青灰色	指ナデ	回転ヘラ削り		
	36	H8区SD1-13	須恵器		蓋坏				C・K・石Sが多い	淡灰茶色	指ナデ	回転ヘラ削り		
	37	SD1												
	38	SD1-11	須恵器		坏身			13.3	石英S	白灰色	回転ナデ	回転ナデ		
	39	SD1	須恵器		坏身									
	40	SD1												
	41	I9区SD1-31	須恵器		坏身									
	42	I9区SD1-230	土師器		皿				C・K・A・Hが多い	淡橙褐色	ヘラ磨き	ヘラ磨き		
	43	SD1-186	土師器		坏	15.0	5.2	8.2	C・K・A・H・Sが多い	淡褐色	見当り不十分、他同様ナデ		回転ヘラ切り	
	44	SD1-1	土師器		坏	13.8		6.4	C・Kが多い	淡褐色	見当り不十分、他同様ナデ		回転ヘラ切り	
	45	SD1-206	土師器	時期	坏	14.0	3.8	7.4	C・K・A・H・Sが多い	淡褐色	見当り不十分、他同様ナデ		回転ヘラ切り	
	46	SD1-207	土師器		坏	13.6	4.1		C・K・A・Hが多い	明橙褐色	回転ナデ	回転ナデ		
	47	SD1-7	土師器		坏	14.4	4.8	8.0	H・小S・C・Kが多い	淡橙褐色	見当り不十分、他同様ナデ			
	48	SD1-200	土師器		坏	13.0	4.1	8.4	砂粒少量	鈍い橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り	
	49	SD1-32	土師器		坏	13.9	4.4	7.6	C・K・A・Hが多い		回転ナデ	回転ナデ		
	50	I9区SD1	土師器		坏	13.8	8.0	3.4	C・K・A・H・Sが多い	淡褐色	見当り不十分、他同様ナデ		回転ヘラ切り	
	51	SD1-7	土師器		坏	13.0		8.0	C・K・A・Hが多い	淡黄褐色	見当り不十分、他同様ナデ			
	52	I9区SD1-125	土師器		坏				C・K・A・Hが多い	淡褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り	
	53	SD1-176	土師器		坏				砂粒少量	明褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り	
	54	I9区SD1-216	土師器		坏				C・K・A・Hが多い	淡褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り	
	55	SD1-19	土師器		坏				A細粒が多い	淡褐色	回転ナデ	回転ナデ		
	56	SD1-68	土師器		坏			7.6	砂粒少量	暗褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り	
	57	SD1-231	土師器		坏			9.8	砂粒少量	橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り	
	58	I9区SD1-19	土師器		坏	15.7	5.9	7.5	C・K・A・Hが多い	淡褐色	見当り不十分、他同様ナデ		回転ヘラ切り	
	59	SD1-243	土師器		坏	15.4	6.1	9.2	H・小S・C・Kが多い	暗褐色	回転ナデ	回転ナデ		
	60	SD1-204	土師器		坏			7.8	H・小S・C・Kが多い	明橙褐色	見当り不十分、他同様ナデ		回転ヘラ切り	
	61	I9区SD1	土師器		坏			8.2	H・小S・C・Kが多い	明茶褐色	見当り不十分、他同様ナデ		回転ヘラ切り	
	62	H8区SD1-17-18	土師器		坏			7.0	C・Kが多い	明茶褐色	横ナデ・ミガキ	回転ナデ	回転ヘラ切り	
	63	SD1						7.0						
	64	I9区SD1	土師器		皿			8.2	C・K・A・Hが多い	淡褐色	ヘラミガキ	回転ナデ		
	22	64	SD1-227	瓦	古代	丸瓦	長11.5	幅8.7	厚1.9	砂粒少量	黒褐色	布目痕	斜格子目叩き	
		65	SD1-200	瓦	古代	丸瓦	長12.3	幅6.0	厚2.2	砂粒少量	灰白色	布目痕	斜格子目叩き	
66		SD1-16	瓦	古代	鬼瓦	長11.6	幅6.7	厚6.7	Hを含み砂粒が多い	灰色			穿孔	
67		SD1	瓦	古代	平瓦									
68		SD1-179	瓦	古代	平瓦	長12.2	幅10.7	厚2.6	砂粒少量	灰黄色	布目痕	格子目叩きをナデ消し	平割破面	
223		G8区SD1	土師器		皿	17	2.6	13.4			回転ナデ	底部近くからヘラ削り		
69		SD1	須恵器		甕					濃青灰色	横ナデ	回転ナデ		
23	70	SD1-13	須恵器		坏身			7.6	Sが多い	灰白色	横ナデ	回転ナデ		
	71	SD1-169	土師器		坏	13.0		8.6	C・K・A・Hが多い	橙褐色	見当り不十分、他同様ナデ		回転ヘラ切り	
	72	SD1-178	土師器		皿	10.0			砂粒少量	鈍い橙色	回転ナデ	回転ナデ		
	73	SD1	土師器		皿									
	74	SD1	土師器		皿									
	75	SD1	土師器		皿									
	76	SD1	瓦質土器	近世	鉢				砂粒少量	淡黒灰色	回転ナデ	回転ナデ		
	77	I9区SD1-136	土師器		皿			8.0	C・K・A・Hが多い	明茶褐色	見当り不十分、他同様ナデ		回転ヘラ切り	
	79	I9区SD1-94	土師器		皿			8.0		淡橙褐色	回転ナデ	回転ナデ		
	80	SD2	須恵器		甕									
25	81	SD2-14		古代	平瓦	長12.1	幅10.8	厚1.8	砂粒少量	鈍い黄褐色	布目痕	格子目叩き		
	82	SD2-9		古代	平瓦	長13.4	幅9.1	厚3.1	C・K微量	鈍い黄褐色	ヘラ削りで平滑	網目叩き		
	83	SD2-2		古代	平瓦	長10.6	幅8.0	厚1.8	K・H微量	灰色	布目痕	網目叩き		

図版 番号	遺物 番号	出土遺物	種 別	時 期	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土		色 調	内面調整	外面調整	焼成・底面他
									K:角閃石・C:	長石・S:石英・H:白色粒・A赤色粒				
26	84	D7区SD2-22	須恵器	古代	高坏	8.9				C・Sが多い	淡青灰色	横ナデ	回転ナデ	
	85	B4-12	土師器	古代	坏蓋	2.5つまみ								
	86	19区SD2-20	須恵器	古代	坏蓋	1.8つまみ				C・Sが多い	淡青灰色	横ナデ	自然釉が覆う	
	87	19区SD2-89	須恵器	古代	坏蓋	3.3つまみ				Sが多い	白灰色	指ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り
	88	19区SD2-34	須恵器	古代	坏蓋					砂粒少量	淡青灰色	回転ナデ	回転ナデ	
	89	SD2-11	須恵器	古代	甕									
	90	H9区SD2-14	須恵器	古代	盤			8.9		砂粒少量	淡青灰色	指ナデ		底部回転ヘラ切り
	91	SD2一括	須恵器	古代	甕									
	92	SD2-184	須恵器	古代	甕					石英多量	淡青灰色	横ナデ	横ナデ	
	93	19区SD2-162	土師器	古代	坏蓋	3.6つまみ				石英少量	淡橙褐色	回転ナデ	回転ナデ	
	94	19区SD2-162	須恵器	古代	壺									
	95	SD2-104	土師器	古代	坏					砂粒少量	鈍い橙色	回転ナデ	回転ナデ	
	96	SD2-68	土師器	古代	皿			8.4		砂粒少量		ナデ	ヘラ削り	底部回転ヘラ切り
	97	SD2-187	土師器	古代	高坏	13.4				砂粒少量	艶	回転ナデ	回転ナデ	
	98	SD2-1002	土師器	古代	坏	15.1				Aが多い	鈍い橙色	回転ナデ	回転ナデ	
	99	SD1-172	土師器		壺	13.5								
	100	SD2-32	土師器	古代	坏	13.2	3.7	8.2			明橙褐色	中央ナデ・他は回転ナデ	回転ナデ	底部ヘラ切り
	101	SD2-18	土師器	古代	坏	13.4	4.5	8.3		4mm大のS	鈍い橙色	回転ナデ	回転ナデ	底部回転ヘラ切り
	102	SD1-29												
	103	SD2-64	土師器	古代	坏			8.1		Aが多い	橙色	回転ナデ	回転ナデ	底部回転ヘラ切り
	104	SD2-15	土師器	古代	坏			8.3		A・Hが少量	鈍い橙褐色	回転ナデ	回転ナデ	底部回転ヘラ切り
	105	19区	土師器	古代	高台付坏	15.8	8.4	5.2		K・H少量	鈍い橙褐色	両面回転ナデ	高台貼付け	底部回転ヘラ切り
	106	19区SD2	土師器	古代	壺			7.2						
	107	SD2-163	土師器	古代	高台付坏			7.0		C・K多量	淡茶褐色	回転ヘラ削り		
	108	SD2-22	須恵器	古代	蓋	8.9								
	109	SD2-43	土師器	古代	坏蓋	12.0	1.5	8.3			淡褐色	回転ナデ	回転ナデ	底部回転ヘラ切り
110	SD2-92	土師器	古代	蓋					砂粒少量	明褐色	回転ナデ	回転ヘラ切り		
111	SD2-187	土師器	古代	坏蓋					Aが多い	鈍い橙色	回転ナデ	回転ナデ	上面ヘラ切り	
112	SD2-3・16・186	内黒土器	古代		18.0					黒色	ヘラミガキ	ヘラミガキ		
113		内黒土器	古代				7.3							
114	19区SD2	内黒土器	古代	壺			9.0		C・Kが多い	暗褐色	回転ナデ	回転ナデ		
115	SD2-84	内黒土器	古代				9.0		C・K・S・Hが多い	赤褐色	ヘラミガキ	回転ナデ		
116	19区SD2	土師器	古代	蓋	14.0				C・Kが多い	淡褐色				
117	110区	内黒土器	古代											
28	118	SD5	龍泉窯青磁	中世	皿	11.5	3.2	5.5			灰オリーブ	露胎	削出高台	「記司」
29	119	B4区1	瓦	古代	平瓦	長10.0	幅8.0	厚1.4		C・Kが多い	茶褐色	布目痕・糸切り	斜格子目叩き	
	120	B3区15	瓦	古代	平瓦	長6.5	幅8.0	厚2.0		C・Kが多い	灰色	布目痕	叩き	
	121	B4区5	瓦	古代	平瓦			厚3.0		C・Kが多い		布目痕	格子目叩き	側面折断
	122	B4区18	瓦	古代	平瓦	長5.5	幅14.5	厚1.7		C・Kが多い	橙色	布目痕	格子目叩き	赤色顔料付着
	123	B4区SD7	瓦	古代	平瓦			厚2.4		C・Kが多い	茶褐色	布目痕	格子目叩き	側面折断
	124	B5区27	瓦	古代	丸瓦	長15.0	幅9.0	厚2.9		C・Kが多い	灰色	布目痕	叩き	側面ナデ
125	B3区19	瓦	古代	平瓦	長5.5	幅6.5	厚1.4		C・Kが多い	灰色	布目痕	斜格子目叩き		
32	126	B2区3		縄文晩期	深鉢形土器					Kが多い	黒茶色	二枚貝条痕	二枚貝条痕	
	127	B4区8		弥生中期	壺形土器						橙褐色	ナデ	ナデ	
	128	B2区4	土師器	古墳時代	甕形土器						明褐色	ナデ	ナデ	
	129	B3区21	土師器	古墳時代	甕形土器					C・K・A・Hが多い	淡褐色	回転ナデ	回転ナデ	
	130	B4区	土師器	古墳時代	甕形土器									
	131	B5区包含層	須恵器	古代	坏蓋	つまみ				小Sが多い	淡青灰色		横ナデ	
	132	B5区包含層	須恵器	古墳時代	坏蓋					砂粒少ない	淡青灰色	横ナデ	横ナデ	
	133	B5区包含層	須恵器	古墳時代	はそう						暗茶褐色	横ナデ	横ナデ	
	134	B5区包含層	須恵器	古墳時代	甕					砂粒少ない	青灰色	回転ナデ	横ナデ	ヘラ記号
	135	B4区包含層	須恵器	古墳時代	甕						淡青灰色	回転ナデ	横ナデ	
	136	B3区26	須恵器	古墳時代	甕					C・K・A・Hが多い				
	137	B4区SD6	須恵器	古代	坏蓋									
	138	B5区包含層	須恵器	古墳時代	甕									
	139	B3区12	須恵器	古代	甕					砂粒少ない	濃青灰色	ナデ	叩き	
	140	B4区12	土師器		坏蓋					C・K・Aが多い	橙色	ナデ	回転ナデ	
	141	B4区28	土師器		壺			6.0		金色の雲母が多い	淡褐色	回転ナデ	ナデ	
	142	B3区6	内黒土器		壺					C・Kが多い	淡褐色	ヘラミガキ	横ナデ	内面黒色
	143	B3区9・10	土師器		甕					C・K・Aが多い	暗茶褐色	回転ナデ	回転ナデ	
	144	B4区	土師器											
	145	B4区	内黒土器		壺									
	146	B2区	土師器		壺			8.0						
	147	B3区41	土師器		皿	11.4	2.9	6.8		C・Kが多い		渦巻き上のナデ	回転ナデ	一部口縁部に煤
	148	B3区32	土師器		坏	10.4	1.3	6.6		C・K・Aが多い	淡橙褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り
	149	B4区29	内黒土器					8.2		砂粒が多い	外は鈍い黄褐色	ヘラミガキ	横ナデ	外底ヘラ記号
	150	B5区包含層	土師器		坏	10.0	1.9	7.0		C・K・Sが多い	淡褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り
	151	B4区溝西	土師器		坏	11.4	1.9	8.6			淡褐色	回転ナデ	底は板圧痕	回転ヘラ切り
	152	B5区9				11.0	1.6	8.2			淡褐色	回転ナデ	回転ナデ	
	153	B4区溝西側	土師器		皿	10.8	1.6	7.4			淡褐色	回転ナデ	回転ナデ	
	154	B5区15	土師器		皿	11.4	0.8	8.4		C・Kが多い	淡褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り
	155	B5区4・6・7・12	土師器		坏	14.2	2.6	8.4		C・K・Aが多い	暗茶褐色	回転ナデ	回転ナデ	金色雲母
	156	B4区24	土師器		坏	11.0	2.0	7.0						
	157	B5区14	土師器		皿	10.7	1.5	6.9		C・K・Aが多い	淡褐色	回転ナデ	回転ナデ	糸切り
158	B4区34	土師器		皿	11.2	1.0	8.4		s少量	淡橙褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り	
159	B4区	土師器		皿	11.0	1.2	8.0							
160	B4区31	土師器		坏	9.6	6.6	2.4		C・K・Aが多い	橙褐色	ナデ	回転ナデ	高台貼付け	
161		土師器		坏	10.4	1.5	8.0							
162	H7区11	内黒土器					8.6							
163	B5区25	緑釉陶器		皿			厚0.25							
164	112区旧SD11	須恵器	古代	蓋	24.2				Sが多い	淡青灰色	不定方向ナデ	回転ヘラ削り		
165	113区SD13	須恵器	古墳	壺					K少量	灰白色	横ナデ	横ナデ	自然釉	
166	113区SD13	須恵器	古代	壺身				8.5	C・Sが多い	黒色	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	
167	112区旧SD11	土師器	古代	蓋						褐色	ナデ	ナデ		
168	114区SD13	土師器	古代	坏	9.0	1.3			砂粒少量	淡褐色	磨耗	磨耗		



図版 番号	遺物 番号	出土遺物	種 別	時 期	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	色 調	内面調整	外面調整	焼成・底面他	
														K:角閃石・C:長石・S:石英・H:白色粒・A赤色粒
34	169	H13区SD13	土師質土器	鍋	脚				C・Kが多い	淡褐色				
	170	I13区SD13	京都系土師器	中世	坏	11.2	2.3		砂粒少量	淡褐色	ナデ	ナデ	手づくね	
	171	I14区SD13	陶器	近世	皿			5.8		黄灰色			蛇目釉剥に砂目	
	172	I13区SD13	備前焼	中世	掃鉢				砂粒少量	茶褐色	回転ナデ	回転ナデ		
	173	I13区	須恵器	古墳	甕				C少量	灰色				
	174	I13区	瓦	中世	軒丸瓦	長5.6			C・Kが多い	灰色	ナデ			
	176	I14区SD13	備前焼	中世	甕	坏				黒色				
36	177	SK1-46	須恵器		坏身			8.6	Sが多い	濃青灰色	横ナデ	横ナデ	底部ヘラ切り	
	178	SK1-54	須恵器		壺	口径9.0			Sが多い	淡青灰色	横ナデ	回転ヘラ削り		
	179	SK1-57	須恵器		壺			10.6	C・Sが多い	淡青灰色	横ナデ	回転ナデ		
	180	SK1-37	土師器		坏	10.7	2.1	7.0	砂粒・Aが多い	鈍い黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	底部ヘラ切り	
	181	SK1-18	土師器		皿	11.8	3.0		C・Kが多い	淡い黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	底部ヘラ切り	
	182	SK1-51	土師器		碗				砂粒少量	明褐色	回転ナデ	回転ナデ	底部ヘラ切り	
	183	SK1-15	土師器		碗	16.0	6.5	8.6	C・Sが多い	茶褐色	回転ナデ	回転ナデ		
	184	SK1-38	土師器		碗			6.8	C・Kが微量	鈍い黄褐色	横ナデ	回転ナデ		
	185	SK1-17	須恵器		坏蓋				Sが多い	淡青灰色	ナデ	ナデ		
	186	SK1-5	土師器		碗			6.6	金の雲母が多い	明茶褐色	回転ナデ	回転ナデ		
	187	SK1-31	内黒土器		碗			7.6	長C・Kが微量	淡褐色	ヘラミガキ	回転ナデ	回転ヘラ切り	
188	SK1-1	須恵質陶器					9.4							
37	189	SK1	越州窯青磁		碗			5.8		薄い緑色	回転ナデ	回転ナデ		
	190	I13区古代層	土師器		坏	9.6	1.5		精選された胎土	淡褐色	見込みナデ、他は回転ナデ			
	191	I13区II層	土師器		坏	9.6	1.6		砂粒少量	淡白褐色	見込みナデ、他は回転ナデ		底面外部ナデ	
	192	G10区3	土師器		皿	10.2	1.7	6.6	C・H少量	灰白色	回転ナデ	回転ナデ	底面ナデ	
	193	A5区包含層	土師器		皿	11.4	1.3	8.2		淡褐色	中央ナデ、他は回転ナデ	回転ナデ	底部ヘラ切り	
	194	H8区25	土師器		企救型甕	25.0			C・Kが多い	淡褐色	刷毛目	刷毛目		
	195	C7区	瓦質土器		掃鉢			11.2	C・K・Sが多い	薄黒灰色	刷毛目	刷毛後ナデ		
	196	I11区5	土師器		鈿付鉢	内径13.3	鈿径20.5			黒茶褐色	胴ヘラ削り	ナデ		
	197	C7区築地掘乱	土師質土器		土鍋				C・K・A・Hが多い	淡黒灰色	回転ナデ	回転ナデ		
	198		土師質土器		土鍋				C・K・赤Aが多い	淡灰色	回転ナデ	回転ナデ		
	199	C7区	京都系土師器						C・K・Aが多い		ナデ	ナデ		
	200	I7区11	土師質土器		鉢脚部				C・Kが多い	淡褐色	ナデ	ナデ		
	201	H8区14	瓦	中世	平瓦	長9.9	幅7.7	厚2.2	K・H微量	灰色	カキ目	網目叩き	3.8gr	
	202	I13区黒色土	土師質		土錘	長2.9	幅1.1	孔径0.4					5.6gr	
	203	I14区黒色土	土師質		土錘	長2.9	幅1.1	孔径0.4						
	204	I13区黒色土	錢貨	明時代	永楽通宝	径2.5		2.2gr						
	38	205	SK5-2	サヌカイト	旧石器	剥片	長5.25	幅7.6	厚0.8					31.7gr
206		C4区3	流紋岩	旧石器	剥片	長6.2	幅4.9	厚さ1.4					1.6gr	
207		C4区3区1	チャート	縄文時代	石ぞく	長2.0	幅2.1	厚さ0.3		黒黒と灰色の混じるチャート				
208		I12区包含層	縄文土器	晩期	深鉢	口径	器高	底径		胎土	色調	内面調整	外面調整	その他
209		E7区築地掘乱	弥生土器	弥生	甕形土器			6.0	C・K・Sが多い	赤褐色	刷毛目	刷毛目が剥離	ナデ	
210		F5区一括	土師器	古代	甕	9.9			C・Kが多い	明赤茶褐色	胴ヘラ削り	ナデ		
211		I9区包含層	土師器		底部			6.0	C・K・A・Hが多い	淡橙褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り	
212		D11区3	土師器		高坏	15.4	11.1	11.1	C・Kが多い	淡黄褐色	ナデ後ヘラミガキ	胴部ヘラのミガキと削り	脚内ヘラ削り	
213		I9区II包含層	土師器	古墳	丸底壺	9.4	12.0	12.2	C・Kが多い	淡茶褐色	ヘラ削り・刷毛目	刷毛目・ナデ		
214		I12区包含層	土師器		甕	21.5								
215		I9区包含層	土師器		甕	28.0			C・K・A・Hが多い	淡褐色	ヘラ削り・横ナデ	刷毛目・横ナデ		
39	216	G5区一括	土師器		甕				C・Kが多い	淡褐色	刷毛目・指圧痕	刷毛目		
	217	H9区40	土師器		蓋	18.7	3.8		Cが多く、金色雲母若干	茶褐色	ナデ調整範囲が狭いナデ			
	218	H11区4	土師器		皿	16.3	2.0		C・K・Sが多い	赤褐色	胴部には発汗ナデ			
	219	I10区包含層	土師器		坏			9.4	C・K・A・Hが多い	明茶褐色	ヘラミガキ	ヘラミガキ		
	220	7H区	須恵器		高坏	11.8	4.3+α							
	221	J10区16	土師器		甕	18.6			C・K・Sが多い	茶褐色	磨耗	磨耗		
	222	I8区28	土師器		碗	11.6				淡黄褐色	横ナデ・ヘラミガキ	横ナデ・ヘラミガキ		
	223	欠番												
	224	I8区17	内黒土器		碗			7.0	C・K・Sが多い	淡褐色	横ナデ・ヘラミガキ	回転ナデ	回転ヘラ切り	
	225	I13区II層	土師器		坏	13.0	3.6	6.6	金の雲母	明茶褐色	中央ナデ、他は回転ナデ	回転ナデ	底部ヘラ切り	
	226	I12区2	土師器					7.8	C・K・S他が多い	黄褐色	ヘラミガキ	回転ナデ	回転ヘラ切り	
	227													
	228	D8区1	土師器		皿	11.0	1.8	6.0	砂粒Aが多い	淡黄褐色	回転ナデ	回転ナデ		
	229	B11区	土師器		甕			14.0	C・K・A・Hが多い	淡褐色	回転ナデ	回転ナデ		
	230	J10区2	須恵器		坏蓋	つまみ径3.3			砂粒少量	淡青灰色				
	231	D8区2	須恵器		坏蓋				小Sが多い	淡青灰色				
	232	I13区II層	土師器		蓋	径2.9				淡褐色		回転ナデ		
233														
234														
235	J10区15	土師器		大型皿	20.0	3.8+α		砂粒少量	明茶褐色	ヘラミガキ	ヘラミガキ			
236	F9区一括	土師器		坏蓋	12.0			C・Kが多い	暗褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り		
237	C7 築地掘乱	土師器		皿	12.0	1.8	6.4	C・K・A・Hが多い	淡褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り		
238	C5区	土師器		皿	12.0	2.0	8.4	砂粒少量	淡橙褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り		
239	I9区包含層	土師器		皿				C・K・Aが多い	淡褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り		
240	I19区包含層	土師器		皿				C・K・A・Hが多い	茶褐色	回転ナデ・中央ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り		
241	I9区包含層	土師器		坏	14.6	3.4	9.4	C・K・Aが多い	淡褐色	回転ナデ・中央ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り		
242														
243														
244	I9区4	土師器		坏	12.9	3.7	9.4	Cが多い	鈍い橙色	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り		
245	I9区包含層	土師器		坏	13.0			C・K・A・Hが多い	淡褐色	回転ナデ・中央ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り		
246	I12区7	土師器		碗			7.3	C・Kが多い	淡褐色	回転ナデ・中央ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り		
247	I8区31	土師器		高坏				C・K・A・Hが多い	黄茶褐色	ヘラ削り	ヘラ削り			
248	I12区3	土師質		フイゴ	長8.9	径8.0			淡褐色			細い部分は黒く変化		
249	I9区包含層	土師質												
250	I9区包含層	土師質						Sが多い	淡褐色	指圧痕	指圧痕			
251	I9区包含層	土師質		鍛冶				Sが多い	淡茶褐色	ナデ	指圧痕			
252	I13区黒色土層	須恵器		甕					濃暗灰色	横ナデ	縞波状紋			
253	G10区10	須恵器		壺	16.0				淡青灰色					

図版 番号	遺物 番号	出土遺物	種 別	時 期	器 種	口 径	器 高 底 径			胎 土	色 調	内面調整	外面調整	焼成・底面他
							K:角閃石・C:	長石・S:	石英・H:					
40	254	H7区19	須恵器		高坏	11.8					暗灰色			
	255		須恵器		高坏									
	256	I12区攪乱土坑	須恵器		高坏									
	258	B8区1	須恵器		坏蓋	14.0								
	259	I9区包含層	須恵器		高坏						淡青灰色			
	260	I10区包含層	須恵器		高坏									
	261	I11区2	須恵器		坏蓋									
	262	I11区2	須恵器		坏蓋									
	263	I11区4	須恵器		蓋	17.0	2.1			C・Kが多い	灰色			
	264													
	265	I12区包含層	須恵器		壺?				8.0	砂粒少量	灰褐色	横ナデ	横ナデ	
	266	I9区包含層	須恵器		高坏									
	267	I12区包含層	須恵器		坏蓋									
	268	H9区PI一括	須恵器		甕					Cが多い	灰白色	小判型叩き	格子目叩き・ナデ	
	269	H12区1	須恵器		坏蓋	13.2				Sが多い	淡青灰色	指ナデ	回転ヘラ削り	
	270	H12区6	須恵器		坏蓋									
	271	I9区包含層	須恵器		台付壺									
	271	I13区II層	須恵器		坏蓋・硯	15.2								
	272	J10区1	須恵器		坏身									
	273		須恵器		坏身									
	275	H9区1	須恵器		坏蓋	13.9				Sが多い	暗茶褐色	横ナデ	横ナデ	
	276	I12区	須恵器		坏身									
	277	I9区包含層	須恵器		坏身									
	278	I13区II層	須恵器		坏身硯				10.5					
	279	I9区包含層	須恵器		坏身				11.9					
	280	I13区II層	須恵器		坏身									
	281	I9区包含層	須恵器		坏				13.2					
	282	I10区包含層	須恵器		坏身				15.2					
283	I13区8	須恵器		壺										
284	I10区包含層	須恵器		坏身	14.0									
285	H12区包含層	須恵器		甕										
286	I11区3	須恵器		長頸壺	最大径18.6				Sが多い	濃青灰色	横ナデ	横ナデ		
286	H9区1	須恵器		甕					Cが多い	灰色・浅黄色	小判型叩き	格子目叩き・ナデ		
287	I9区9	須恵器		甕										
288	J9区91	須恵器		坏蓋	10.5	3.4				濃青灰色	横ナデ・中央部平行ナデ	ヘラ削り・ナデ		
289		須恵器		坏身										
290	J9区90	須恵器		坏蓋	10.8	3.1			1mm大の石英が多い	濃青灰色	横ナデ・中央部平行ナデ	ヘラ削り・ナデ	ヘラ刻み	
291														
292	J9区62	須恵器		甕							同心円叩き	平行紋叩き		
293	J9区23	土師器		坏	13.2	4.3	5.0		C・K他砂粒多い	淡褐色	不定方向ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り	
294	J9区61	土師器		坏	13.0	2.5	7.6		C・K他砂粒多い	淡褐色			回転ヘラ切り	
295	J9区23	土師器		坏	14.0	3.6	8.0		C・K他砂粒多い	茶褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り	
296	J9区48	須恵器		坏身	12.0									
297	J9区66	瓦		軒丸瓦					C・Kが多い	暗灰色	布目痕	斜格子叩き		
298	J9区100	土師質		移動式甕					C・K他砂粒多い	明褐色	ナデ			
299	J9区4	土師器		甕	37.2				C・K他砂粒多い	暗褐色	不定方向ナデ	ナデ		
42	300	I8区表面採集	瓦	古代	平瓦	長8.5	幅9.5	厚2.4	C・Kが多い	茶褐色	布目痕	格子目叩き	ヘラ削り	
	301	G13区包含層	瓦	古代	平瓦	長14.0	幅10.0	厚2.8	Kが多い	灰色	布目痕	格子目叩き		
	302	B7区1	瓦	古代	平瓦	長10.5	幅12.5	厚3.2	K・砂粒が多い	白色	布目痕	縄目叩き	側面ヘラ削り	
	303	H9区PI一括	瓦	古代	平瓦	長25.3	幅16.9	厚1.6	C・K・A微量	鈍い黄橙色	布目痕	縄目叩き	側面ヘラ削り	
	304	I13区6	瓦	古代	丸瓦						布目痕	斜格子叩き		
305	I11区1	瓦	中世	丸瓦	長11.5	幅11.0	厚2.1	C・Kが多い	灰白色	斜目	縄目叩き			
43	306		須恵器		高台付碗			7.8	Sが多い	淡黒褐色				
	307	B4区表面採集	須恵器		円面硯	13.2								
	308	I13区南東部攪乱	須恵器		壺	17.4				C・K少量	灰色	ナデ	叩き	
	309	表面採集	須恵器		盤蓋	つまみ径4.8					濃青灰色	中央はナデ	ヘラ削り	硯転に用
	310	E6区攪乱	土師器		坏蓋	13.2				C・Kが多い	淡褐色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り
	311	攪乱溝	土師器		皿	18.4	1.3	15.6		C・Kが多い	茶褐色	回転ナデ	回転ナデ	
	312	E6区攪乱	土師器		坏蓋	14.0	2.0			C・K・Hが多い	橙褐色	回転ナデ	回転ナデ	
	313		土師器		坏	13.0	1.7							
	314	表面採集	土師器		坏	14.5	1.9			砂粒少量	橙色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り
	315	D7区攪乱	土師器		坏	13.2	3.3	6.4		Kが多い	橙褐色	回転ナデ	回転ナデ	
	316	D7区攪乱	土師器		坏	13.8				K・H多量	淡褐色	回転ナデ	回転ナデ	
	317	D7区攪乱	土師器		坏									
	318	I13区近世層	土師器		坏			9.0		C・K・Hが多い	橙褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り
	319	表面採集	土師器		坏			6.6		C・Kが微量	明褐色	回転ナデ	回転ナデ	外面上部剥離?
	321	E6区攪乱	須恵器		長頸壺					Sが多い	濃青灰色			
	322	北側斜面	須恵器		蓋									
	320	J9区東側攪乱	土師器		皿									
	323	表面採集	土師器		坏									
	324	築地中央攪乱	土師器		皿			7.2						
	325													
	326	北側斜面採集	陶器	近世	溝縁皿	14.6					茶褐色	回転ナデ	回転ナデ	重ね焼き
	327	表面採集	素焼き	近世	皿	10.4	2.4	6.0		精選された胎土	白褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り・匙に研
	328	表面採集	土師器		高坏									
	329	D7区攪乱	土師器		碗			6.5		C・Aが多い	明茶褐色	回転ナデ	回転ナデ	焼成後穿孔
	330	表面採集	土師器		皿	9.2	1.6	7.2		砂粒少量	茶褐色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り
	331	備前焼			掃鉢									
	332	備前焼			掃鉢									
	333	C8区	土師質		移動式甕					C・Kが少量、A多量	淡褐色	ナデ	ナデ	
334		銅製品												
335		銅製品		銅製品	長4.3	幅0.7	厚0.1						1.2gr	
336	芸短大6 t	土師器		台付皿	12.2	3.1	8.4		C・Kが多い	淡褐色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	
337	芸短大6 t	土師器		碗	12.4	4.4	8.0		C・Kが多い	淡褐色	回転ナデ・中央ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	
338	芸短大6 t	土師器		碗			8.8		C・Kが多い	淡褐色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	

図版 番号	遺物 番号	出土遺物	種 別	時 期	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	色 調	内面調整	外面調整	焼成・底面他
44	339	芸短大 6 t	土師器		坏	11.6	1.9	7.3	C・Kが多い	淡褐色	回転ナデ・中央ナデ	回転ナデ	板状圧痕
	340	芸短大 6 t	土師器		埴	10.0	4.0	5.0	C・Kが多い	淡褐色	回転ナデ・中央ナデ	回転ナデ	
	341	芸短大 6 t	土師質		土鍾				C・Kが多い				15.4gr
	342	芸短大 6 t	土師質		土鍾	長 4.8		幅 1.8	孔径 0.4	C・Kが多い			
	343	h26. 2t	須恵器	8c 中頃	台付皿	16.6	2.8	12.2	砂粒微量	暗灰色	横ナデ、底部ヘラ削り	横ナデ	
	344	h26. 2t	土師器	10 c 前半	坏	12.1	3.4	6.8	石英多	橙色	横ナデ	横ナデ・底部ヘラ切り	
	345	h26. 2t	土師器	10 c	坏	11.0	2.2	6.7	砂粒少量	灰褐色	横ナデ	横ナデ・底部ヘラ切り	
	346	h26. 2t	土師器	10 c ?	坏	—	—	—	砂粒少量	灰黄色	横ナデ	横ナデ・底部ヘラ切り	
	347	h26. 2t	土師器	—	坏	—	—	6.0	砂粒少量	暗橙色	横ナデ	横ナデ・底部ヘラ切り	底部破片
	348	h26. 2t	土師器	10 c ?	埴	—	—	8.6	砂粒少量	淡褐色	横ナデ	横ナデ・ナデ	体部下半～底部
	349	h26. 2t	土師器	10 c 前半	托	10.3	2.4	6.5	砂粒少量	暗橙色	横ナデ	横ナデ	
	350	h26. 2t	土師器	10 c 前半	托	13.3	—	—	砂粒少量	明黄橙色	横ナデ	横ナデ・ナデ	
	351	h26. 2t	土師器	10 c	托	—	—	5.5	砂粒少量	暗黄橙色	横ナデ	横ナデ・ナデ	底部
	352	h26. 2t	土師器	10 c	托	—	—	6.0	砂粒少量	暗黄橙色	横ナデ	横ナデ・ナデ	底部
	353	h26. 2t	土師器	10 c 前半	黒色土器	14.6	—	—	砂粒少量	内面暗褐色、外面暗褐色	ヘラミガキ	ヘラミガキ、底部ヘラ切り	高台を欠く
	354	h26. 2t	土師器		黒色土器	—	—	7.3	砂粒少量	内面暗褐色、外面暗褐色	ヘラミガキ	底部ヘラ切り	底部
	355	h26. 2t	土師質		有溝土鍾	長 7.4	幅 3.2	厚 2.6	砂粒少量	暗黄橙色	—	手握ね・ナデ	
	356	h26. 2t	土師質		有溝土鍾	長 9.6	幅 4.2	厚 2.5	砂粒少量	黒褐色	—	手握ね・ナデ	
	357	h26. 2t			移動式竈	—	—	—	砂粒少量	茶褐色	ナデ	ナデ	箱付近破片
	358	h26. 2t	瓦	8c ~ 9 c	丸瓦	—	—	—	砂粒少量	暗灰色	凹面布目	凸面カキ目状	破片
	359	h26. 2t	瓦	8c ~ 9 c	丸瓦	—	—	—	砂粒少量	暗灰色	凹面布目	凸面格子目・縹杉文	破片
	360	h26. 2t	瓦	8c ~ 9 c	平瓦	—	—	—	砂粒少量	灰褐色	凸面格子目	凹面布目	破片
	361	h26. 2t	瓦	8c ~ 9 c	平瓦	—	—	—	砂粒少量	灰褐色	凸面カキ目状	凹面布目	破片、分割界線
	362	h26. 2t	瓦	8c ~ 9 c	平瓦	—	—	—	砂粒少量	灰色	凸面カキ目状	凹面布目	15.4gr

# 写 真 图 版





真上からの全景



SB13・SB14  
SB15 周辺



SH1・SB1 周辺



E9 区から見た西部地区



H 10 区から見た SH2 周辺



東部の遺構検出作業風景





F 9区から見た北側調査区



築地出土の須恵器坏蓋



SD1 出土の鬼瓦ほか



C9区から見た東側調査区



C9区から見た北東側調査区（手前はSD1・SD2）



C 9区から見た中部



G 12区から見た北東側調査区



I 9区 SD1 の遺物出土状態（西から）



I 9区 SD1 の遺物出土状態（東から）



SD1 の遺物出土状態



D 7区 SD2 の掘下げ (第 24 図)

I 9区 SD2 (西から)



D 7区 SD1 の掘下げ (第 24 図)





SD6・SD7 (B3区・B4区を中心に)



調査区北西隅



SD7 (B3区) の遺物出土状態



SB1-P1



D7区 SD1 の掘下げ (第24図)



SB6-P1



SB1-P13



G9区から見た南東部調査区



SB9 周辺の遺構



B 7 区付近から見た南東部



築地遺構 (SD1・SD2) 東端部の調査風景





F 10 区から見た SB13・SB14・SB15・SH12



H 8 区周辺の SD1・SD2・SD3



左の隣接写真



H 11 区から見た北西側調査区 (手前は SB14)



E 12 区から見た北東側調査区



築地遺構 (SD1・SD2) の東端部



SB9・SB10 周辺遺構



SBI (南から)



SD13 の調査風景



発掘風景



I 9区東端のSD12 (東から)



SK5の掘下げ



SD6・SB4の検出状態



SD13 近景



短期大学構内の試掘風景



一般見学者のための現地説明会





205



196



2



195



174



147



157



212



118





33



65



66



64



67





122



121



123



124



82



125



300



32



38



47



48



58



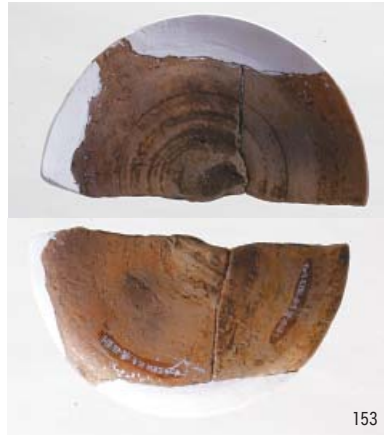
100



92



149



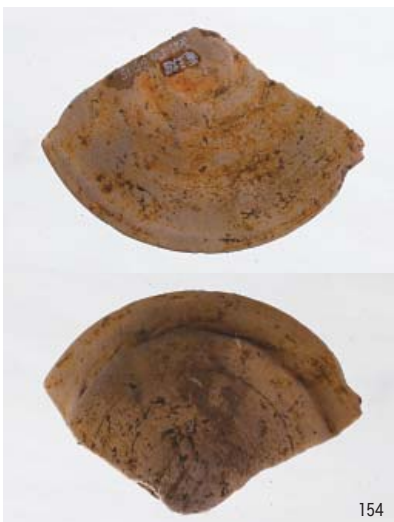
153



152



155



154



156



157





314



340



338



336



328







223



215



254



248



43



293



271





2区完掘状態



2区南壁



2区西壁



3区完掘状態



4区完掘状態



6区完掘状態



7区完掘状態



10区完掘状態

# 報告書抄録

ふりがな	りゅうおうばたいせき
書名	竜王畑遺跡
副書名	大分県立芸術文化短期大学施設整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第84集
編著者名	原田昭一・小林昭彦・高橋信武
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田1977番地
発行年月日	2015(平成27)年3月27日

ふりがな	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
所収遺跡名 りゅうおうばたいせき 竜王畑遺跡 うえのいせきぐん 上野遺跡群	大分市	44203	203004	33° 35′ 51	131° 10′ 55	20101026 ～ 20101221	1,056 m <sup>2</sup>	学校施設整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	特記事項
竜王畑遺跡 上野遺跡群	官衙関係遺跡	古代	土師器 須恵器 陶磁器類 瓦類	
要約	竜王畑遺跡では、7世紀後半～10世紀の古代を中心とする3期の掘立柱建物群を検出した。建物の規模・構造や出土遺物（供膳形態が主体の土器、越州窯青磁、円面硯）などから「曹司」など国府関連遺跡であることが考えられる。			

---

---

## 竜王畑遺跡

—大分県立芸術文化短期大学施設整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—  
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第84集

2015（平成27）年3月27日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター  
〒870-1113 大分市大字中判田1977番地  
電話 097-597-5675  
印刷 株式会社フタバ印刷社  
〒874-0930 大分県別府市光町8-28  
電話 0977-21-1328

---

---



付図 竜王畑遺跡 遺構配置図 (1 / 300)